

# 若草町遺跡

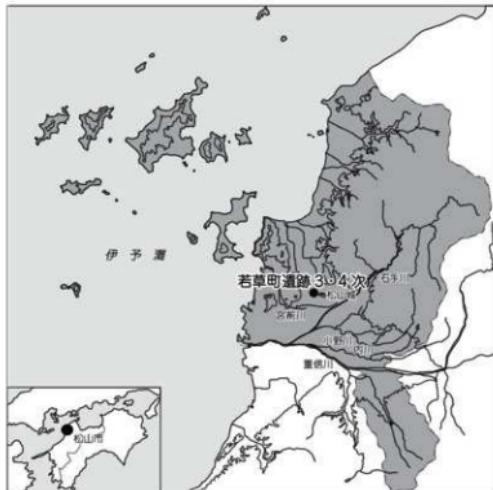
- 3次・4次調査 -

2022

松山市教育委員会  
公益財團法人松山市文化・スポーツ振興財團  
埋蔵文化財センター

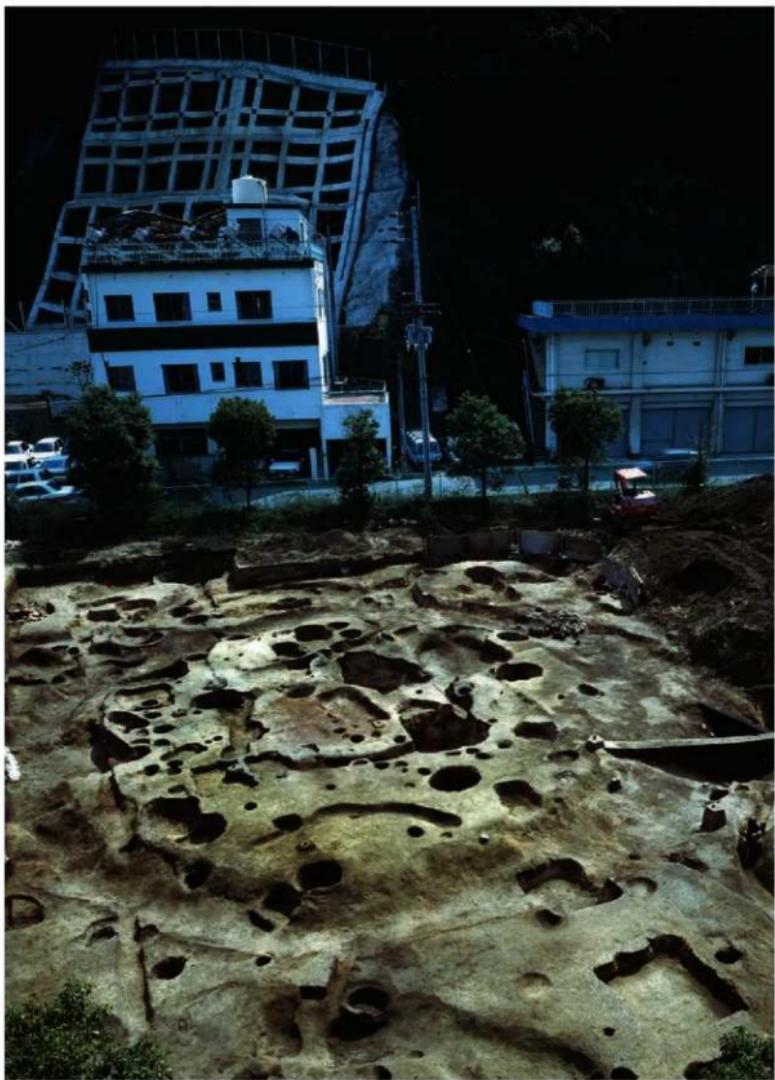
わかくさちょう  
**若草町遺跡**

- 3次・4次調査 -



2022

松山市教育委員会  
公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団  
埋蔵文化財センター



1. 3次調査 2区 完掘状況（西より）



1. 3次調査 出土遺物 (SX1 出土)



2. 3次調査 出土遺物 (包含層出土; 底部外面に刻印をもつ土師器坏 233、朱が内外面に施された蓋 245)

## 序　　言

本書は、平成5年度と平成26年度に発掘調査をおこなった若草町遺跡3次・4次調査の調査報告書です。

若草町遺跡は松山城西麓に立地し、弥生時代から近世にいたる貴重な遺構や遺物が多数確認される地区にあります。平成元年度の1次調査では、日本で初めて「見日之光長母忘君」の銘文をもつ前漢鏡が出土するとともに、多数の周溝墓が見つかっています。つづく、愛媛県埋蔵文化財調査センターが実施した2次調査では、弥生時代終末期の土器が大量に出土した大型円形周溝や竪穴建物跡、古墳時代後期の横穴式石室を主体部とする古墳などが見つかっています。

今回報告する3次調査では、弥生時代終末～古墳時代初頭の周溝墓を確認し、近畿地方との関係を示す古墳時代初頭の二重口縁壺や手彫り形土器などが出土しています。また、4次調査では横穴式石室を持つ古墳1基などを調査しました。これらの資料は松山平野の弥生時代終末～古墳時代の墓制を考えるうえで貴重な資料となるものです。

このような成果を上げることができましたのは、関係各位の埋蔵文化財行政に対する深いご理解とご協力の賜物であり、心より感謝申し上げます。また、本書が、今後の埋蔵文化財調査研究、文化財保護及び生涯学習等を通じ、多くの方々にご活用いただければ幸いに存じます。

令和4年3月

松山市教育委員会

教育長　藤田　仁

## 例　　言

1. 本書は、財團法人松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センターが1993（平成5）年10月25日から1994（平成6）年3月31日の間、松山市の公共施設建設に伴い実施した若草町遺跡3次調査と、公益財團法人松山市文化・スポーツ振興財團埋蔵文化財センターが2014（平成26）年4月14日～同年5月9日の間実施した民間の開発に伴い実施した若草町遺跡4次調査の埋蔵文化財調査報告書である。
2. 整理作業及び報告書作成作業は、公益財團法人松山市文化・スポーツ振興財團埋蔵文化財センターが行った。
3. 本書で使用した遺構名は略号化し、堅穴建物：S B、掘立柱建物：掘立、溝：S D、土坑：S K、井戸：S E、柱穴：S P、性格不明遺構：S Xで記述した。
4. 本書で使用した標高数値はすべて海拔標高を示す。方位は3次調査が磁北、4次調査は国土座標を基準とした真北である。4次調査の国土座標軸測量は、南海測量設計株式会社に業務委託した。
5. 本報告書の遺構埋土・土層の色調は、3次調査が農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帖』（1989）、4次調査は『新版標準土色帖』（2003）に準拠した。
6. 屋外調査での写真は調査担当者のほか大西朋子が撮影を行った。報告書作成に関わる遺物写真と図版作成は大西朋子が担当した。
7. 遺物の復元及び実測・製図は調査担当者の指示のもと池内芳美・越智田美紀・木下奈緒美・木西嘉子・佐伯利枝・丹生谷道代・平岡直美・松本美代子・村上真由美・山下満佐子が行った。
8. 本書掲載の遺構図や遺物図の縮尺は縮分値をスケール下に記した。
9. 本書の執筆は各調査担当者が行い、編集は相原浩二が行った。執筆にあたっては、基本的に概要報告・年報に掲載された文章や図面を参考にし、一部については加筆や修正を行った。
10. 若草町遺跡3次調査の周溝墓3の木棺痕跡の検出には、愛媛大学　田崎博之先生にご教示を頂いた。ここに記して感謝を申し上げる。
11. 本書に掲載した記録類や遺物は、松山市立埋蔵文化財センターにおいて保管されている。

## 目 次

第Ⅰ章 はじめに.....	1
第1節 調査に至る経緯.....	1
第2節 組織.....	2
第Ⅱ章 遺跡の立地と歴史的環境.....	3
第1節 地理的環境.....	3
第2節 歴史的環境.....	5
第Ⅲ章 若草町遺跡3次調査.....	7
第1節 調査の経過.....	7
第2節 土層.....	9
第3節 遺構と遺物.....	9
第4節 小結.....	61
第Ⅳ章 若草町遺跡4次調査.....	65
第1節 調査の経過.....	65
第2節 層位.....	67
第3節 遺構と遺物.....	72
第4節 小結.....	86

## 挿図目次

### 第Ⅰ章

第 1 図 若草町遺跡 1 ~ 4 次調査地 ..... 1

### 第Ⅱ章

第 2 図 松山平野の地形概要図 ..... 3

第 3 図 調査地と周辺の遺跡 ..... 4

### 第Ⅲ章 若草町遺跡 3 次調査

第 4 図 調査区位置図とグリッド図 ..... 8 第 34 図 SK1 出土遺物実測図 ..... 34

第 5 図 北壁土層図 ..... 10 第 35 図 SK2 測量図 ..... 34

第 6 図 全遺構平面図 ..... 11 第 36 図 SK2 出土遺物実測図 ..... 34

第 7 図 弥生時代~古墳時代の遺構平面図 ..... 13 第 37 図 SK3 測量図 ..... 35

第 8 図 周溝墓 1 (SK44・SD3) 測量図 ..... 15 第 38 図 SK3 出土遺物実測図 ..... 35

第 9 図 周溝墓 1 (SK44・SD3) 出土遺物実測図 ..... 15 第 39 図 SK7 測量図 ..... 36

第 10 図 周溝墓 2 (SK33・SD9) 測量図 ..... 16 第 40 図 SK7 出土遺物実測図 ..... 36

第 11 図 周溝墓 2 (SK33) 測量図 ..... 17 第 41 図 SK10 測量図 ..... 37

第 12 図 周溝墓 2 (SD9) 出土遺物実測図 ..... 17 第 42 図 SK10 出土遺物実測図 ..... 37

第 13 図 周溝墓 3 (SD6・SX1) 測量図と遺物分布図 ..... 18 第 43 図 SK11 測量図 ..... 37

第 14 図 周溝墓 3 (SD6) 出土遺物実測図① ..... 19 第 44 図 SK11 出土遺物実測図 ..... 37

第 15 図 周溝墓 3 (SD6) 出土遺物実測図② ..... 20 第 45 図 SK12 測量図 ..... 38

第 16 図 周溝墓 3 (SD6) 出土遺物実測図③ ..... 22 第 46 図 SK12 出土遺物実測図 ..... 38

第 17 図 SX1 測量図 ..... 23 第 47 図 SK14 測量図 ..... 38

第 18 図 SX1 出土遺物実測図 ..... 24 第 48 図 SK14 出土遺物実測図 ..... 38

第 19 図 周溝墓 4 (SD7) 測量図 ..... 25 第 49 国 SK18 測量図 ..... 39

第 20 図 周溝墓 4 (SD7) 出土遺物実測図 ..... 26 第 50 国 SK18 出土遺物実測図 ..... 39

第 21 国 周溝墓 5 (SD8) 測量図 ..... 27 第 51 国 SK22 測量図 ..... 39

第 22 国 周溝墓 5 (SD8) 出土遺物実測図 ..... 27 第 52 国 SK22 出土遺物実測図 ..... 39

第 23 国 周溝墓 6 (SD10) 測量図 ..... 28 第 53 国 SK23 測量図 ..... 40

第 24 国 周溝墓 6 (SD10) 出土遺物実測図 ..... 28 第 54 国 SK23 出土遺物実測図 ..... 40

第 25 国 周溝墓 7 (SD11) 測量図 ..... 29 第 55 国 SK34 測量図 ..... 40

第 26 国 周溝墓 7 (SD11) 出土遺物実測図① ..... 29 第 56 国 SK34 出土遺物実測図 ..... 40

第 27 国 周溝墓 7 (SD11) 出土遺物実測図② ..... 30 第 57 国 SK35 測量図 ..... 42

第 28 国 周溝墓 8 (SD12) 測量図 ..... 30 第 58 国 SK35 出土遺物実測図 ..... 42

第 29 国 SD13 測量図 ..... 31 第 59 国 SK36 測量図 ..... 42

第 30 国 SD13 出土遺物実測図 ..... 31 第 60 国 SK36 出土遺物実測図 ..... 42

第 31 国 SD1 測量図 ..... 32 第 61 国 壈棺と SK11 測量図 ..... 43

第 32 国 SD1 出土遺物実測図 ..... 33 第 62 国 壈棺測量図 ..... 43

第 33 国 SK1 測量図 ..... 34 第 63 国 壈棺実測図 ..... 43

第 64 図	堅穴建物 (SB1) 測量図	44	第 78 図	SK025 測量図	55
第 65 図	SB1 出土遺物実測図①	44	第 79 図	SK025 出土遺物実測図	55
第 66 図	SB1 出土遺物実測図②	44	第 80 図	SK033 測量図	55
第 67 図	掘立柱建物 (SP16 ~ 22) 測量図	45	第 81 図	SK033 出土遺物実測図	55
第 68 図	SP22 出土遺物実測図	45	第 82 図	SK043 測量図	55
第 69 図	包含層・その他出土遺物実測図①	46	第 83 図	SK043 出土遺物実測図	55
第 70 図	包含層・その他出土遺物実測図②	47	第 84 図	SK049 測量図	56
第 71 図	包含層・その他出土遺物実測図③	48	第 85 図	SK049 出土遺物実測図①	56
第 72 図	包含層・その他出土遺物実測図④	49	第 86 図	SK049 出土遺物実測図②	56
第 73 図	包含層・その他出土遺物実測図⑤	50	第 87 図	SE01 測量図	58
第 74 図	包含層・その他出土遺物実測図⑥	51	第 88 図	SE01 出土遺物実測図	58
第 75 図	包含層・その他出土遺物実測図⑦	52	第 89 図	中世以降の出土遺物実測図①	59
第 76 図	包含層・その他出土遺物実測図⑧	53	第 90 図	中世以降の出土遺物実測図②	60
第 77 図	包含層・その他出土遺物実測図⑨	54	第 91 図	若草町遺跡 1 次・3 次調査地遺構合成図	62

#### 第IV章 若草町遺跡 4次調査

第 1 図	周辺の遺跡分布図	66	第 13 図	SD1 出土遺物実測図	80
第 2 図	調査位置図	67	第 14 図	SD2 測量図	81
第 3 図	北壁・東壁土層図	69	第 15 図	SD3 測量図	81
第 4 図	南壁・西壁土層図	70	第 16 図	SK1 測量図・出土遺物実測図	82
第 5 図	遺構配置図	71	第 17 図	SK2 測量図・出土遺物実測図	83
第 6 図	若草 7 号墳石室測量図 (1)	73	第 18 図	SK3 測量図	84
第 7 図	若草 7 号墳石室測量図 (2)	74	第 19 図	SK4・SK5 測量図	84
第 8 図	若草 7 号墳石室測量図 (3)	75	第 20 図	包含層出土遺物実測図	86
第 9 図	若草 7 号墳石室内出土遺物実測図	76	第 21 図	地点不明出土遺物実測図 (1)	87
第 10 図	若草 7 号墳墓壙内出土遺物実測図	77	第 22 図	地点不明出土遺物実測図 (2)	88
第 11 図	掘立 1 測量図・出土遺物実測図	78	第 23 図	若草町遺跡 2 次調査 古墳時代後期遺構配置図	90
第 12 図	SD1 測量図	79			

#### 表目次

表 1	若草町遺跡一覧	1	表 10	掘立 1 出土遺物観察表 土製品	94
表 2	墓壙一覧	92	表 11	SD1 出土遺物観察表 土製品	94
表 3	掘立柱建物一覧	92	表 12	SK1 出土遺物観察表 土製品	94
表 4	溝一覧	92	表 13	SK2 出土遺物観察表 土製品	95
表 5	土坑一覧	92	表 14	包含層出土遺物観察表 土製品	95
表 6	柱穴一覧	92	表 15	地点不明出土遺物観察表 土製品	95
表 7	若草 7 号墳石室内出土遺物観察表 土製品	93	表 16	地点不明出土遺物観察表 石製品	96
表 8	若草 7 号墳石室内出土遺物観察表 金属製品	93	表 17	地点不明出土遺物観察表 錢貨	96
表 9	若草 7 号墳墓壙内出土遺物観察表 土製品	93			

## 写真図版目次

### 第Ⅲ章 若草町遺跡3次調査

- |  |   |
|--|---|
| 図版 1 1. 若草町遠望（西より）<br>2. 3次・4次調査地遠景（西上空より）   | 図版 8 1. 2区 周溝墓2[SK33] 挖削状況（東より）<br>2. 2区 SX1 遺物出土状況（南より）<br>3. 2区 SX1 遺物出土状況（北東より）  |
| 図版 2 1. 調査前状況（南東より）<br>2. 2区 北壁土層堆積状況（南より）   | 図版 9 1. 2区 周溝墓3・SD6 土層堆積状況（北西より）<br>2. 2区 掘立1・SP22とSD7 土層断面（南より）  |
| 図版 3 1. 1区 全景と遺構検出状況（東より）<br>2. 1区 周溝墓1 挖削状況（東より）  | 図版 10 1. 1区 遺構完掘状況（東より）<br>2. 2区 遺構完掘状況（西より）  |
| 図版 4 1. 1区 周溝墓3・SD6 挖削状況（東より）<br>2. 2区 周溝墓3・SX1 挖削状況（北西より）<br>3. 1区 周溝墓3・SD6 遺物出土状況（南より）   | 図版 11 1. 出土遺物（周溝墓1、周溝墓2、周溝墓3）<br>図版 12 1. 出土遺物（周溝墓3・SD6）<br>図版 13 1. 出土遺物（周溝墓4、5、7、SD1）<br>図版 14 1. 出土遺物（SX1）<br>図版 15 1. 出土遺物（SK1、2、3、7、34、36）<br>図版 16 1. 出土遺物（壺棺、SB1、掘立1 SP22）<br>図版 17 1. 出土遺物（包含層・その他）<br>図版 18 1. 出土遺物（包含層・その他） |
| 図版 5 1. 1区 周溝墓1・SD3 遺物出土状況（南より）<br>2. 1区 SK1 遺物出土状況（東より）<br>3. 1区 SK3 検出状況（北より）<br>4. 1区 SK2 検出状況（東より）<br>5. 1区 壺棺検出状況①（東より）<br>6. 1区 壺棺検出状況②（北より）<br>7. 1区 SK11 挖削状況（東より）<br>8. 1区 SB1 挖削状況（南東より） | 図版 19 1. 出土遺物（包含層・その他、井戸跡SE01）<br>図版 20 1. 出土遺物（SK33、SK049、その他）   |
| 図版 6 1. 2区 遺構検出状況（南より）<br>2. 2区 周溝墓2[SK33・SD9] 完掘状況（北より）   |   |
| 図版 7 1. 2区 周溝墓2[SK33・SD9] 検出状況（北より）<br>2. 2区 周溝墓2[SK33] 検出状況（北より）  |   |

### 第Ⅳ章 若草町遺跡4次調査

- |   |  |
|---|--|
| 図版 21 1. 調査地全景（南より）<br>2. 基本土層（南東より）                                | 3. 掘立1 SP3 検出状況（北より）<br>4. SK2 完掘状況（北より）   |
| 図版 22 1. 遺構完掘状況（北東より）<br>2. 若草7号墳遺物出土状況（北より）                        | 5. SD2 検出状況（南より）<br>6. SD2 完掘状況（南西より）  |
| 図版 23 1. 披張区遺構検出状況（北より）<br>2. 若草7号墳石室全景（北より）                        | 7. SD3 検出状況（北より）<br>8. SD3、SK3・5 完掘状況（北東より）                                      |
| 図版 24 1. SD1 遺物出土状況（南より）<br>2. SD1 遺物出土状況（西より）<br>3. SD1 完掘状況（南東より） | 図版 26 1. 出土遺物（若草7号墳、掘立1）<br>図版 27 1. 出土遺物（SD1①）<br>図版 28 1. 出土遺物（SD1②、SK1・2、第Ⅲ層） |
| 図版 25 1. 掘立1 SP1 検出状況（北より）<br>2. 掘立1 SP2 遺物出土状況（南より）                | 図版 29 1. 出土遺物（地点不明）  |

# 第Ⅰ章 はじめに

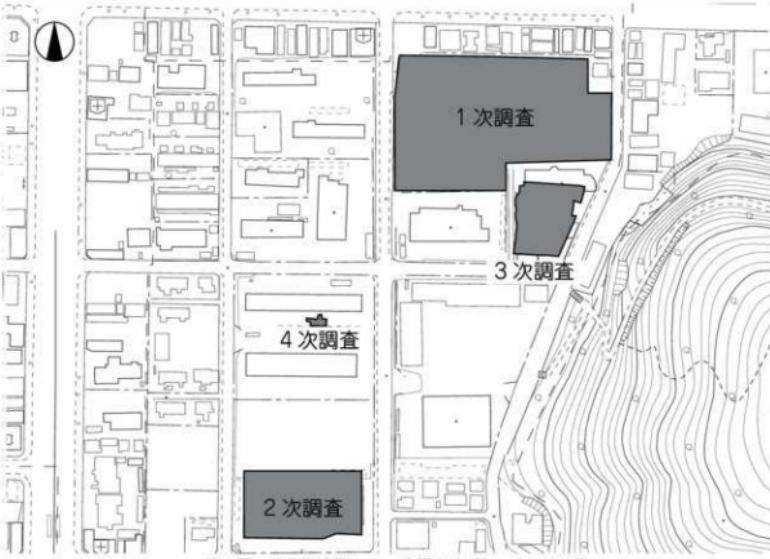
## 第1節 調査に至る経緯

本書掲載の二遺跡は、埋蔵文化財包蔵地『No212若草町遺跡』内における公共施設(3次調査)と民間開発(4次調査)に伴い埋蔵文化財の発掘調査を実施したものである。

若草町遺跡3次調査は、財団法人松山市生涯学習振興財團(現 公益財団法人文化・スポーツ振興財團)が松山市児童福祉課と委託契約を結び平成5年度に行なった調査である。一方、若草町遺跡4次調査は、同財團が四国旅客鉄道株式会社代表取締役社長 泉雅文氏と委託契約を結び、平成26年度に実施した調査である。各調査の所在地や調査面積、調査期間は以下に記す。なお、両遺跡に関する報告書の刊行作業は令和3年度に公益財団法人文化・スポーツ振興財團埋蔵文化財センターが実施した。

表1 若草町遺跡一覧

	所在地	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査要因
若草町1次	若草町8番地	平成元年1月5日～ 同年10月31日	9000.0	松山市総合福祉センター建設
若草町2次	若草町4番地3・4	平成5年5月24日～ 平成6年2月28日	2500.0	松山第2合同庁舎建設
若草町3次	若草町8番地2外	平成5年10月25日～ 平成6年3月31日	2217.7	松山市ハーモニープラザ建設
若草町4次	若草町4番1の一部	平成26年4月14日～ 同年5月9日	約28.0	介護施設の新築



第1図 若草町遺跡 1～4次調査地 (S = 1:2500)

## 第2節 組織

### (1) 調査組織

〔平成5年度 若草町遺跡3次調査〕

松山市教育委員会

事務局	教育長	池田 尚郷	理事長	田中 誠一
	参 事	池田 秀雄	事務局	局 長 渡辺 和彦
		渡辺 和彦		次 長 一色 正士
文化教育課	次 長	和田 彰	埋蔵文化財センター	所 長 河口 雄三
		日野 正寛		次 長 田所 延行
		渡部 泰介		管理係長 田所 延行
		三好 俊彦		学芸係長 德永 幸紀
	課 長	松平 泰定		調査係長 西尾 幸則
	課長補佐	中矢 正幸		調査員 相原 浩二
	第二係長	小池 秀雄		河野 史知
			(写真担当)	大西 朋子

〔平成26年度 若草町遺跡4次調査〕

松山市教育委員会

事務局	教育長	山本 昭弘	理事長	中山 敏治郎
	局 長	樹田 二郎	事務局	局 長 中西 真也
	次 長	津田 憲吾		次 長 紺田 正彦
文化財課		隅田 完二	施設管理部	部 長 玉井 弘幸
	課 長	若江 俊二	埋蔵文化財センター	所 長 田城 武志
	主 幹	篠原 昭二		主 査 山之内 志郎
	主 査	楠 寛輝		主 査 橋本 雄一
				主任 水本 完児
			(写真担当)	大西 朋子

### (2) 整理・編集・刊行組織

〔令和3年度〕

松山市教育委員会

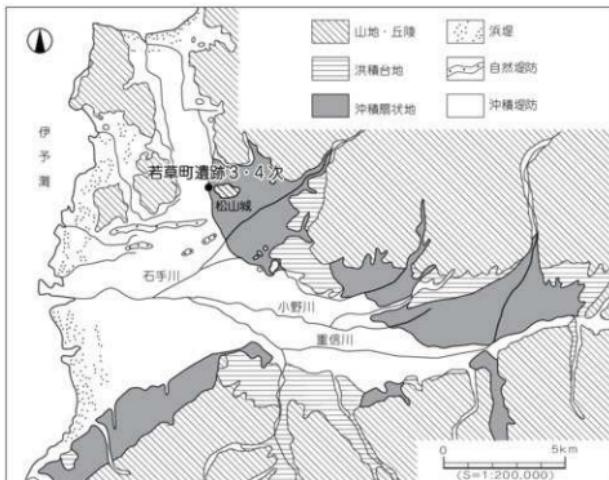
事務局	教育長	藤田 仁	理事長	本田 元広
	局 長	井手 修敏	事務局	局 長 片山 雅央
	次 長	西村 秀典		次 長 杉野 公典
			施設管理部	部 長 杉野 公典

文化財課	課長 二宮 仁志	埋蔵文化財センター	所長 梅木 謙一
	主幹 高橋 秀忠		主査 吉岡 和哉
	副主幹 楠 寛輝		主任 水本 完児
	主任 山内 英樹		宮内 憲一
		(編集担当)	相原 浩二
		(写真担当)	大西 朋子

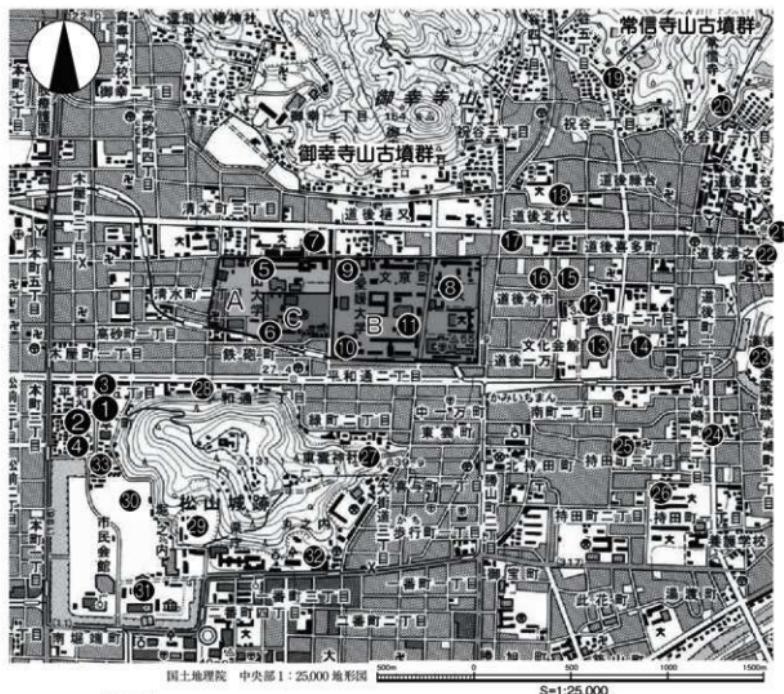
## 第Ⅱ章 遺跡の立地と歴史的環境

### 第1節 地理的環境

松山平野は四国の北西部に位置し、東は山地を背にして西は瀬戸内海に開ける。平野は、主に重信川やそのほか大小の河川によって形成された扇状地や氾濫原、三角州性の堆積物や海岸部の海浜堆積物で構成されている。重信川の支流である石手川は、高繩山塊の水ヶ峰に源を発し平野の北東部を南西方向に流れ、重信川に合流し伊予灘に注ぐ河川である。石手川は、平野への入り口である岩塙から江戸時代のはじめに河川の改修によって流路を代えられ現在に至っている。若草町遺跡は石手川によって形成された扇状地（石手川扇状地）の扇端付近、国指定史跡の松山城が所在する勝山の西麓直近の標高23m付近に立地している。



第2図 松山平野の地形概要図



## 調査地

- 1 : 若草町遺跡 3 次  
2 : 若草町遺跡 4 次

- |                      |                   |
|----------------------|-------------------|
| 3 : 若草町遺跡 1 次        | 21 : 道後湯月町遺跡      |
| 4 : 若草町遺跡 2 次        | 22 : 道後冠山遺跡       |
| 5 : 松山大学構内遺跡 2 次・6 次 | 23 : 湯築城跡         |
| 6 : 松山北高等学校遺跡 2 次    | 24 : 岩崎遺跡         |
| 7 : 道後城北 RNB 遺跡      | 25 : 持田町 3 丁目遺跡   |
| 8 : 文京遺跡 4 次         | 26 : 持田遺跡         |
| 9 : 文京遺跡 9 次         | 27 : 東雲神社遺跡       |
| 10 : 文京遺跡 10 次       | 28 : 松山城北郭遺跡      |
| 11 : 文京遺跡 11 次       | 29 : 松山城二之丸跡      |
| 12 : 道後今市遺跡 1 次      | 30 : 松山城三之丸跡      |
| 13 : 道後今市遺跡 3 次      | 31 : 松山城跡内県民館跡地遺跡 |
| 14 : 道後今市遺跡 4 次      | 32 : 番町遺跡         |
| 15 : 道後今市遺跡 7 次      | 33 : カキツバタ遺跡      |
| 16 : 道後今市遺跡 8 次      |                   |
| 17 : 道後今市遺跡 9 次      | A : 松山大学構内遺跡      |
| 18 : 土居塚遺跡           | B : 文京遺跡          |
| 19 : 祝谷畠中遺跡          | C : 松山北高等学校遺跡     |
| 20 : 湯之町廃寺           |                   |

第3図 調査地と周辺の遺跡

## 第2節 歴史的環境

若草町遺跡が所在する石手川扇状地のうち、道後温泉周辺から勝山と御幸寺山に挟まれた東西2km、南北1kmほどの範囲は道後城北遺跡群と呼ばれ、松山平野の主要な遺跡群として知られている。そのうち中央部に文京遺跡がある。文京遺跡は愛媛大学を中心に、日本赤十字病院、東雲小学校、松山東中学校の一带に展開する。54次に及ぶ調査が行われ、弥生時代中期後葉から後期にかけての堅穴建物200棟前後が見つかり、弥生時代の大規模な集落地として全国的にも注目されている遺跡である。若草町遺跡は、この文京遺跡の南西方向約600mに所在し、これまでに4次の調査が行われ、弥生時代～近世にいたる貴重な遺構・遺物がたくさん見つかっている。ここでは、道後城北遺跡群と勝山（松山城）周辺の遺跡について時代毎に概観していくこととする。

### 縄文時代

文京遺跡24次調査（愛媛大学理学部構内）では、前期末の土器が包含層より出土している。文京遺跡4次調査のB区では、出土層不明ながら縄文時代中期の土器片2点採取している。文京遺跡11次調査では、後期の屋外炉が検出されているほか、24・27・30次調査などでは土器や焼土、炭化物の集中が確認されている。文京遺跡8・9次調査や道後城北RNB遺跡では後期～晚期後葉の包含層が検出されている。土居窓遺跡からは後期～晚期にかけての土器が出土している。道後市遺跡では、晚期後葉の土器が出土している。持田町3丁目遺跡では、晚期中葉の遺物が出土している。岩崎遺跡では後・晚期の遺物が出土している。

### 弥生時代

松山東中学校の構内で行われた文京遺跡4次調査では、前期前半の松菊里型住居を検出している。持田町3丁目遺跡では、前期前半～後半の土坑墓・木棺墓・土器棺墓群が検出されている。前期末～中期初頭の遺跡には道後冠山遺跡、姫塚遺跡、土居窓遺跡、岩崎遺跡がある。土居窓III遺跡では、櫛状木器や木鍬などの木製品が出土している。中期中葉になると祝谷地区の丘陵部には平形銅劍が出土した祝谷六丁場遺跡、多数の貯蔵穴を検出した大地ヶ田遺跡や大規模な環濠集落と考えられる祝谷畠中遺跡が分布する。このほか、勝山の東丘陵上には、土坑から一括遺物が出土した東雲神社遺跡が知られる。平地部の遺跡は希薄となり、丘陵部への移動という傾向がうかがえる。中期後半～後期前半は、文京遺跡が盛期を迎える。集落の中心部には、大型の掘立柱建物や、溝を伴う方形の祭壇とされる方形周溝状遺構を配置し東西300m、南北200mの範囲に堅穴建物や掘立柱建物跡が密集し、松山平野の盟主的な拠点集落と考えられている。後期中葉～末にかけての遺跡は、松山大学構内遺跡や松山北高遺跡、若草町遺跡などがある。若草町遺跡2次調査地では堅穴建物跡や大溝が見つかっている。この大溝からは弥生時代の後期後半から古墳時代初頭にかけての土器が大量に出土している。

### 古墳時代

古墳時代の集落は、弥生時代と比べるとやや希薄となる。松山大学構内遺跡2次、松山北高等学校遺跡2次では、前期の堅穴建物跡が検出されている。中期～後期にかけては松山大学構内遺跡で堅穴建物跡や溝、土坑など多数の遺構・遺物を検出している。文京遺跡14次調査では、カマドを付設する堅穴建物群が見つかり、フイゴの羽口や鉄滓の出土が確認されている。古墳は、道後城北遺跡群の北側～東側にかけての丘陵部に御幸寺山古墳群、常信寺山古墳群、桜谷古墳群、石手寺古墳群などが

あり、中期～後期の古墳が広く分布している。このほか、松山城がある勝山丘陵部には後期古墳が数多く分布するほか、勝山西麓の平地部にある若草町遺跡2次調査でも後期古墳を確認している。

#### 古代

道後地区には、白鳳時代の寺院址である湯之町廐寺、内代廐寺の存在が知られている。道後温泉本館の東側に隣接する道後湯月町遺跡では、池跡が発見され、飛鳥時代～平安時代の土器や瓦が出土している。岩崎遺跡では、奈良時代後半の区画溝や平安時代の掘立柱建物跡などが検出されている。松山大学構内遺跡6次調査では、平安時代の掘立柱建物跡、土坑や溝を検出している。溝の埋土からは、その出土が珍しい石帶が2点出土している。

#### 中世以降

道後地区には、国指定史跡湯築城跡がある。湯築城は、南北朝以降の250年間にわたって伊予を支配した河野氏の居城である。河野氏の没落による1585年以降、伊予の領主となった小早川隆景や福島正則がこの城に居を構えた。その後の1601年、加藤嘉昭が勝山に松山城を築城することとなり、政治・文化の中心が道後から勝山周辺に移ることとなった。

湯築城の調査では、二重に巡らされた堀、土塁、礎石建物などが確認されている。松山城関係の発掘調査には、松山城二之丸跡、三之丸跡、県民館跡地遺跡などがあり、史跡の整備・保存が行われている。

#### 〔主要参考文献〕

- 宮内慎一ほか 2014『道後城北遺跡群Ⅲ』松山市文化財調査報告書169  
栗田茂敏 2006『番町遺跡』松山市文化財調査報告書109  
宮内慎一ほか 2008『道後湯月町遺跡・道後湯之町遺跡』松山市文化財調査報告書123  
山之内志郎ほか 2007『松山大学構内遺跡Ⅳ－6次調査－』松山市文化財調査報告書115  
土井光一郎 2000『史跡「松山城跡」内 県民館跡地』愛媛県埋蔵文化財発掘調査報告書第81集  
松山市史料集編集委員会 1986 松山市史料集第2巻考古編

## 第Ⅲ章 若草町遺跡3次調査

### 第1節 調査の経過

#### 1. 調査に至る経緯

平成5年1月6日、松山市福祉部児童福祉課（以下、申請者という）より松山市若草町8番地2の一部外1筆（以下、申請地といふ）における埋蔵文化財の試掘調査申込書が松山市教育委員会文化教育課（現、文化財課）に提出された。申請地の北側隣地では平成元年に若草町遺跡1次調査として調査され、弥生時代から近世に至る遺構や貴重な遺物がたくさん見つかっている。

のことから、平成5年10月に試掘調査を実施した。試掘調査は申請地内に4本のトレーナーを設定し遺構・遺物の有無について調査を行った結果、弥生時代～近世に至る遺構・遺物を確認した。この結果を受けて申請者と文化教育課は埋蔵文化財の発掘調査についての協議を行い、平成5年10月25日より申請地全体について発掘調査を実施する事となった。調査は申請者の委託を受けて（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センターが主体となり実施した。

#### 2. 調査の経過

発掘調査は平成5年10月25日から平成6年3月31日まで実施した。表土掘削においては、排土を場外搬出できなかったことから、掘削排土の置き場の確保のため南側（1区）と北側（2区）に分けて行った。調査グリッドの設定は4mメッシュで東から西へA、B、C…、南から北へ1、2、3…とした。調査は最初に1区から開始した。以下、調査工程を略記する。

10月25日：調査区の設定作業。調査区外周の安全確保のためロープによる縄張りを行う。

26日：重機により1区の掘削を開始する。遺構確認面まで掘り下げ遺構検出作業を行う。

28日：重機による1区の掘削を終了する。

11月29日：遺構検出作業を終了する。遺構検出状況の写真撮影を実施後、遺構の掘削を開始。

6日：各グリッド間の土層観察用ベルトの撤去作業。

12月7日：壺棺1の写真撮影と測量作業を行う。

17日：堅穴建物SB1カマド掘り下げ。SD6掘り下げ。SX1より二重口縁壺1点出土する。

20日：SB1の測量作業と完掘作業を終了する。

1月6日：高所作業車を使用し遺構完掘写真撮影を行う。

7日：1区の埋め戻しと2区の掘削を開始する。

14日：2区遺構検出作業を開始する。

21日：遺構検出作業を終了し、遺構配置図を作成する。

25日：近世遺構の掘削を開始する。遺構の測量作業も掘削と並行して実施する。

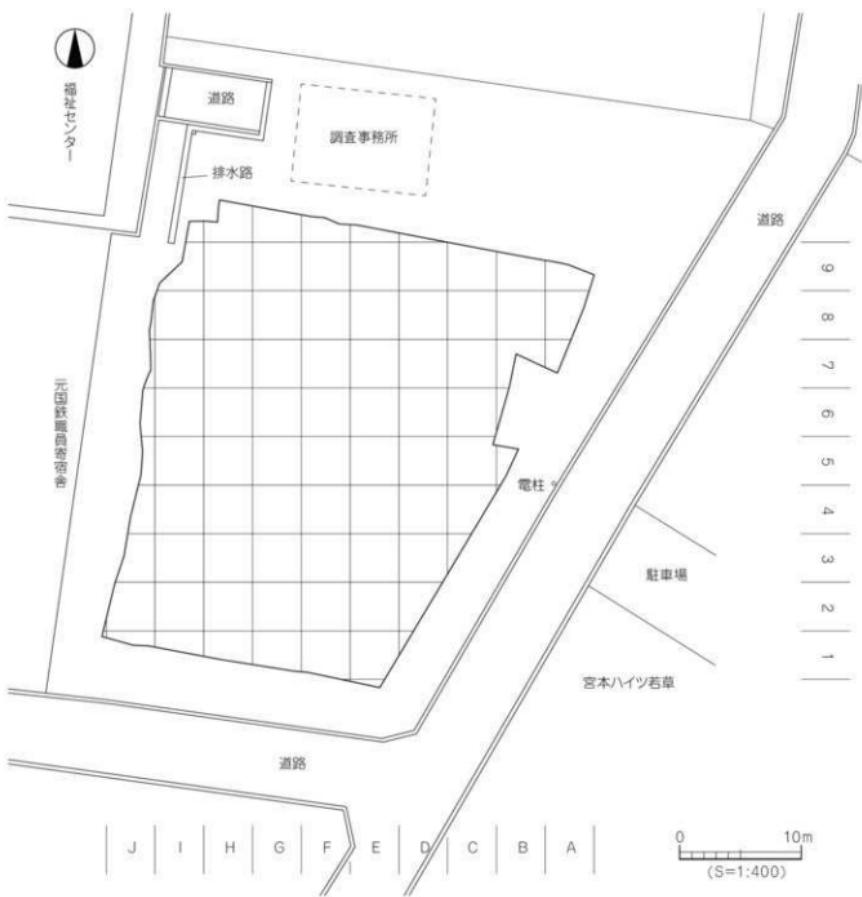
2月14日：近世遺構の掘り下げを終了し、古代以前の遺構の掘削を開始する。

21日：SD6、SD7の掘り下げを行う。

3月7日：周溝墓2の主体部SK33の平面土層精査作業。

12日：雨天のなか現地説明会を実施する。

若草町遺跡 3 次調査



第4図 調査区位置図とグリッド図

- 25日：全体の遺構完掘状況の写真撮影を行う。  
 30日：2区の遺構測量作業を終了する。  
 31日：調査事務所の撤去と調査区の埋め戻しを完了する。

## 第2節 土層(第5図、図版2)

調査前の現状は市有公園であった。江戸時代には松山藩の家臣团屋敷地として利用されたのち、明治時代～大正時代には尋常小学校や師範学校が建設され、戦後は集合住宅などの居住施設が建設されるなど土地開発が盛んに行われ、部分的に弥生時代～中世の包含層も失われている。このため、比較的に土層堆積の残りの良い北壁で説明する事とする。調査地の層序は第Ⅰ層～第V層までに大別した。遺構は試掘調査の結果、第Ⅳ層（遺物包含層）以上や層中から掘り込まれた遺構が第V層上面で確認されている。この結果を受け遺構の検出を第V層上面で行なったが、掘削時に第Ⅳ層上面で見つかっただ中世以降の遺構もできる範囲で記録に残した。調査地の基本層序は以下である。

- 第Ⅰ層 真砂土で現代の造成土。調査区全域にみられ、層厚14～40cmを測る。
- 第Ⅱ層 明青灰色土(5BG 5/1) 現代の造成土。層厚10～40cmを測る。
- 第Ⅲ層 灰色土(7.5Y 5/1) 近世以降の堆積層と考えられる。層厚8～40cmを測る。
- 第Ⅳ層 黒褐色土(10YR 3/2) 調査区全域に遺存する。層厚6～38cmを測る。弥生土器、土師器、須恵器を含む遺物包含層。
- 第V層 浅黄橙色砂質土(10YR 8/4) 遺構確認面。勝山のある東側から西方向へ緩やかに下がり、調査区内の東と西の比高差は約50cmを測る。

## 第3節 遺構と遺物

遺構は弥生時代～古墳時代にかけての周溝墓、溝、土坑、堅穴建物跡、掘立柱建物跡のほか、中・近世の井戸跡、土坑などを検出した。遺物は弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、鉄器、石器などが出土している。このうち、周溝墓については主体部が明確でないものや周溝状の溝についても周溝墓として呼称している。時期については、主体部が見つかっても時期決定に有効な遺物がなかったり、溝中からの遺物も時期幅があったり、遺物が少なかつたりするので明確な時期を決定できていない。このことから、周溝墓の時期については小結で推察するものとする。

### 1. 弥生時代～古墳時代

#### (1) 周溝墓

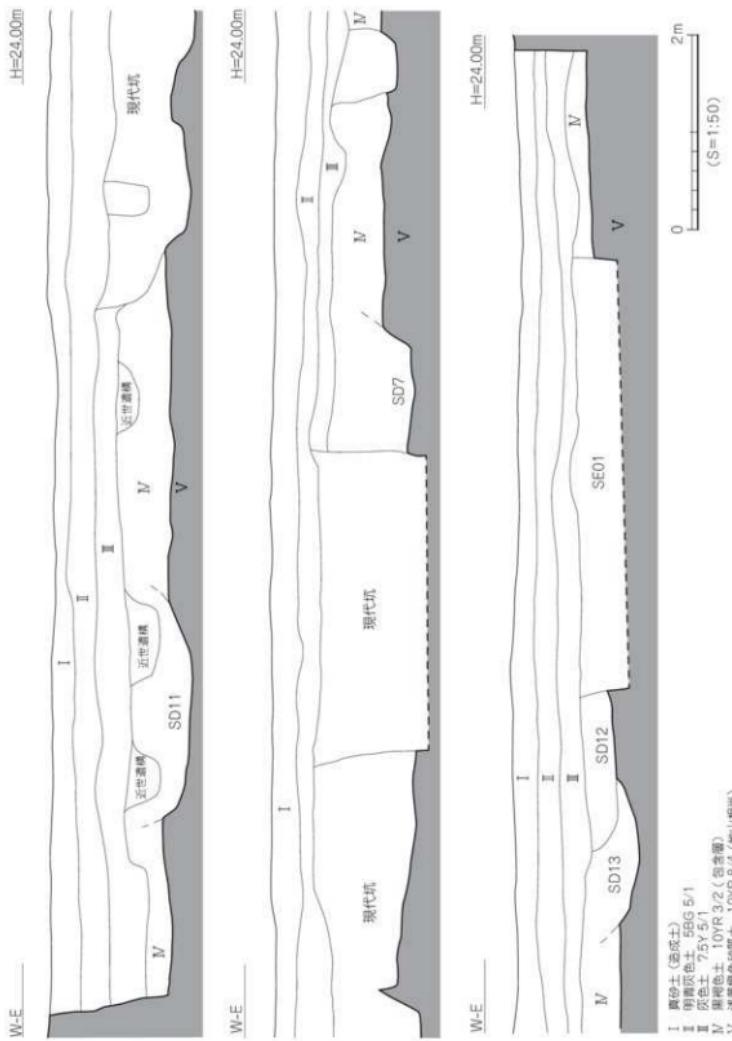
##### 周溝墓1 (SK44-SD3、第8図、図版3)

周溝墓1は、周溝 SD3と主体部と考えられる土坑 SK44で構成される。調査地東側の1区と2区にまたがる中央部で検出した遺構である。墳丘は削平され失われている。

SD3の北側は、現代坑に切られ全容は不明であるが、遺存状況より溝は全局せず北西部は途切れている。平面形態は円形を呈している。検出規模は直径 8.30m、幅 1.02 m、深さ 0.39m を測る。遺物は弥生土器が少量出土している。

SK44は周溝郭内の中央部に位置し、主軸方向は東西となる。平面形態は隅丸長方形を呈する。東側と北側は近世の遺構に切られる。検出規模は長軸 2.91m、短軸 1.22m、深さ 0.35 m を測る。遺物は

若草町遺跡 3 次調査



第5図 北壁土層図



第6図 全造構平面図  
- 11・12 -



出土していない。

**出土遺物(第9図、1~5、図版11)**

遺物はすべて周溝内からの出土である。1は壺の口縁部片。推定口径15.6cm、残高6.1cmを測る。口縁部は屈曲して外上方にのびる。口縁端部は面をもつ。内外面ともナデ調整である。2は壺の上がり底の底部。3は複合口縁壺。頸部は短く直立して立ち上がる。口縁拡張部は内傾する。4,5は高坏。同一個体と考えられる破片である。4は坏底部と口縁部の境に段をもつ。5は坏底部と脚の接合部片。

時期:周溝内出土の複合口縁壺より古墳時代初頭とする。

**周溝墓2(SK33・SD9、第10・11図、図版6・7)**

周溝墓2は、平面形態が円形を呈する周溝SD9と主体部と考えられる土坑SK33で構成される。2区の中央部で検出した。墳丘は削平され失われている。

SD9は、中近世の遺構や現代坑に切られ全容は不明である。平面形態は遺存状況より円形を呈している。検出規模は直径6.60m、幅0.44~0.64m、深さ0.20~0.46mを測る。遺物は弥生土器と思われる小片が少量出土している。

SK33は周溝郭内の中央部に位置し、主軸方位は東西方向である。平面形態は隅丸長方形を呈する。土坑西側は時期不明の柱穴4基に切られる。検出規模は長軸2.72m、短軸1.35m、深さ0.28mを測る。遺構平面と土層断面の精査により木棺と考えられる痕跡を検出した。

(木棺痕跡、第11図)

木棺痕跡は遺構掘削時に平面の土色分布と土層断面図の精査により「にぶい褐色土」として検出したもので木質は残っていない。西側の木口部は柱穴で切られ全容は不明である。検出規模は東西1.84m、幅は東側木口部の幅0.74m、中央部の幅0.82m、西側木口部の幅0.60mを測る。遺物は土坑内からは1点も出土していない。

**出土遺物(第12図、6・7、図版11)**

6は壺の口縁部片。内面は刷毛目調整が施されている。7は高坏で坏部と脚部の接合部片である。

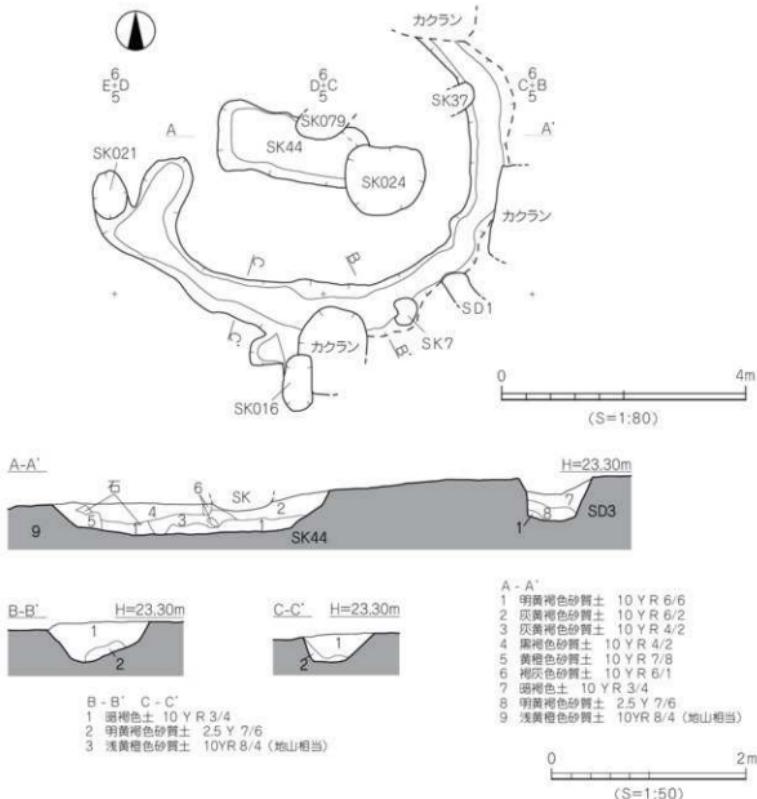
時期:周溝内からの出土遺物より弥生時代後期後半とする。

**周溝墓3とSX1 (SD6・SX1、第13図、図版4・8・9)**

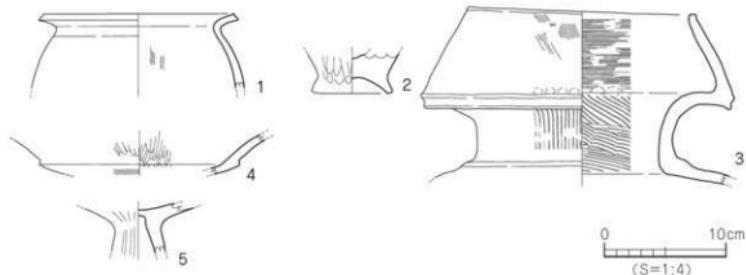
周溝墓3は、調査地の西側で検出した遺構である。周溝SD6のみの検出で主体部や墳丘は検出していない。周溝は部分的に現代坑や中近世の遺構に切られるほか、周溝の西側は調査区外となるため全容は不明である。周溝の平面形は検出状況より方形を呈する。周溝の北側は溝幅が広がり、途中途切れで陸橋となっている。このため、周溝郭内の平面形態は前方後方形を呈する事になっている。主軸方向は南東~北西となる。溝の検出規模は長軸(長さ)18.40m、短軸(幅)17.00m、溝幅0.44~0.64m、深さ0.460~0.80mを測る。周溝の東側中央部ではSX1を検出している。遺物は周溝内埋土より弥生土器、土師器などが出土している。

**周溝(SD6)内出土遺物(第14~16図、8~57、図版11・12)**

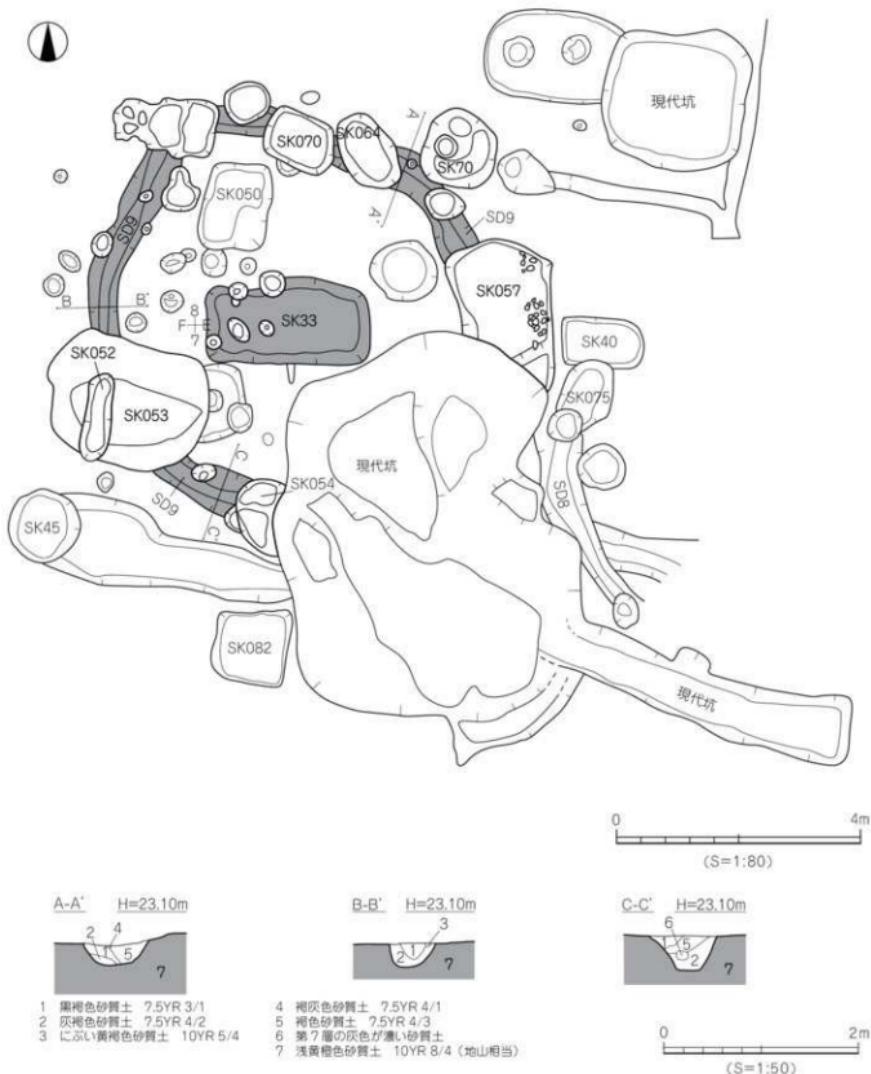
8~25は壺形土器。8の口縁部は水平にのびる。口縁端面は凹線文、頸部には押圧突帯文が施される。9は外上方に開く口縁部。口縁端面は中央部が凹む。頸部に断面三角形の突帯文が施される。10は直線的に上方にのびる頸部から口縁部は外上方にのびる。口縁端面は凹線文が施される。11は口縁端部が大き



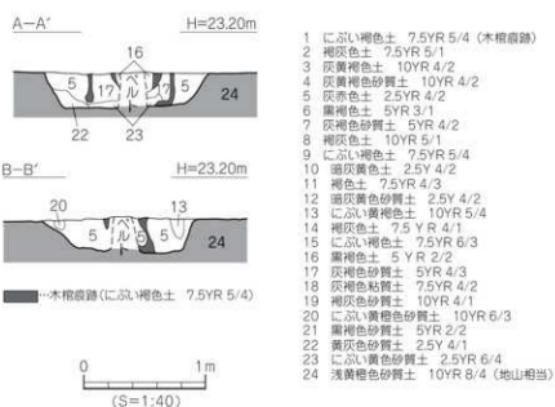
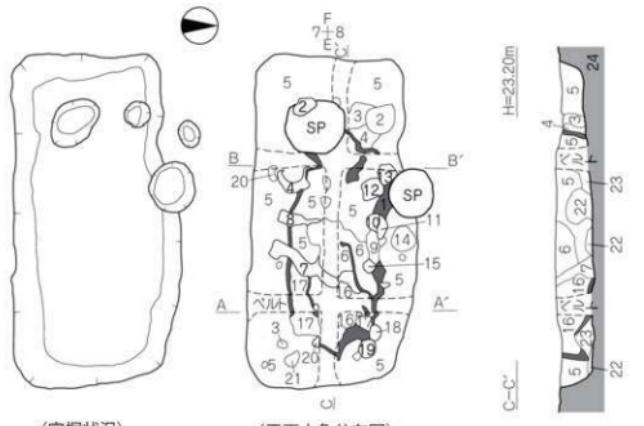
第8図 周溝墓1 (SK44・SD3) 測量図



第9図 周溝墓1 (SK44・SD3) 出土遺物実測図



第 10 図 周溝基 2 (SK33・SD9) 測量図

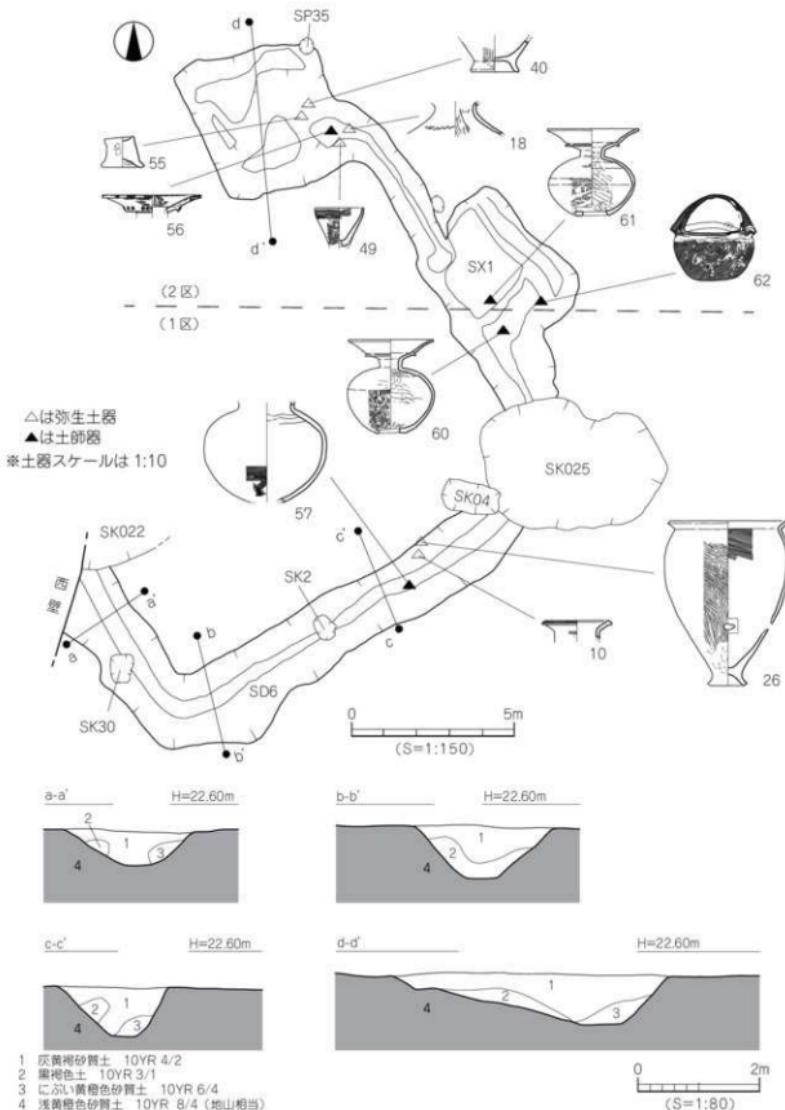


第 11 図 周溝墓 2 (SK33) 測量図



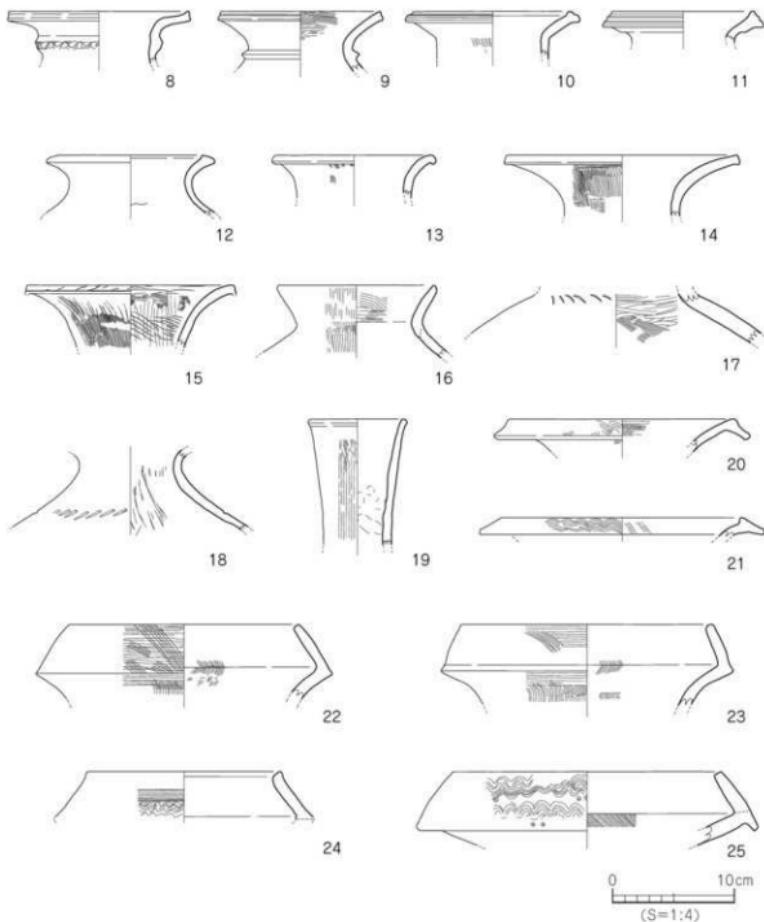
第 12 図 周溝墓 2 (SD9) 出土遺物実測図

若草町遺跡 3 次調査

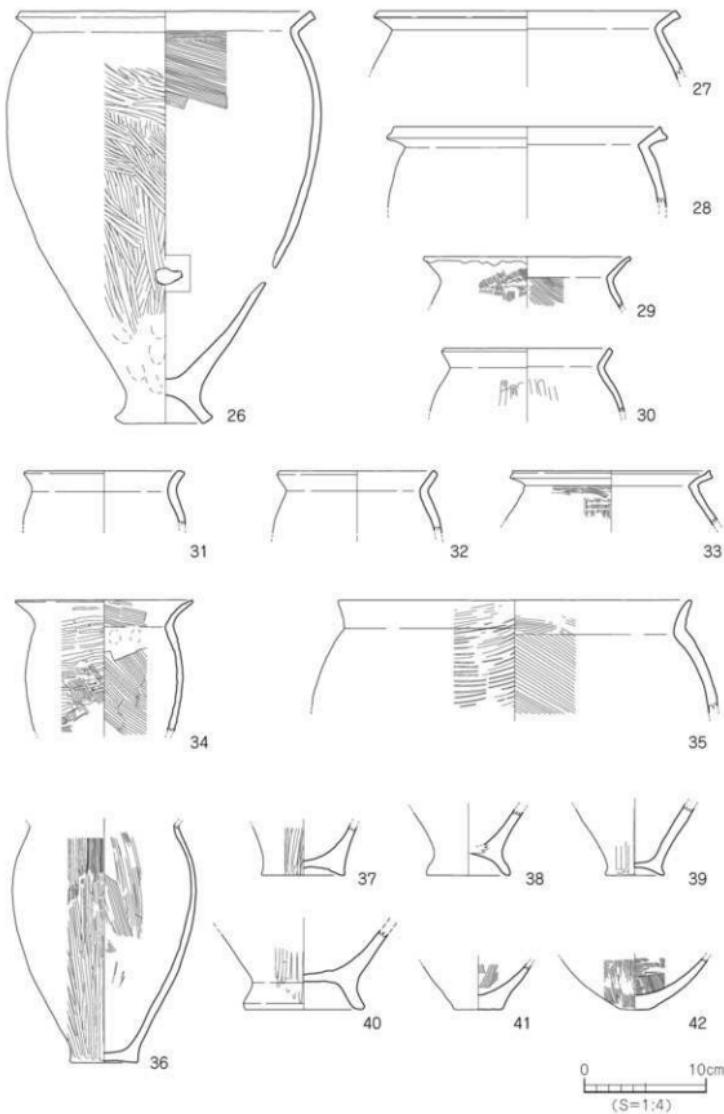


第 13 図 周溝墓 3 (SD6・SX1) 測量図と遺物分布図

く肥厚し端面に凹線文が施される。12は頸部から緩やかに外上方に開く口縁部。口縁端部やや肥厚する。13の口縁端部は下方に肥厚する。14・15は広口壺。口縁部は大きく外反する。口縁端部は下方にやや肥厚する。16の口縁部は外上方に短くのびる。口縁端部は丸くおさめている。17・18の肩部には刺空列点文が施される。19は長頸壺。残高10.3cmを測る。緩やかに外傾して開く口縁部。口縁端部は丸くおさめる。20の口縁部は下方に拡張される。口縁拡張部の上面には波状文が施される。21の口縁端部は上下に拡張され、上面には波状文が施される。22～25は複合口縁壺。22・23の口縁接合部は「く」字状を呈する。



第14図 周溝墓3（SD6）出土遺物実測図①



第15図 周溝墓3(SD6)出土遺物実測図②

口縁拡張部外面には施文されない。24の口縁外面には波状文が施される。25の口縁接合部は下方にのびる。拡張された口縁部外面には上下2段の波状文が施される。

26~42は壺形土器。26は口径23.8cm、器高33.8cmを測る。上げ底の底部。胴部は内湾して立ち上がり最大径を胴上半で測る。口縁部は屈曲して外上方に短くのびる。口縁端部は面をもつ。調整は外面にヘラミガキが施される。胴部下半部に焼成後の孔が1カ所穿たれる。27の口縁部は短く外上方にのびる。28の口縁端部は上下に肥厚し、端面は強くナデられ凹む。29の口縁部は尖り気味。調整は内外面ともハケ目調整が施される。30は外傾して短く開く口縁部。31の口縁部は緩やかに外反して短くのびる。口縁端部は面をもつ。32の口縁部は丸味をもつ。33の口縁端部は強いナデにより肥厚し、口縁端面は凹む。34の口縁部は外反気味に外上方に開く。調整は胴部外面にタタキ、内面はハケ目調整が施されている。35は推定口径26.8cmを測る大型品。内湾して立ち上がる胴部から、短く外上方に開く口縁部。調整は胴部から口縁部にかけてタタキ、内面はハケ目調整が施される。36の口縁部は欠失する。残高19.5cmを測る。底部はやや突出する上げ底で、底部から緩やかに内湾して立ち上がる胴部。調整は胴部の内外面ともハケ目調整が施される。37~40は壺の底部と考えられる底部片。いずれも上げ底の底部である。調整は37・39・40の胴部外面にヘラミガキが施されている。41は平底の底部。底径3.8cmを測る。胴部の調整は外面ナデ、内面はハケ目調整が施される。42は小さな平底の底部。底径2.6cmを測る。調整は内外面ともハケ目調整である。

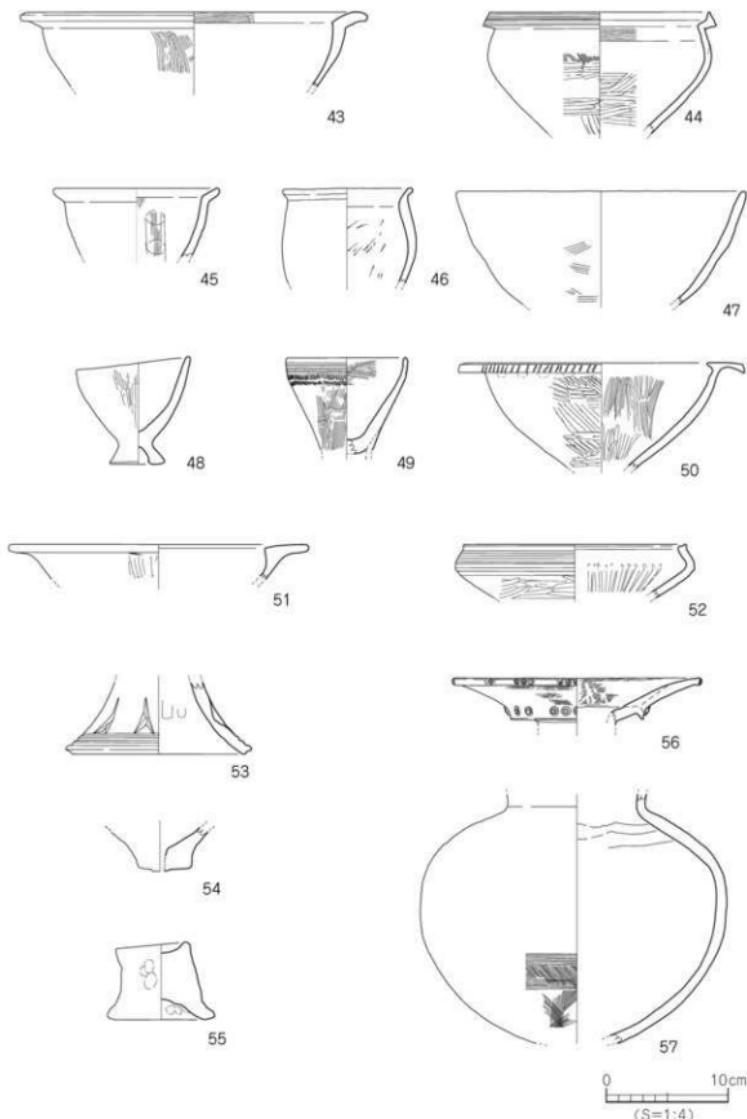
43~49は鉢形土器。43は推定口径28.3cmを測る。口縁部は外湾して水平気味に短く開く。調整は胴部外面にヘラミガキが施される。44は肩部の張りが強く、口縁部は屈曲して外上方に短くのびる。口縁端部は上方に肥厚して、口縁端面に四線文が施される。調整は内外面ともヘラミガキが施される。45の口縁部は屈曲して外上方に短くのびる。46の口縁部は緩やかに外湾して外上方に短くのびる。47・48は直口口縁で低脚の台付鉢である。47は上げ底の底部。口縁端部は丸くおさめる。調整はマツツのため不明瞭であるが外面にハケ目痕を残している。48の口縁部はヨコナデ、胴部外面はヘラミガキが施されている。49の口縁部外面は4条の沈線を巡らし、その下に綾杉文が施される。調整は外面にナデ・ハケ目、内面はハケ目のちナデ調整が施されている。

50~53は高杯形土器。50の口縁部は内外方に拡張され、口縁端部の外側に刻目が施される。調整は内外面ともヘラミガキである。51は屈曲して外方に拡張される口縁部。52の口縁部は屈曲して内方向に立ち上がる。口縁端面は強いナデにより凹む。口縁部から屈曲部までの外側には四線文が施される。調整は坏部の内外面ともヘラミガキが施される。53は脚部片。脚端は内側で接地する。裾部外面は四線文と脚下部に貫通しない矢羽根透かしが1段施される。

54はいわゆるコシキ形土器である。底部に焼成前の孔が穿たれている。55は完形品。上げ底で中実の支脚である。

56~57は土師器。56は二重口縁壺の口縁部片。推定口径20.2cm、残高3.9cmを測る。細い頸部から外方に開く口縁部。口縁拡張部は外反気味に開く。口縁端面と口縁拡張部の外面に3個1対の円形浮文が巡らされる。調整は内外面ともヨコナデのちミガキが施される。57は壺の胴部片である。底部と口縁部は欠失している。胴部最大径を胴上半にもちやや肩が張る。調整は外面ハケ目のちミガキ、内面はヘラ削りが看取される。

時期:出土遺物より古墳時代前期と考える。

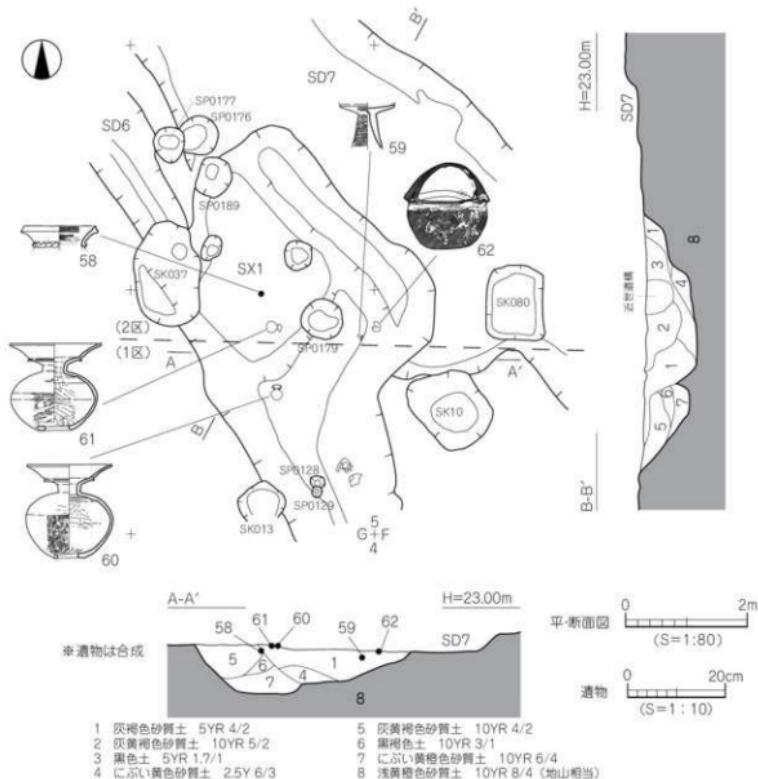


第16図 周溝墓3(SD6)出土遺物実測図③

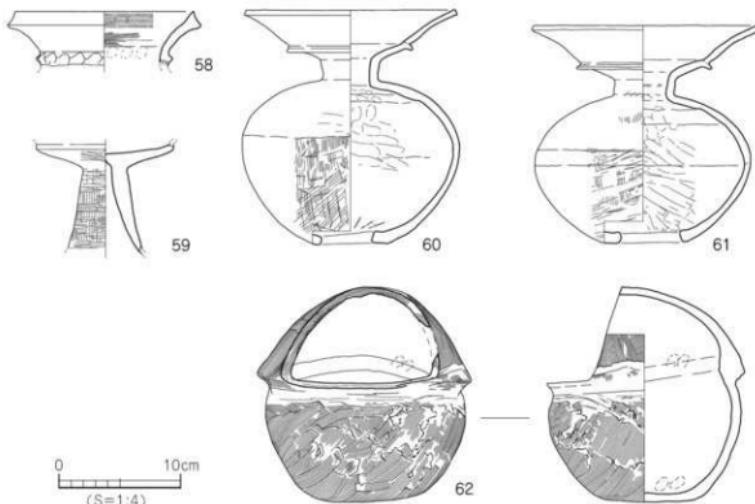
## SD6内SX1(第17図、図版8)

SX1はSD6の東側にある周溝墓4の周溝SD7との切り合い部で検出した土坑状の遺構である。平面での検出状況は、SD7を掘削した後の地山上面で一段深くなる東側部分を検出したものである。遺構の西側は、周溝墓3のSD6があり、埋土色が酷似し平面上の境は不明瞭である。SD6として掘削をしていったところ二重口縁壺、手焙形土器が出土したことから、別遺構として掘削したものである。ベルト土層の精査では、SD6を切っている様子が伺われる。

平面形態は、西側が把握できていないが検出状況より隅丸長方形を呈するものと考えられる。土坑底は段をもち東側と南側が一段高くなっている。検出規模は長さ(南北)4.60m、幅(東西)3.20~4.12m、深さ0.36~0.80mを測る。遺物はいずれも検出面から浅い部分での検出である。遺物は弥生土器、土師器が出土している。



第17図 SX1測量図



第18図 SX1 出土遺物実測図

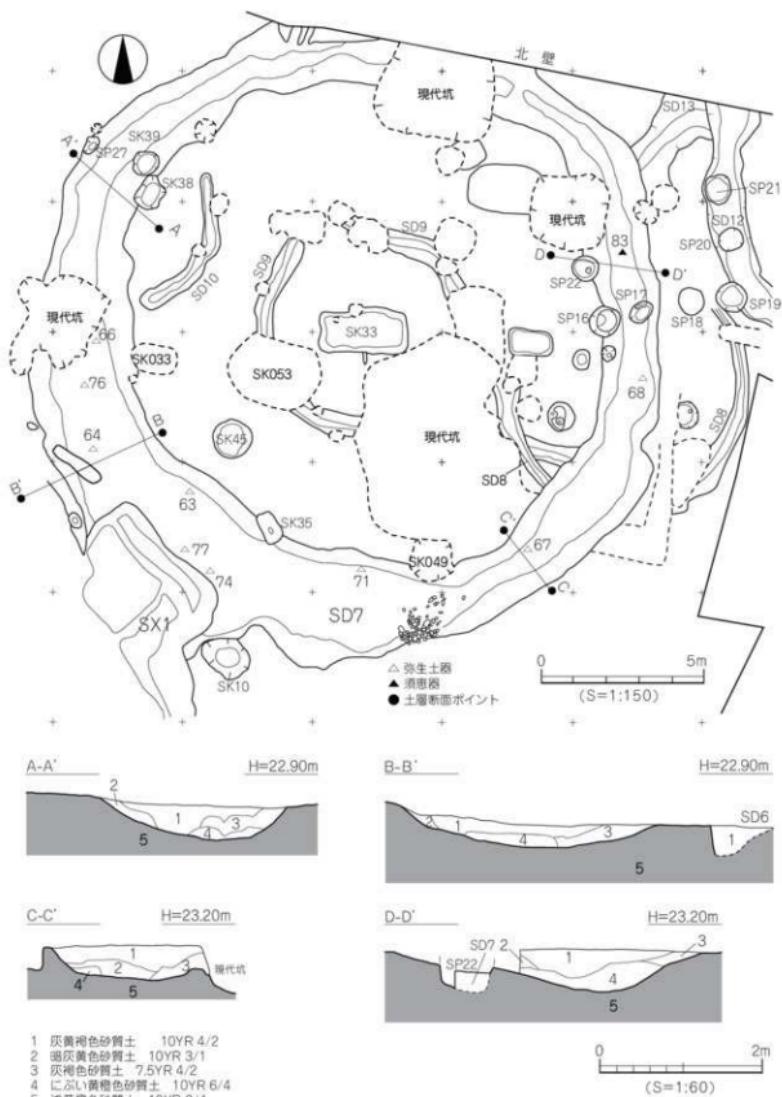
## 出土遺物(第18図、58~62、図版14)

58は弥生時代中期後半の壺。外反する口縁部。口縁端部は上方に厚する。頸部に押圧突帯を施す。59は高環。口縁部と脚裾部は欠失する。脚柱と坏部外面にヘラミガキが施される。

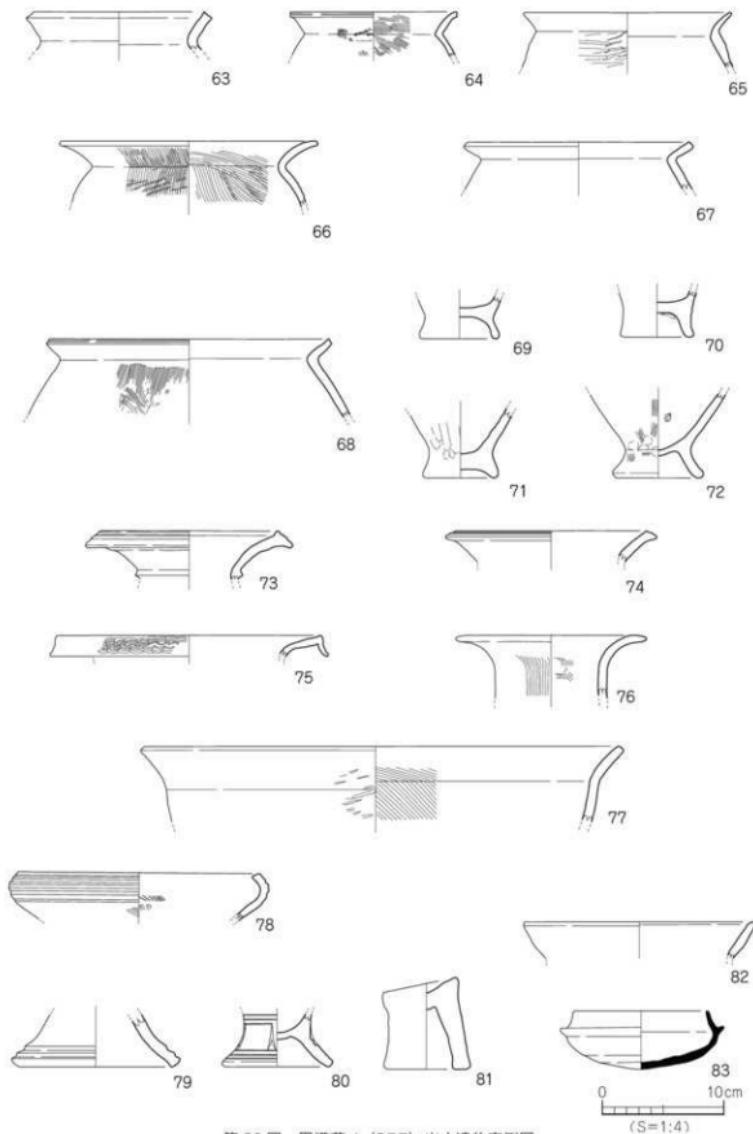
60・61は二重口縁壺。60は口径16.1cm、器高19.1cmを測る。口縁部の一部が欠失する。底部は焼成前の孔が穿たれる。胴部は扁平で胴部最大径を中位にもつ。頸部は細く直立して短く立ち上がる。口縁部は屈曲して外方に開き口縁接合部は下方に短くのびて端部は丸くおさめている。口縁拡張部はやや外反気味に外上方にのびる。口縁端面は少し凹む。胴部外面に黒斑をもつ。胴部の調整は胴上半部はハケ目のみ丁寧なミガキ、胴部下半はハケ目のちミガキを施される。胴下半部のミガキは上部と比べて雑である。頸部～口縁部にかけては丁寧な横ナデである。胴部内面はヘラケズリのちナデ調整、口縁部は横ナデ調整が施される。61は口径18.5cm、器高17.8cmを測る。口縁部の一部が欠失する。底部は焼成前の孔が穿たれる。胴部は扁平で胴部最大径を中位にもつ。頸部は細く直立して短く立ち上がる。口縁部は屈曲して外方に開き口縁接合部は下方に短くのびて端部は丸くおさめている。口縁拡張部はやや外反気味に外上方にのびる。口縁端面は少し凹む。胴部外面に黒斑をもつ。胴部の調整は胴上半部はハケ目のみ丁寧なミガキ、胴部過半はハケ目のちミガキが施される。胴下半部の調整は上部と比べて雑である。頸部～口縁部にかけては丁寧な横ナデが施される。胴部内面はヘラケズリのちナデ調整、口縁部は横ナデ調整が施される。底部～口縁部外面にかけて赤色顔料(ベンガラ)が塗布されている。

62は手培形土器。口縁部は緩やかに短く外反し「く」字状を呈する。覆部は口縁端部に接合する。覆部の面は狭い。内面は煤けている。外面の調整はハケ目、内面はナデ調整が施される。

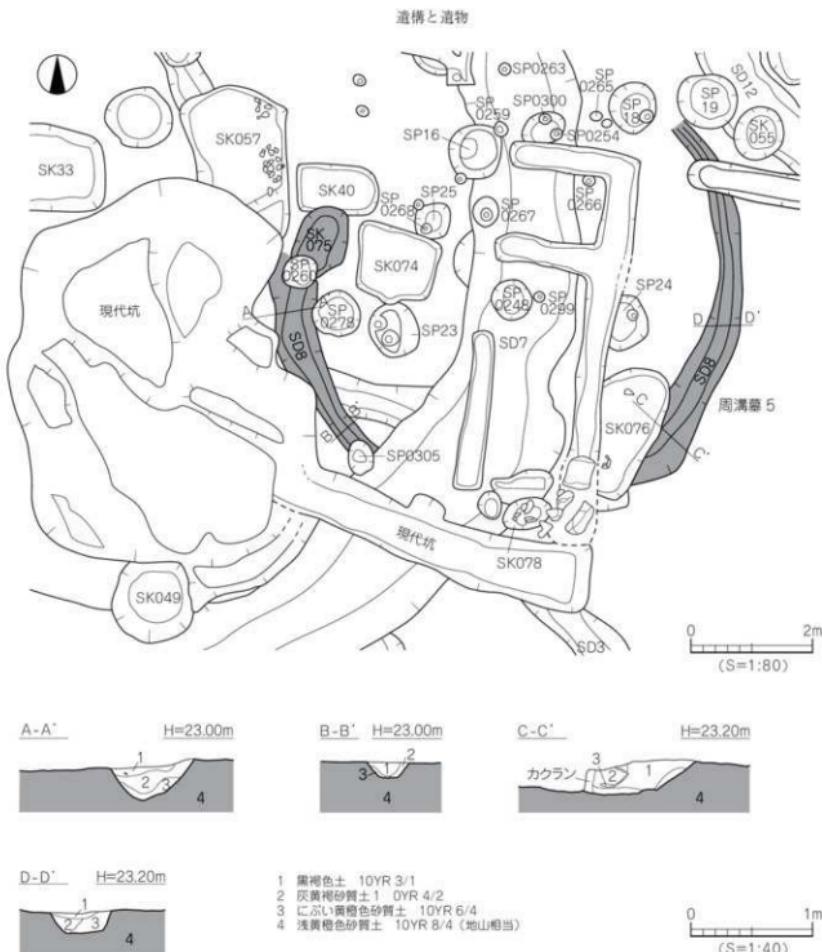
時期：出土した二重口縁壺より古墳時代初頭と考える。



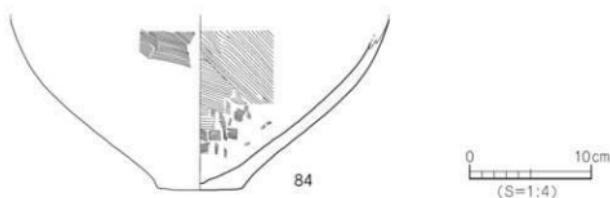
第19図 周溝墓4(SD7)測量図



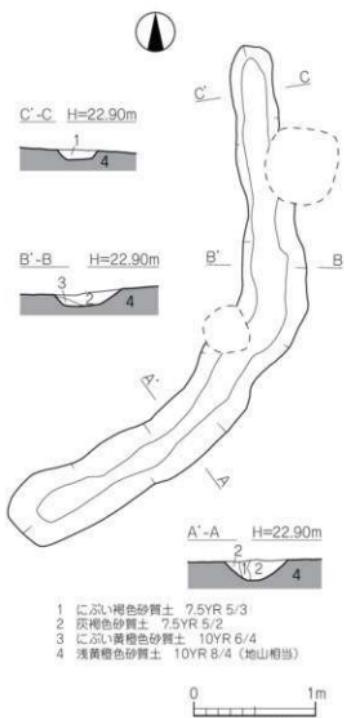
第 20 図 周満墓 4 (SD7) 出土遺物実測図



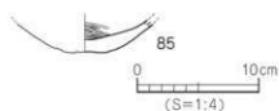
第21図 周溝墓5 (SD8) 測量図



第22図 周溝墓5 (SD8) 出土遺物実測図



第23図 周溝墓6(SD10)測量図



第24図 周溝墓6(SD10)出土遺物実測図

時期:須恵器は後世の混入遺物と考られることから、出土遺物より弥生時代終末とする。

#### 周溝墓5(SD8、第21図)

周溝墓5(SD8)は周溝墓4の東側に位置する。周溝墓4のSD7に切られる。SD8のみの検出で主体部、墳丘とも未検出である。SD8の平面形態は円形を呈し、周溝の北側は全周せずに陸橋となっている。SD8の郭内は近世以降の掘り込みが数多く見られる。SD8の検出規模は直径6.92m、幅0.24~0.54m、深さ0.22~0.46mを測る。遺物は弥生土器、須恵器が出土しているが器形の知れる遺物は少ない。

#### 周溝墓4(SD7、第19図、図版9)

周溝墓4は周溝墓3の東側に位置する。周溝SD7のみの検出で主体部、墳丘とも未検出である。SD7の平面形態は円形を呈するほか、北側の一部が調査区外や現代坑に切られるものの検出状況から全周するものと考えられる。周溝の西側はSD6・SX1と接する。SD7の郭内には、周溝墓2が中央部に位置している。検出規模は直径19.70m、溝幅1.40~3.64m、深さ0.22~0.46mを測る。遺物は弥生土器、須恵器が出土しているが器形の知れる遺物は少ない。

#### 出土遺物(第20図、63~83、図版13)

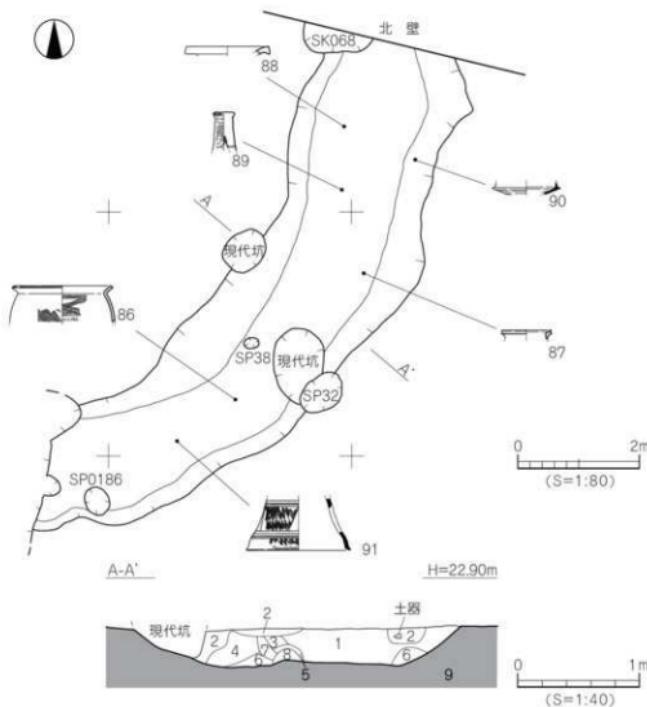
63~72は壺形土器。63の口縁部は短く外上方にのびる。口縁端部は面をもつ。64は外反する口縁部。65の胴部はタタキ痕を残す。66は外反する口縁部。外面の調整はタタキ後ハケ目が施される。67・68は短く外傾する口縁部。69~72は壺の底部と考えられる上げ底の底部部。

73~76は壺形土器。73の口縁端部は上下に肥厚する。端部外面に凹線文が施される。頸部に貼付け突帯が巡る。74は口縁端部外面に凹線文が施される。75の口縁部は下垂する。下垂した口縁部外面に波状文が施される。76は長頸壺。直立する頸部から大きく外反して水平気味に開く口縁部。

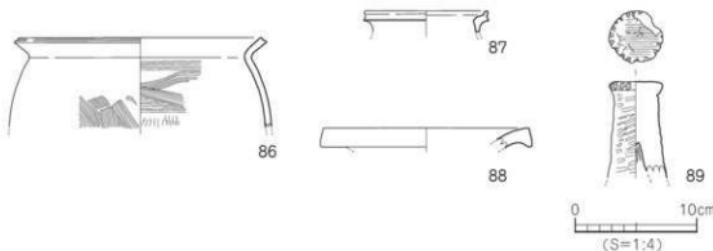
77は鉢形土器。推定口径40cmを測る。口縁部は外傾して短く外上方にのびる。

78~80は高壺形土器。78の口縁部は内湾して立ち上がる。口縁部外面に凹線文が施される。79の脚端は内側で接地する。脚裾外面に凹線文が施される。80は低脚。矢羽根スカシの上下に2~3条の沈線文を施す。

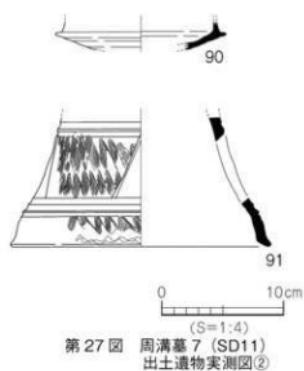
81は上げ底の支脚。83は須恵器蓋壺。たちあがりは内傾し口縁端部は丸くおさめる。TK10型式と考えられる。



第25図 周溝墓7 (SD11) 測量図



第26図 周溝墓7 (SD11) 出土遺物実測図①



さ0.10~0.25mを測る。遺物は弥生土器、須恵器が出土しているが器形の知れる遺物は少ない。

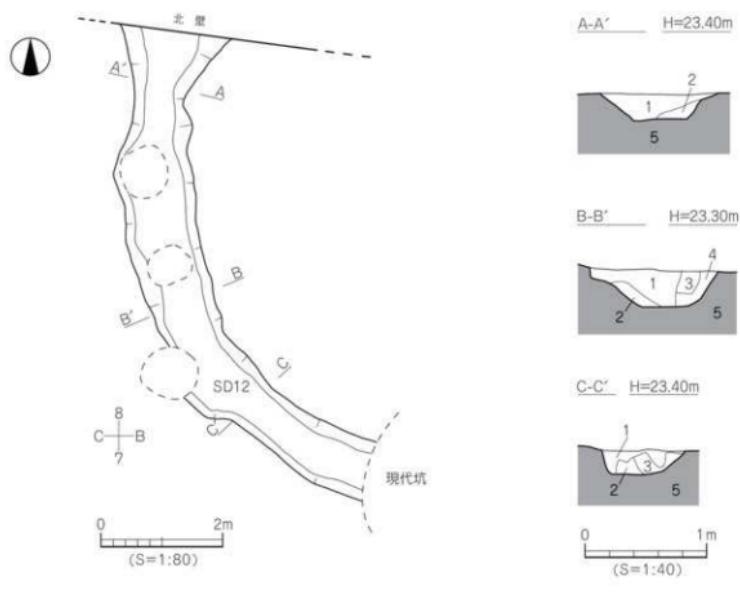
#### 出土遺物(第22図、84、図版13)

84は壺の底部。やや突出する平底で内外面の調整はハケ目調整が施される。

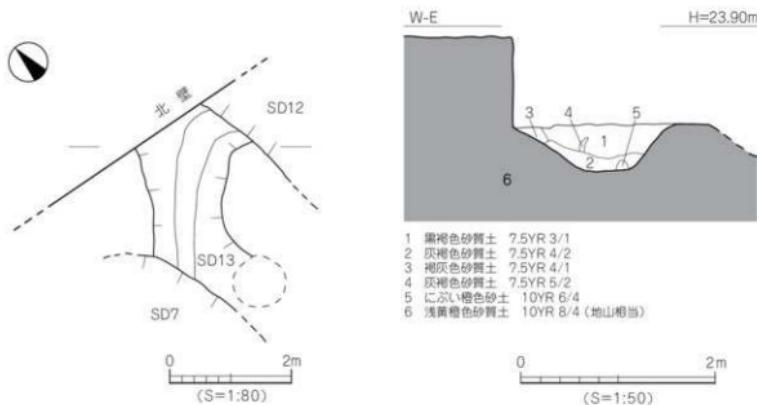
時期:出土遺物より弥生時代後期。

#### 周溝墓6 (SD10、第23図)

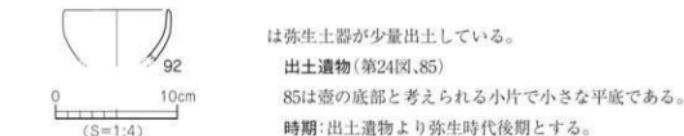
周溝墓6は周溝墓2の西側に位置し、周溝墓4(SD7)の郭内で検出した。周溝のみの検出で主体部、墳丘とも未検出である。平面形態は弓形を呈する。周溝西側は検出しなかつたためSD7との切り合いは不明である。検出規模は長さ(南北)5.30m、溝幅0.54~0.64m、深さ0.05~0.25mを測る。遺物



- 1 灰褐色砂質土 7.5YR 4/2
- 2 褐色砂質土 7.5YR 4/3
- 3 黒褐色土 10YR 3/2
- 4 黑褐色砂質土 7.5YR 3/2
- 5 浅黄褐色砂質土 10YR 8/4 (地山相当)



第29図 SD13測量図



第30図 SD13出土遺物実測図

## 周溝墓7(SD11、第25図)

周溝墓7(SD11)は周溝墓4の西側に位置する。周溝のみの検出で主体部、墳丘とも未検出である。周溝の西側と北側は調査区外となるため全容は不明である。平面形態は検出状況より円形を呈するものと考えられる。検出規模は長さ(南北)8.5m、溝幅2.00~2.60m、深さ0.22~0.50mを測る。遺物は弥生土器、須恵器が出土している。

## 出土遺物(第26、27図、86~91、図版13)

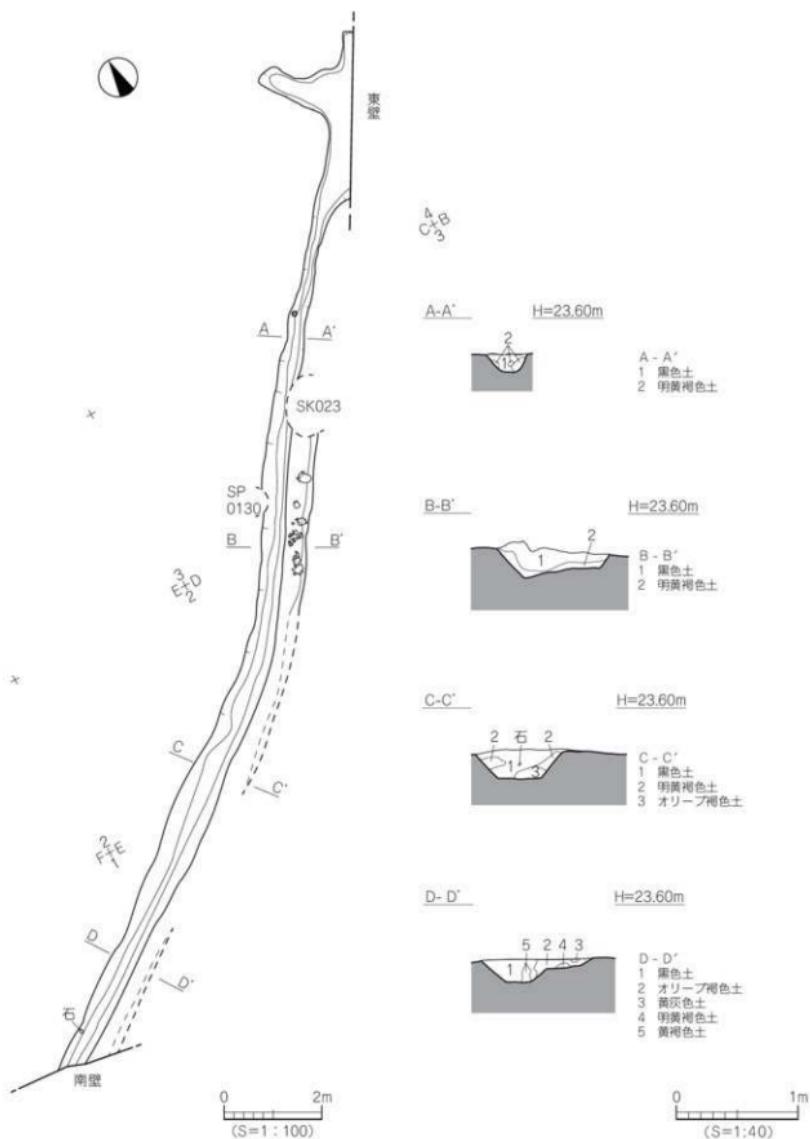
86は壺形土器。口縁端部は強いナデにより凹む。胴部は内外面ともナデ調整である。87・88は壺形土器の口縁部。87は短く屈曲する口縁部。口縁端部は上下に肥厚し、口縁端面は凹む。88の口縁端部は下方に肥厚する。89は中空の支脚。受部は小さな円形の面をもち、受部端の外面には刻目が施される。90は須恵器の壺身。身は浅く、受部は水平にのびる。たちあがりはやや内傾して立ち上がる。91は器台の脚部。脚部の文様帶に上下二段の波状文と裾部外面に波状文が施される。

時期:周溝内から出土した須恵器は古墳時代後期の掘立柱建物跡に関係する遺物と考えられる。よって、周溝内出土の支脚より弥生時代後期とする。

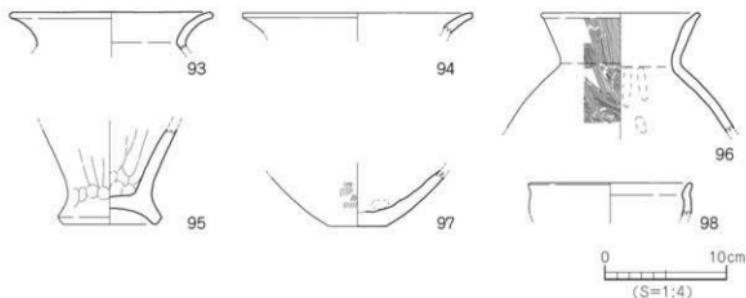
## 周溝墓8(SD12、第28図)

周溝墓8(SD12)は周溝墓4の東側に位置する。周溝のみの検出で主体部、墳丘とも未検出である。周溝の北側と東側は調査区外となるため全容は不明である。平面形態は検出状況より円形を呈するものと考えられる。検出規模は長さ(南北)9.80m、溝幅0.80~1.60m、深さ0.22~0.50mを測る。遺物は弥生土器

若草町遺跡 3 次調査



第31図 SD1測量図



第32図 SD1出土遺物実測図

と考えられる土器片が出土しているが図化できる遺物は無い。

時期：出土遺物が無いため時期不明としておく。

### (2) 溝

#### SD13(第29図)

SD13は2区の北側周溝墓4のSD7と周溝墓8のSD12の間で検出したもので、明確な切り合い完形は把握できていない。北側は調査区外となり全容は不明である。検出規模は長さ2.20m、幅1.40～1.84m、深さ0.48～0.64mを測る。遺物は弥生土器が出土している。

出土遺物(第30図、92)

92は直口口縁の鉢形土器。口縁端部は丸くおさめる。

時期：出土遺物より弥生時代後期とする。

#### SD1(第31図)

SD1は1区の東側で検出した南北方向の溝である。北側と南側は調査区外へと続いている。北側は溝幅が広がるようである。検出規模は長さ22.00m、幅0.24～1.99m、深さ0.18～0.27mを測る。遺物は弥生土器が出土している。

出土遺物(第32図、93～98、図版13)

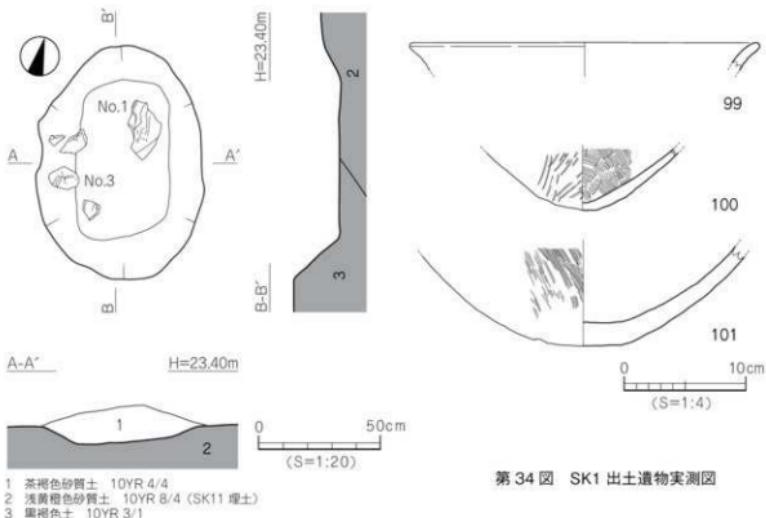
93～95は壺形土器。93・94は外反する口縁部。口縁端部は面をもつ。小型の鉢形土器。95は上げ底の底部。96・97は壺形土器。96の口縁部は外傾して上方にのびる。97は小さな平底の底部である。98は鉢形土器。口縁部は屈曲して短く外方に開く。外面の調整はハケ目が施されている。

時期：出土遺物より弥生時代後期。

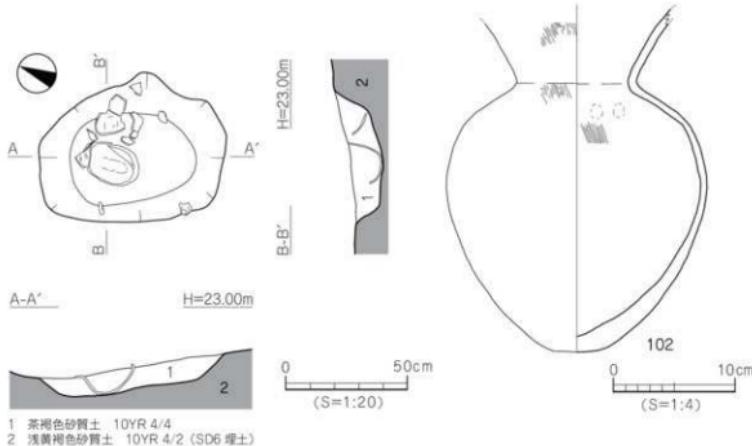
### (3) 土坑

#### SK1(第33図)

SK1は1区で検出した。SK11・SK20と切り合い関係をもち両造構を切っている。平面形態は楕円形を呈する。検出規模は長軸(南北)95cm、短軸(東西)69cm、深さ11cmを測る。埋土は茶褐色砂質土の單一



第33図 SK1測量図



第35図 SK2測量図

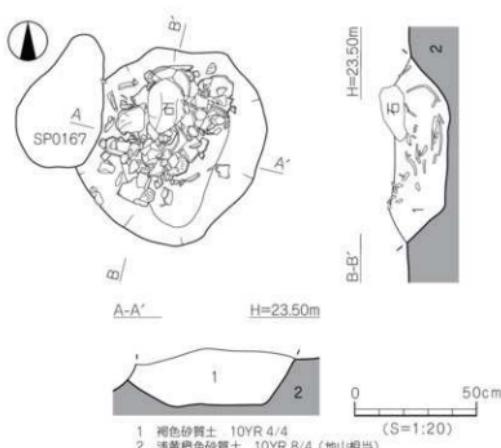
第36図 SK2出土遺物実測図

層である。遺物は弥生土器が出土している。

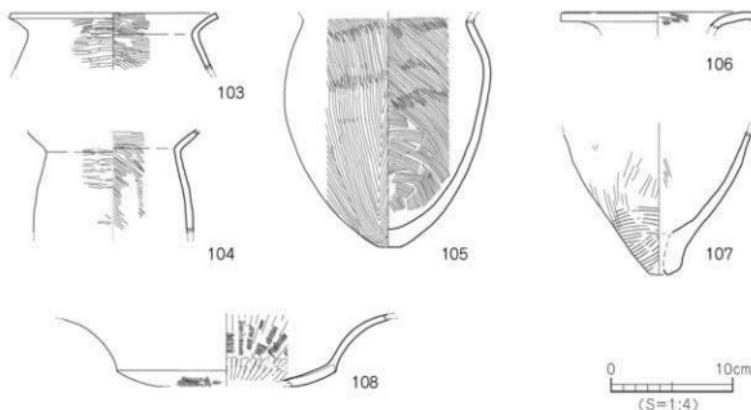
#### 出土遺物(第34図、99~101、図版15)

99は外反する壺の口縁部。100は壺の底部片。外面は粗いハケ目、内面は丁寧なハケ目が施される。101は壺と思われる底部片。丸味をもった底部で胴部外面はハケ目調整が施される。

時期:出土遺物より弥生時代後期終末。



第37図 SK3測量図



第38図 SK3出土遺物実測図

#### SK2(第35図)

SK2は周溝墓3のSD6埋土の上面で検出した構造でSD6を切っている。平面形態は不整形である。検出規は長軸(南北)76cm、短軸(東西)57cm、深さ12cmを測る。埋土は茶褐色砂質土の一層である。遺物は弥生土器が出土している。

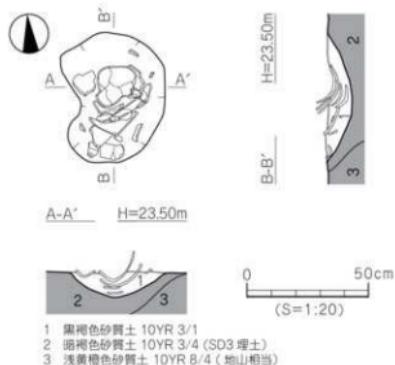
#### 出土遺物(第36図、102、図版15)

102は広口壺。底部は丸味をもちや不安定な平底である。胴部は卵形を呈する。口縁部は外反して外上方に長くのびる。口縁端部は欠失する。器面はマツツで全体の調整が不明瞭であるが、外面は頭部から肩部にかけてハケ目調整が看取される。

時期：出土遺物より弥生時代後期終末。

### SK3(第37図)

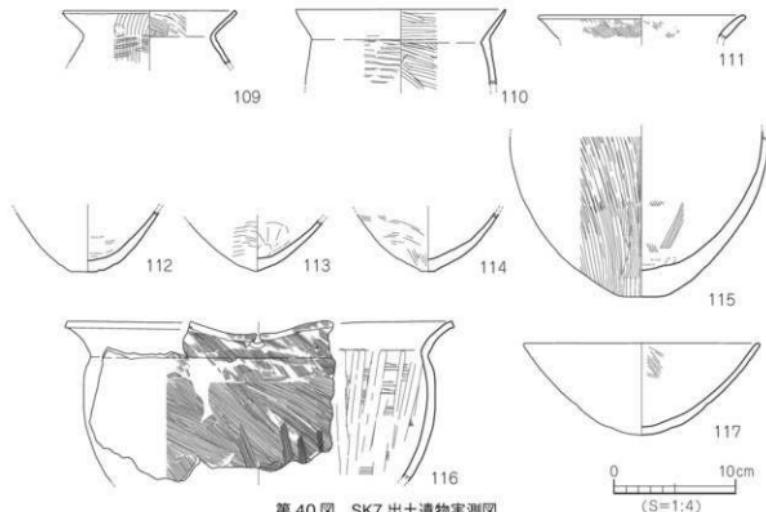
SK3は1区で検出した。遺構西側は近世の遺構に切られる。平面形態は円形を呈する。検出規模は直径80cm、深さ22cmを測る。埋土は褐色砂質土の単一層である。遺物は弥生土器の甕、壺、高坏、瓶形土器が出土している。



第39図 SK7測量図

### 出土遺物(第38図、103~108、図版15)

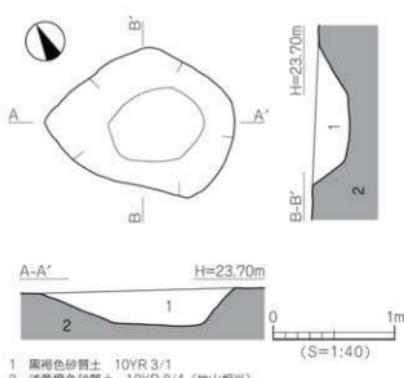
103~105は甕形土器。103は外反味に開く口縁部。口縁端部は面をもつ。外面の調整は口縁部から胴部にかけてタタキが施される。内面はハケ目調整である。104は口縁端部と胴下半部が欠失する。胴部外面はタタキ、内面はハケ目が施される。105は口縁部が欠失する。底部は不安定な小さな平底である。調整は内外面ともハケ目調整が施される。106は広口壺の口縁部。口縁部は大きく外反して水平にのびる。口縁端部は下方に肥厚する。107は胴上半分が欠失する。底部に焼成前の孔が穿たれる。調整は外面にタタキが施される。108は高坏の坏部。口縁部は大きく外反する。口縁端部は欠失する。外側器壁表面はマ



第40図 SK7出土遺物実測図

メツが著しい。部分的にミガキ・ハケ目痕が看取される。内面はヘラミガキが施される。

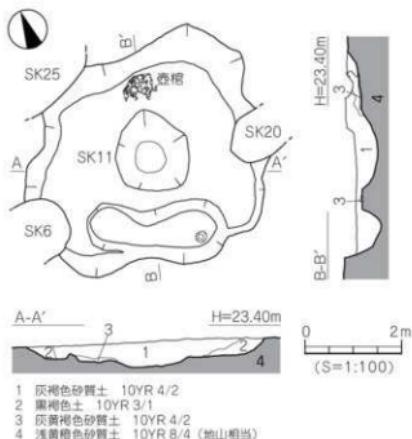
時期：出土遺物より弥生時代後期終末。



第41図 SK10測量図



第42図 SK10出土遺物実測図



第43図 SK11測量図

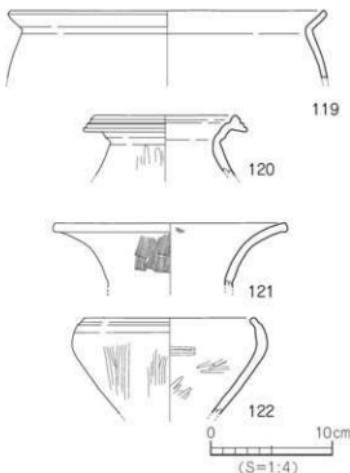
#### SK7(第39図)

SK7は1区で検出した。周溝墓1のSD3を切る。平面形態は不整形で南北方向が長くなる。検出規模は長さ(南北)54cm、幅(東西)36cm、深さ10cmを測る。埋土は黒褐色砂質土の単一層である。遺物は折り重なるように弥生土器の甕・壺・鉢が出土している。

#### 出土遺物(第40図、109~117、図版15)

109~114は甕形土器。109は口縁部の内外面にと胴部外面にハケ目調整が施される。110の口縁部は尖り気味。胴部外面にタタキ目が施される。111は内外面ともハケ目調整のちナデ調整である。112は不安定な小さな平底、113~114は尖り気味の口縁部である。

115は壺と考えられる胴下半～底部にかけての破片である。丸味をもった底部で外

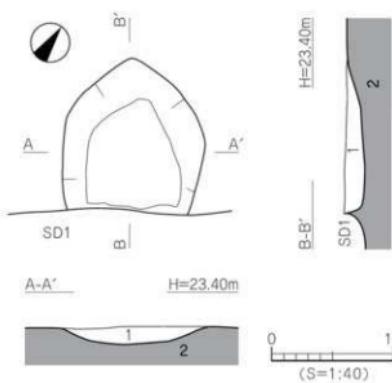


第44図 SK11出土遺物実測図

面はハケ目調整、内面はハケ目のちナデ調整が施される。

116・117は鉢形土器。116は口縁部が片口状となる。口縁部と胴部外面はハケ目調整、内面はヘラミガキが施される。117は直口口縁。底部は丸い。調整は内面ハケ目・ミガキ痕が看取られる。

時期：出土遺物より弥生時代後期終末。

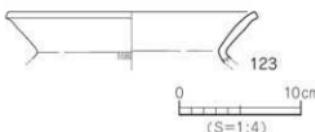


第45図 SK12測量図

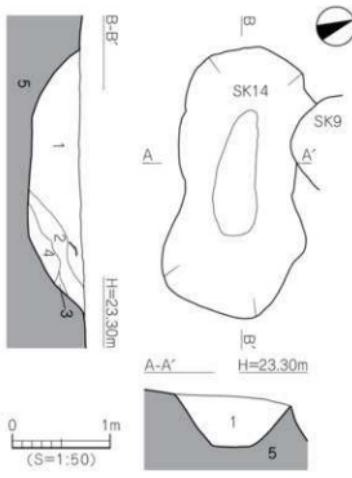
## SK10(第41図)

SK10は1区で検出した。周溝墓4のSD7を切る。平面形態は不整形で東西方向が長くなる。検出規模は長軸(東西)1.42m、短軸(南北)1.16m、深さ0.30mを測る。埋土は黒褐色砂質土の單一層である。遺物は須恵器が1点出土したのみである。

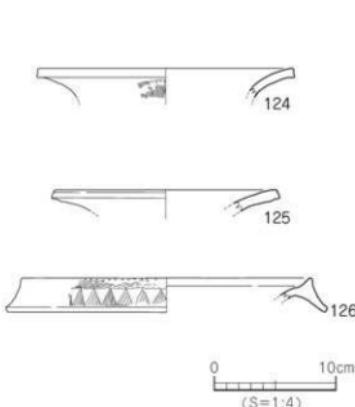
出土遺物(第42図、118)



第46図 SK12出土遺物実測図



第47図 SK14測量図



第48図 SK14出土遺物実測図

118は壊身。たちあがりは外湾して上方に短くのびる。口縁端部は丸くおさめる。

時期:出土遺物より古墳時代後期後半。

#### SK11(第43図)

SK11は1区で検出した。平面形態は不整形である。検出規模は長軸(南北)5.50m、短軸(東西)4.02m、深さ0.50mを測る。遺物は弥生中期後半と終末の土器が出土している。

出土遺物(第44図、119~122)

119は壺。口縁部はやや内湾して外上方に短くのびる。

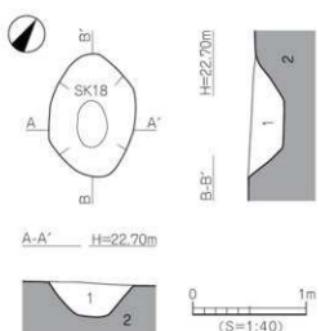
120・121は壺。120の口縁端部外面には3条の凹線が施される。121は広口壺。

122は高杯。内湾する口縁部。口縁部外面に凹線文が施される。

時期:121より弥生時代終末には埋没したものと考える。

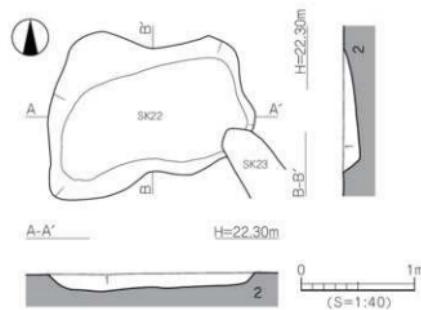
#### SK12(第45図)

SK12は1区で検出した。遺構の南側はSD1に切られる。平面形態は不整形である。検出規模は長軸(南北)1.24m、短軸(東西)0.68m、深さ0.14mを測る。遺物は弥生土器が出土している。



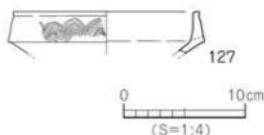
1 灰褐色砂質土 6YR 4/2  
2 淡黄褐色砂質土 10YR 8/4 (地山相当)

第49図 SK18測量図

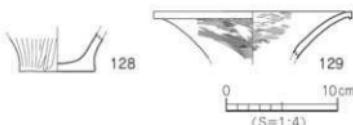


1 灰褐色砂質土 6YR 4/2  
2 淡黄褐色砂質土 10YR 8/4 (地山相当)

第51図 SK22測量図



第50図 SK18出土遺物実測図



第52図 SK22出土遺物実測図

## 出土遺物(第46図、123)

123は壺。やや外反する口縁部。調整は内外面ともナデ調整である。

時期：出土遺物より弥生時代後半。

## SK14(第47図)

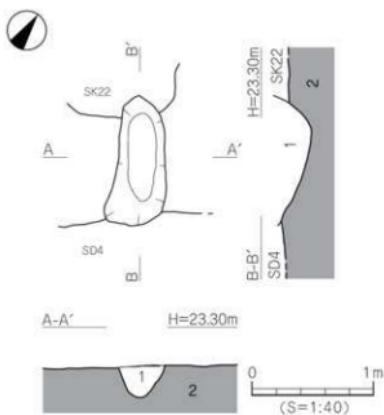
SK14は1区で検出した。平面形態は東西方向に長い隅丸長方形を呈する。検出規模は長軸(東西)

2.78m、短軸(南北)1.14m、深さ0.52mを測る。遺物は弥生土器が出土している。

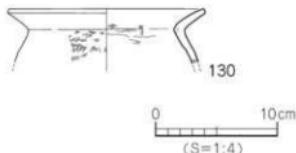
## 出土遺物(第48図、124～126)

124～126は壺。124は外反する口縁部。頸部外面はハケ目、口縁部の内外面はナデ調整である。調整は内外面ともナデ調整である。125は器壁が厚い。内外面ともナデ調整である。126の口縁端部は下方に拡張される。拡張部外面には波状文と鋸歯文が施される。

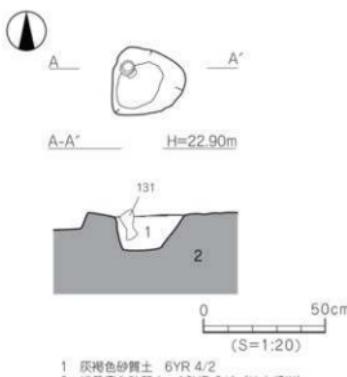
時期：出土遺物より弥生時代終末。



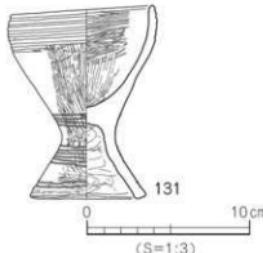
第53図 SK23測量図



第54図 SK23出土遺物実測図



第55図 SK34測量図



第56図 SK34出土遺物実測図

## SK18(第49図)

SK18は1区で検出した。平面形態は南北方向に長い楕円形を呈する。検出規模は長軸(南北)1.82m、短軸(東西)1.08m、深さ0.18mを測る。遺物は弥生土器が出土している。

## 出土遺物(第50図、127)

127は複合口縁壺。口縁すぐ頂部は上方にのびる。拡張部外面に波状文が施される。

時期:弥生時代後期後半。

## SK22(第51図)

SK22は1区の南側中央部で検出した。SK23に切られる。平面形態は東西方向に長い不整形である。検出規模は長軸(東西)2.78m、短軸(南北)1.14m、深さ0.18mを測る。遺物は弥生土器が出土している。

## 出土遺物(第52図、128・129)

128は壺の底部。平底の底部で外面はヘラミガキが施されている。129は広口壺。大きく外反する口縁部。口縁端部は下方肥厚する。内外面ともハケ目調整である。

時期:出土遺物より弥生時代後期終末。

## SK23(第53図)

SK23は1区の南側中央部で検出した。SK22を切る。平面形態は南北方向に長い隅丸長方形を呈する。検出規模は長軸(南北)1.08m、短軸(東西)0.40m、深さ0.27mを測る。遺物は弥生土器が出土している。

## 出土遺物(第54図、130)

130は壺。口縁部の外面はナデ調整、胴部外面はハケ目調整のちナデ調整である。

時期:出土遺物より弥生時代後半。

## SK34(第55図、図版9)

SK34は2区の南西部、周溝墓3のSD6郭内で検出した。平面形態は不整形である。検出規模は(南北)28.0cm、(東西)31.0cm、深さ16.0cmを測る。遺物は直立状態で弥生高壺1点が出土している。

## 出土遺物(第56図、131、図版15)

131は高壺のほぼ完形品。口径8.7cm、器高11.9cmを測る。低脚で、壺部は深い。内湾する口縁部外面に5~6条の凹線文を施す。壺部の下側外面に4~5条の沈線文、脚部外面にも上下二段の沈線文が巡る。調整は壺部の内外面と脚部外面にヘラミガキを施す。壺部の内外面には水銀朱が看取される。

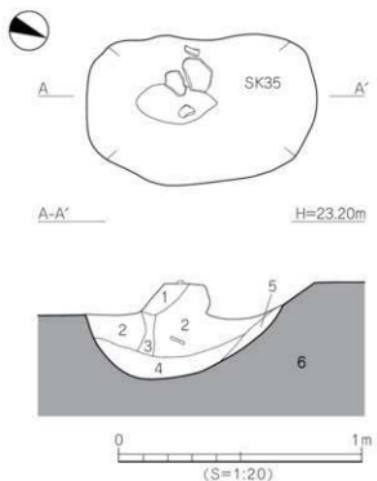
時期:出土遺物より弥生時代中期後半。

## SK35(第57図)

SK35は調査地中央部、周溝墓4のSD7掘削後に検出した遺構である。SD7と切り合いをもつが先後関係は明らかにできていない。平面形態は南北方向に長い隅丸長方形を呈する。検出規模は長軸(南北)1.08m、短軸(東西)0.40m、深さ0.27mを測る。遺物は弥生土器の壺、壺が出土している。

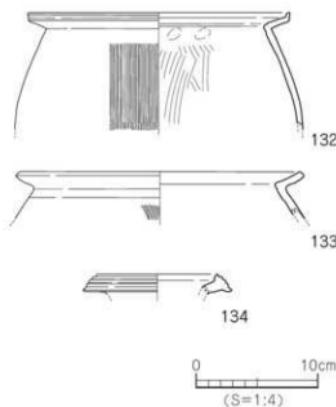
## 出土遺物(第58図、132~134)

132・133は壺。132の口縁部は強く外側に屈曲する。口縁端部外面は強いナデにより凹み、端部は上方に短くのびる。口縁の内外面はナデ調整、胴部外面はハケ目調整、内面はヘラミガキが施される。133の

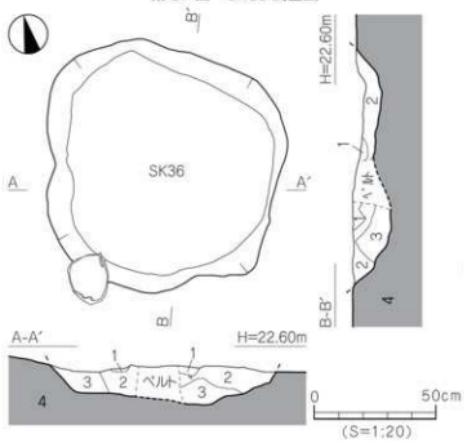


- 1 明黄褐色土 10YR 6/6
- 2 黒褐色土 10YR 3/1
- 3 黄褐色土 10YR 5/6
- 4 にじみ黄褐色土 10YR 4/3
- 5 黄褐色砂質土 10YR 5/8
- 6 浅黄褐色砂質土 10YR 8/4 (地山相当)

第 57 図 SK35 測量図

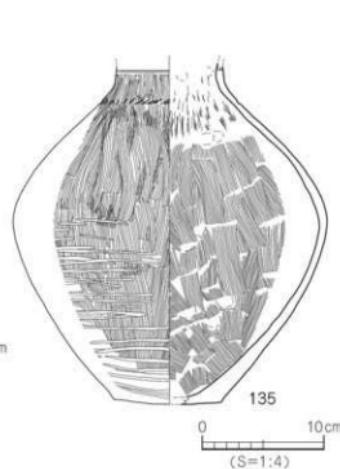


第 58 図 SK35 出土遺物実測図

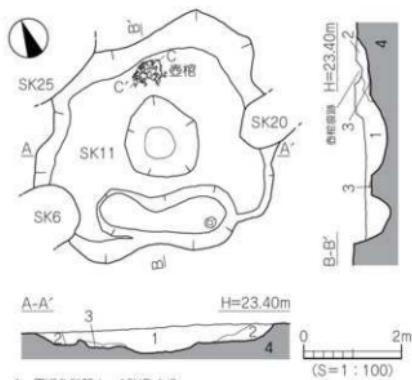


- 1 灰褐色砂質土 5YR 4/2
- 2 灰黄褐色砂質土 10YR 4/2
- 3 にじみ黄褐色砂質土 10YR 4/3
- 4 浅黄褐色砂質土 10YR 8/4 (地山相当)

第 59 図 SK36 測量図

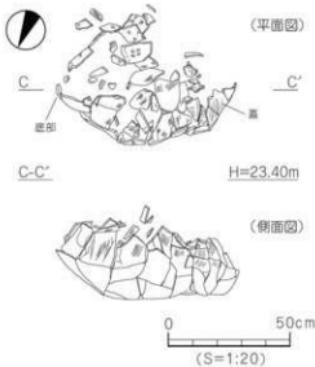


第 60 図 SK36 出土遺物実測図

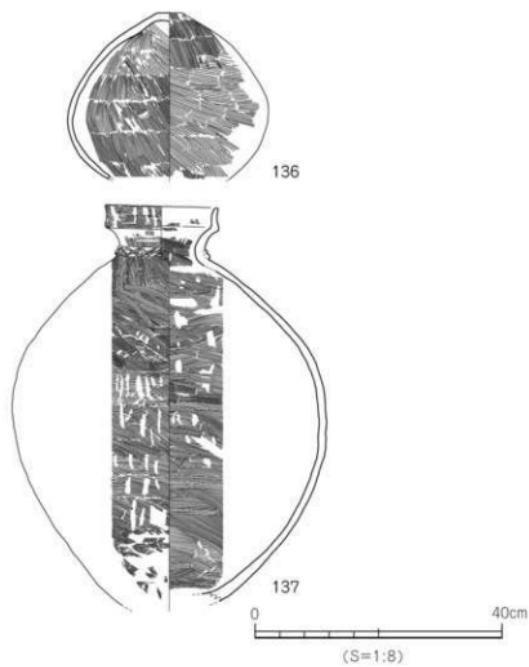


- 1 灰褐色砂質土 10YR 4/2
- 2 黑褐色土 10YR 3/1
- 3 灰黃褐色砂質土 10YR 4/2
- 4 淡黃褐色砂質土 10YR 8/4 (地山相当)

第61図 壺棺とSK11測量図



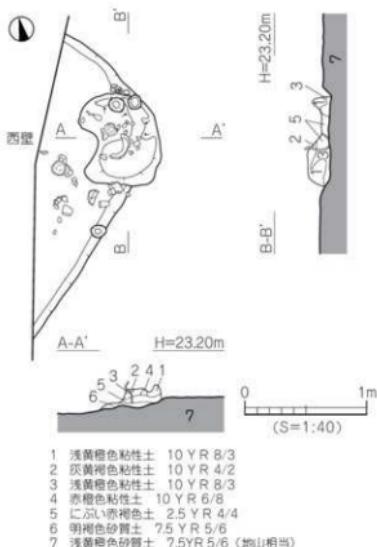
第62図 壺棺測量図



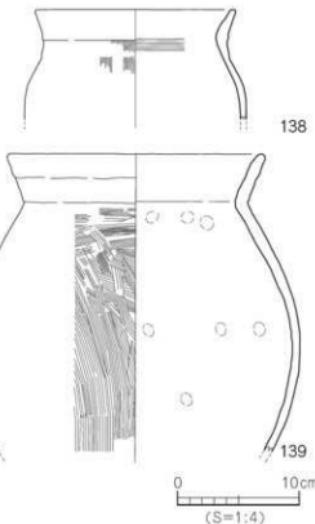
第63図 壺棺実測図

口縁部は屈曲して内湾気味に立ち上がる。口縁端部外面は凹む。134は壺。口縁端部は上下に拡張し凹線文が施される。

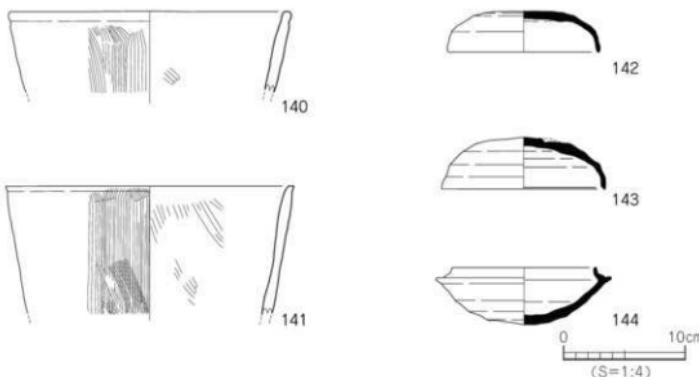
時期：出土遺物より弥生時代中期後半。



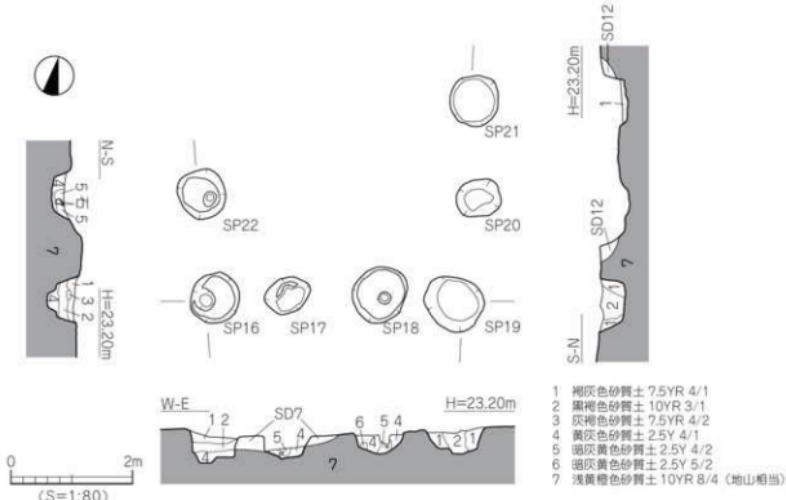
第64図 窪穴建物(SB1)測量図



第65図 SB1出土遺物実測図①



第66図 SB1出土遺物実測図②



第67図 据立柱建物 (SP16~22) 測量図

## SK36(第59図)

SK36は調査地北西部、SD11の郭内で検出した遺構である。平面形態は隅丸方形を呈する。検出規模は長軸(南北)1.04m、短軸(東西)0.94m、深さ0.17mを測る。遺物は弥生土器が出土している。

## 出土遺物(第60図、135、図版15)

135は壺。頸部以上口縁は消失する。平底の底部で胴部最大径を中位にもつ。残存高28.8cmを測る。胴部外面の調整はハケ目調整のち胴下半に横方向のヘラミガキが施される。内面はハケ目調整が施され、上半はシボリ痕を残す。

時期：出土遺物より弥生時代中期後半。

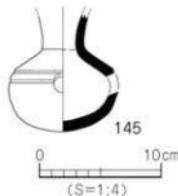
## (4) 壺棺

## 壺棺1(第61・62図)

壺棺1は調査地の南東部、SK11の上面で検出した。棺身と棺蓋で構成される。棺上部は削平のため失われている。埋納状況は横位に埋葬されている。墓坑はSK11を切っていると考えられるが、平面での墓坑プランは検出できなかった。棺身は複合口縁壺で底部は碎片のため復元できない。棺蓋は壺形土器の頸部以上を打ち欠いたものを使用する。副葬品も無く人骨も検出しなかった。

## 出土遺物(第63図、136・137、図版16)

136は棺蓋として使用された壺である。頸部以上を打ち欠き棺蓋として使用されている。底部は小さな平底で、胴部は中位が張る。調整は内外面ともハケ目調整が施される。残高27.2cmを測る。137は棺身



第68図 SP22出土遺物実測図

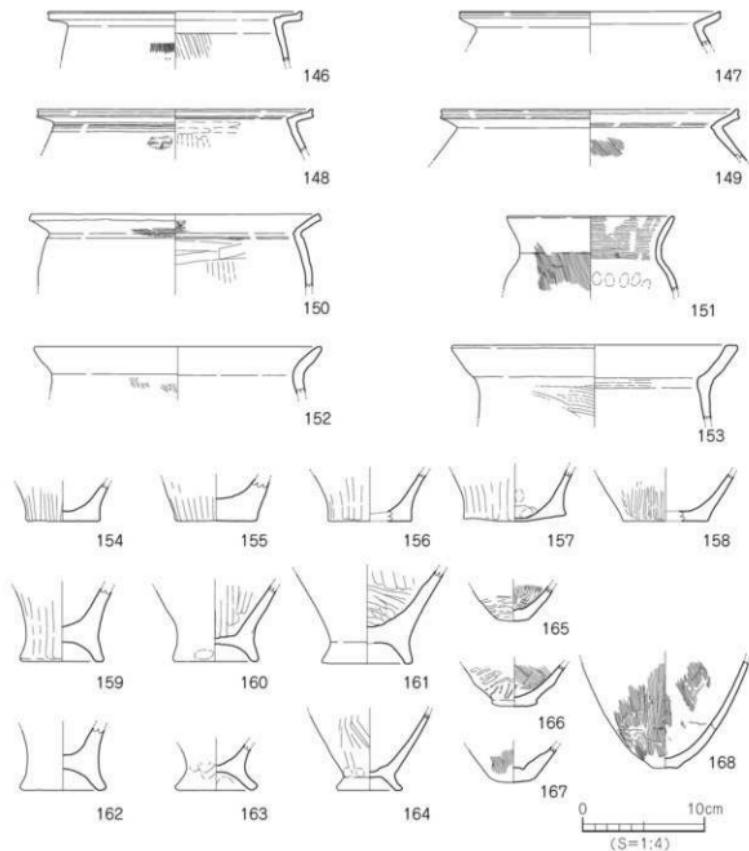
の複合口縁壺である。卵形の胴部で頸部は短く直立する。口縁部は外湾して外上方に開き、口縁拡張部は直立して上方に立ち上がる。頸部に貼付突帯が施される。胴部の調整は内外面ともハケ目調整が施される。

時期：壺の形態より弥生時代後期終末。

### (5) 竪穴建物

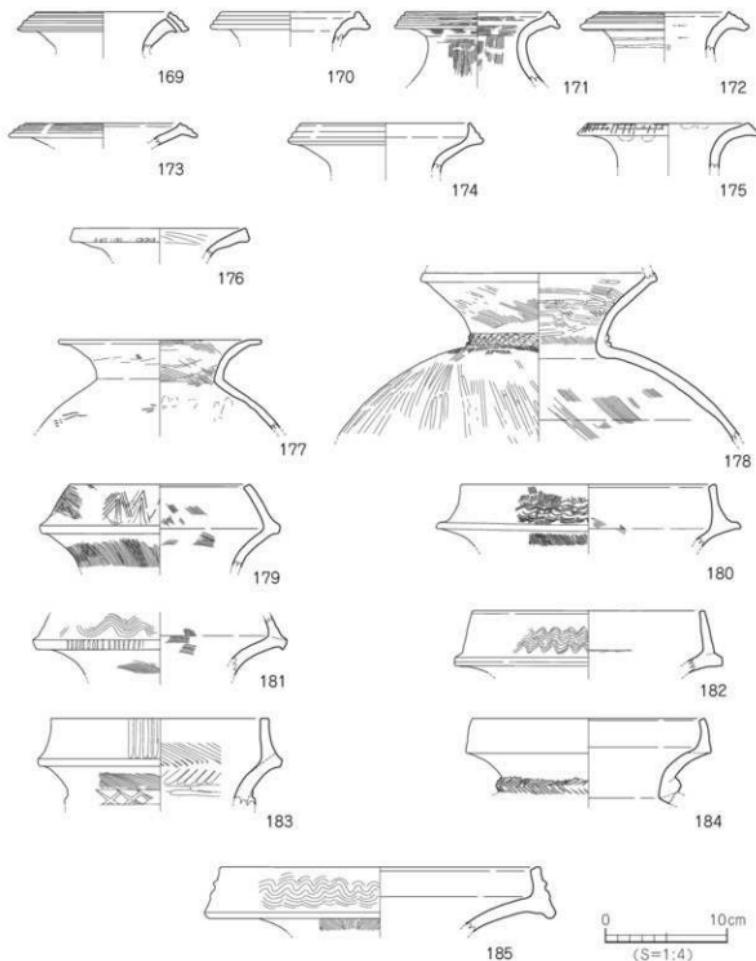
SB1(第64図)

SB1は調査地の南西部で検出した。一部の検出に留まり全容は不明である。検出部分は、平面形が隅



第69図 包含層・その他出土遺物実測図①

丸方形ないし隅丸長方形の竪穴建物のコーナー部の検出である。そのコーナー部でカマドを検出している。竪穴建物の検出規模は南北2.52m、東西1.02m、深さ0.14mを測る。カマド基底面は竪穴建物床面より高く、焚き口部だけ浅く掘り窪めている。遺物は床面上で須恵器蓋坏、土師器の壺、カマド内からは須恵器蓋坏、土師器の甕が出土している。



第70図 包含層・その他出土遺物実測図②

## 出土遺物(第65・66図、138~144、図版16)

140・141の甌、143・144の蓋坏は堅穴床面で出土し、138・139の甌、142の須恵器坏蓋はカマド内で出土した遺物である。

138・139は甌。138は絞まりのない頸部からやや外湾して開く口縁部。口縁端部は丸くおさめる。139の口縁部は外上方に直線的にのびる。外面の調整はハケ目、内面はナデ調整で指頭痕を残す。140・141は甌で胴部下半は欠失する。外面の調整はハケ目、内面はハケ目後ナデ調整が施される。

時期：出土遺物より古墳時代後期。

## (6)掘立柱建物

## 掘立1(第67図、図版9)

掘立1は調査地の北東部で検出した。東西3間、南北1~2間の検出で建物北側は検出していない。柱穴の平面形はいずれも円形を呈する。規模は直径72.0~94.0cm、深さ28.0~48.0cmを測る。遺物は柱穴SP22より須恵器の甌が出土している。

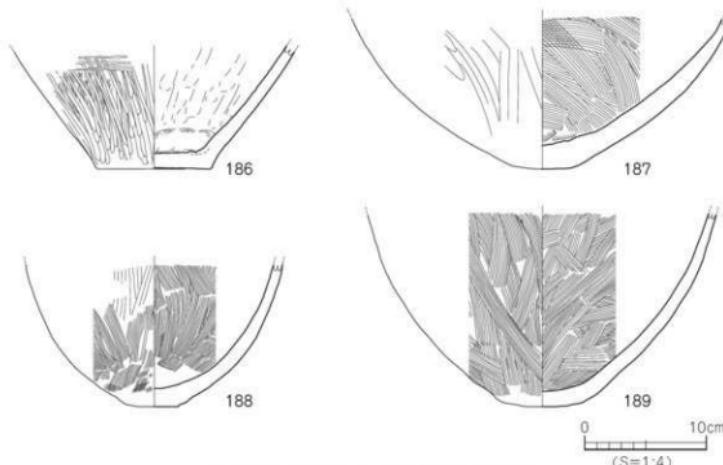
## 出土遺物(第68図、145、図版16)

145の甌は口縁部が欠失する。底部は丸く、肩部に二条の凹線を施し、円孔を穿っている。

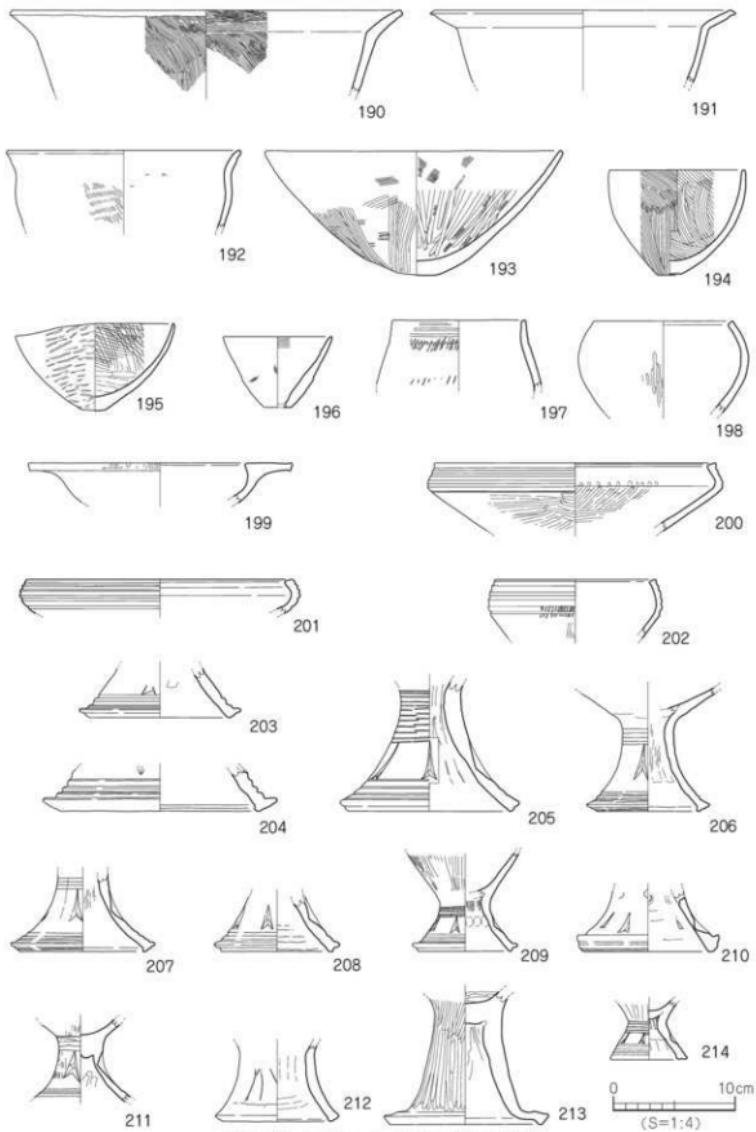
時期：出土遺物より古墳時代後期。

## (7)弥生時代～古代の出土遺物(第69~第73図、146~222、図版17)

146~168は甌である。146・148・149の口縁屈折部上面に一条の太い沈線文が施される。口縁端部は上方に拡張される。端部外面は太い凹みをもつ。胴部外面は細かいハケ目、内面はヘラミガキが施される。147も口縁屈折部上面に一条の太い沈線文が施される。口縁端部は上方にやや肥厚する。150は口縁屈曲



第71図 包含層・その他出土遺物実測図③



第 72 図 包含層・その他出土遺物実測図④



第73図 包含層・その他出土遺物実測図⑤

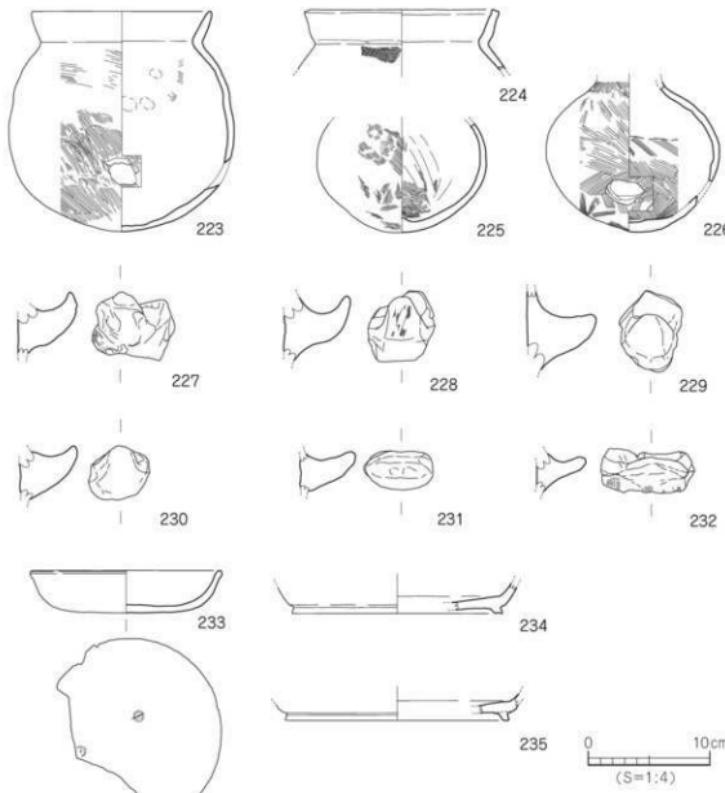
部外面に幅の広いナデにより凹む。口縁端部はやや肥厚する。151は肩部の張りが弱い。口縁部は緩やかに外反して外上方にのびる。152は肩部の張りが弱く緩やかに屈曲する口縁部。153は肩の張りが弱く口縁屈曲部内面は稜をもつ。口縁部は内湾気味に立ち上がり端部は上方に面をもつ。外面はタタキが施される。154~158は甕と考えられる胴下半から底部にかけての破片である。154~158は平底の底部。外面にヘラミガキが施される。159~164はくびれの上げ底の底部である。166~167は底部近くまでタタキが施される。

169~189は弥生時代の壺である。169~174は口縁端部が拡張され拡張部外面に凹線文が施される。169の口縁端部近くに内側~外側に貫通する直径2ミリの焼成前のかな円孔が穿たれている。175は口縁端部外面に2条の沈線文と刺突文が施される。176は口縁端部が肥厚する。口縁端部の下方に刺突点文が施される。177は広口壺。大きく外反する口縁部。178~185は複合口縁壺。178は口縁拡張部が欠失する。口縁接合部が「く」字状をなすものに184、面をもち「コ」字状を呈するものには179~183~185がある。口縁拡張部に波状文が施されるものは180~182・185、山形文を施すものには179がある。頸部に刻目突帯が施されるものは178~183~184がある。181の口縁接合部外面に刻目が施されている。調整は178の胴部外面、口縁部内面にヘラミガキが施される。183~185の内外面もヘラミガキが施されている。186~189は壺と考えられる胴下半~底部にかけての破片である。186は平底の底部。外面はヘラミガキが施される。187は丸みをもった小さな平底である。外面はミガキ、内面はハケ目調整が施される。188~189とも丸みをもった平底の底部。内外面ともハケ目調整が施

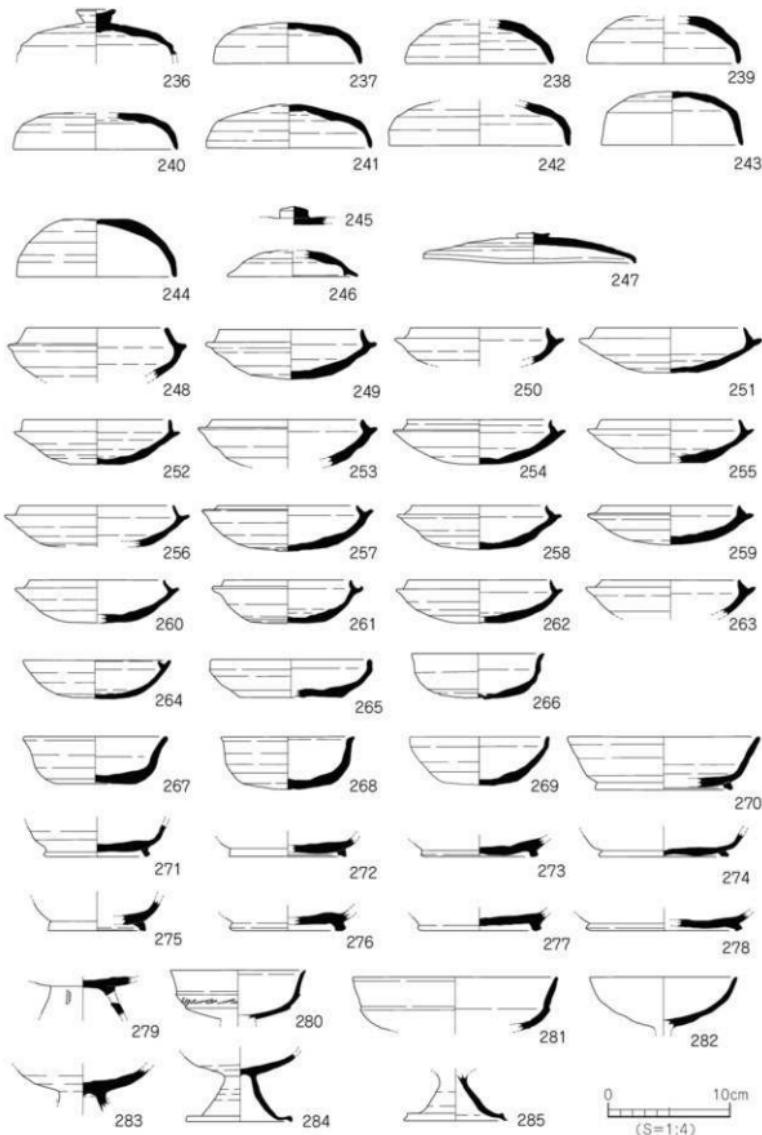
される。

190~198は鉢である。190~192は屈折する口縁部。190の調整は内外面ともハケ目調整が施される。193~196は直口口縁。193の底部は丸みのある小さな底部。調整は外面をタタキのちハケ目調整を施し、内面はハケ目のちヘラミガキを施す。194は小さく不安定な底部。調整は内外面ともハケ目調整が施される。195は小さく不安定な底部。外目の調整はタタキのちナデ、内面はハケ目調整が施される。196の底部には焼成前の円孔が穿たれている。197は内湾して立ち上がる胴部からやや外反して上方にのびる口縁部。口縁部外面に4条の沈線文を巡らしたのち、下位の沈線上と胴中位の2段に貝殻を使用した刺突文を施している。198は内湾する口縁部。外面はヘラミガキが施される。

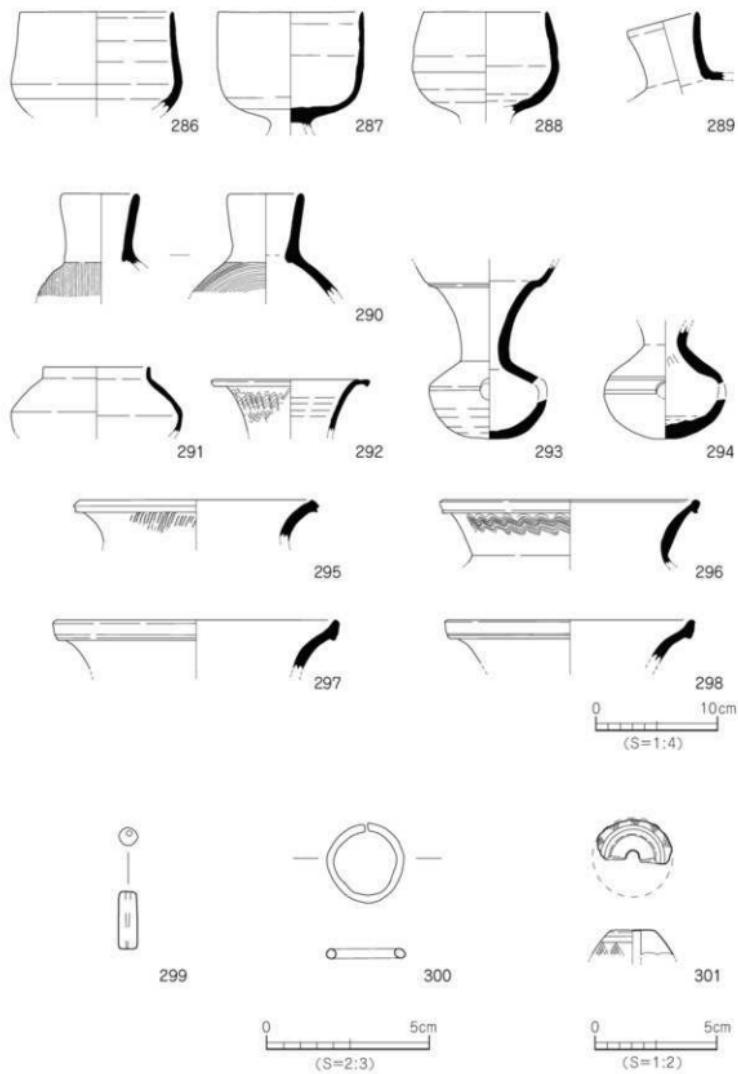
199~214は高坏である。199の坏口縁部は屈曲して水平にのびる。200は口縁端面から口縁部外側にかけて凹線文が施される。調整は内外面ともヘラミガキが施される。201は口縁部外面に凹線文が施さ



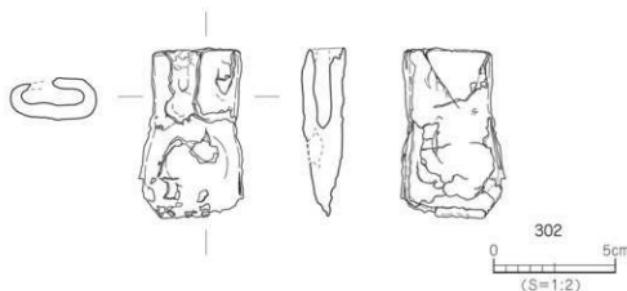
第74図 包含層・その他出土遺物実測図⑥



第75図 包含層・その他出土遺物実測図⑦



第 76 図 包含層・その他出土遺物実測図⑧



第77図 包含層・その他出土遺物実測図⑨

れる。端部は面をもつ。202は口縁部外面に凹線文を施し、凹線文上に「ノ」字状の刺突文を巡らす。203・204は脚裾に凹線文が施される。205は脚柱上部に沈線文、中位に矢羽根透かし、脚裾は4条の凹線文、脚端面に太い1条の凹線文が施される。内面にはシボリ痕が残る。206・207は脚柱上部に沈線文、中位に矢羽根透かし、脚裾は3条の凹線文、脚端面に細い2条の凹線文が施される。内面にはシボリ痕が残る。208は脚裾部に太い2条の凹線文、脚端面に太い1条の凹線文が施される。209は低脚である。脚端面に太い1条の凹線文が施される。210の脚端は内側で接地する。脚裾端部外面に2条の凹線文が施される。脚柱に円孔と矢羽根透かしが施される。212の脚柱には矢羽根透かしが沈線で描かれている。213の脚裾は屈曲して水平に短くのびる。裾端面は強いナデにより凹む。外面はヘラミガキが施される。内面はシボリ痕を残す。214はミニチュア品である。脚柱は沈線文、矢羽根透かし、凹線文が施される。

215～217は支脚。215・216は中実で円柱状の支脚である。217は突起の付く支脚で背面にも小さな突起が付くタイプのものである。

218は弧背直刃の石包丁。材質は緑色片岩である。

219は砥石。材質は流紋岩で色調は白色を呈する。

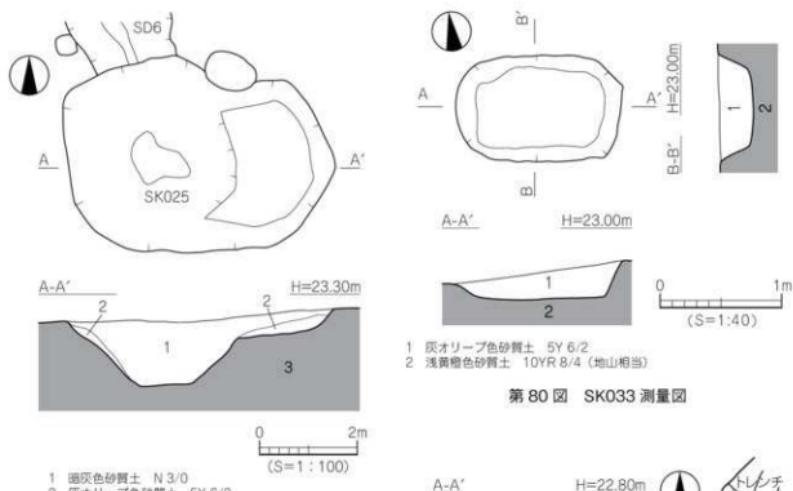
220・221は有溝の石錘。220は縱半分が欠失する破損品。両端近くに紐掛部として浅い溝が彫られる。材質は緑色片岩である。221は重さ467.59gを測る。材質は砂岩である。

222は無茎の石鎌。材質はサヌカイト系安山岩。

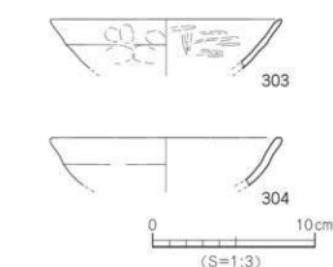
#### (8) 古墳時代の出土遺物(第74～第77図、223～302、図版18・19)

223・226は甕。223は丸底の底部。胴部は下ぶくれ気味。肩の張りは弱く口縁部は屈曲して外上方にのびる。胴下位に打ち欠いたと考えられる円孔が看取される。外面はハケ目調整が施される。224はやや内湾して立ち上がる口縁部。口縁端部は面をもつ。225は丸底の底部片。外面の調整はハケ目のちナデが施される。内面はハケ目調整のち工具によるナデ調整が施される。底部にハケ目のシボリ痕を残す。226は壺。口縁部は欠失する。やや突出する丸底の底部。胴下位に打ち欠いたと考えられる円孔が看取される。胴部上半はハケ目のちミガキ、胴下半はハケ目調整が施される。227～232は甕の把手。

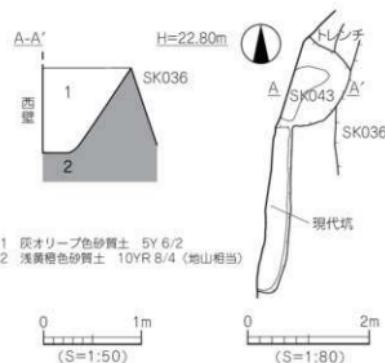
233は土師器坏。推定口径15.4cm、器高3.48cmを測る。調整は磨滅のため不明。底部外面二ヵ所に「①」のスタンプ文(図版18)が施される。234・235は高台付の坏。234の高台端面は強いナデにより凹む。235の高台底面は平坦である。



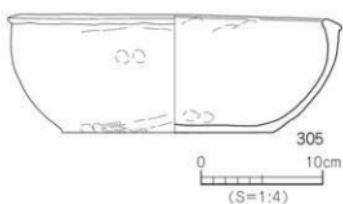
第 78 図 SK025 測量図



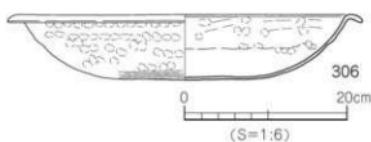
第 79 図 SK025 出土遺物実測図



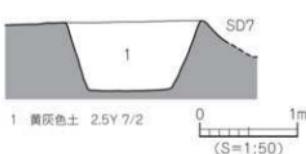
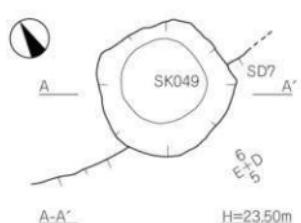
第 82 図 SK043 測量図



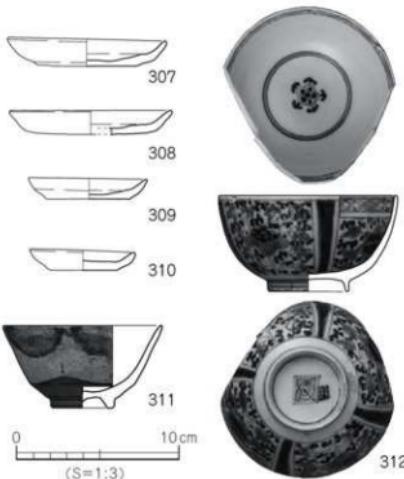
第 81 図 SK033 出土遺物実測図



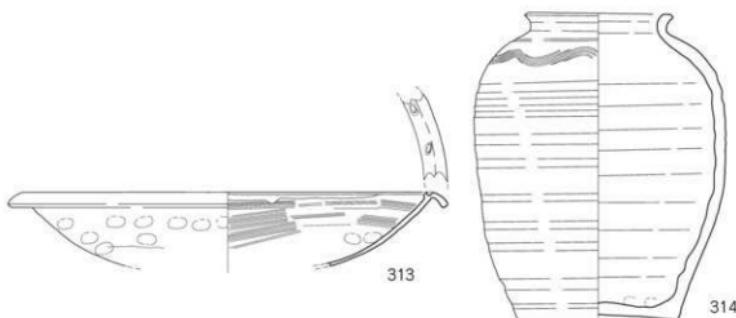
第 83 図 SK043 出土遺物実測図



第84図 SK049測量図



第85図 SK049出土遺物実測図①



第86図 SK049出土遺物実測図②

236～247は須恵器蓋。236はツマミが付く。ツマミ中央部は凹む。237～242は扁平な天井部。243・244の天井部は丸味をもつ。口縁端部は尖り気味。245はツマミ部。土師質で中央部が尖る。246はかえりが付く。247はツマミが扁平で低い。口径17.6cm、器高2.3cmを測る。内外面に朱が付着する。

248～264はたちあがりのある坏身。248のたちあがりは内傾して上方にのびる。口縁端部は丸くおさめる。受部は水平にのびる。249のたちあがりは内傾したのち外反して端部は上方に短くのびる。250～264のたちあがりは短く、坏部が浅い。259は底部外面にヘラ記号と思われる沈線が1条施されるが破片のため全容は不明である。

265～278は坏身。265・269は平坦な底部。口縁部は内湾して上方に立ち上がる。口縁端部は丸くおさめる。266の口縁部は外反する。267はやや外反して立ち上がる口縁部。268の底部は平坦で口縁端部は外上方に短くのびる。270～278は高台が付く。高台端部が内側で接地するものに271・273・276～278、外側で接地するものに272・274・275がある。

279～285は高坏。279は脚部片。脚柱に縱長の不整形な孔が施される。280・281は無蓋高坏。280の文様体帶には櫛状工具による刺突文が施される。281は大型品。282は内湾して立ち上がる口縁部。283は接合部。284・285は低脚である。裾端部は上下に拡張する。

286～288は脚部は欠失するが台付鉢と考えられる。286の口縁部はやや内傾して立ち上がる。口縁端部は丸くおさめる。287は直線的に上方に立ち上がる口縁部。口縁端部は丸くおさめる。288は内湾して立ち上がる口縁部。口縁端部は丸くおさめる。

289は横瓶の口縁部。290は提瓶。291は短頭壺。口縁部は上方に短く立ち上がる。口縁端部は丸くおさめる。

292は広口壺。口縁端部は下方に拡張する。頭部外面には波状文が施される。293・294は甌。293は扁平で肩の張る胴部。294は肩部に2条の沈線と円孔が施される。

295～298は甌。295の口縁端部は下方に拡張される。口縁外面に斜位のヘラ描文が施される。296～298の口縁端部は上下に拡張される。296の口縁外面には波状文が施される。

299は管玉。II地区で出土した。碧玉製で色調は濃緑色である。長さ1.80cm、直径0.55cmを測る。

300は耳環。J4地区で出土した。銅芯金張で金箔が僅かに残る。

301は紡錘車の破片。H7地区で出土した。滑石製で鋸歯文が施されている。

302は袋状鉄斧。I3地区で出土した。袋部の折り返しは一部が欠損する。全長7.0cm、基部幅3.6cm、刃幅4.2cm、袋部の厚さ1.7cmを測る。やや弱い肩をもち、袋部から刃部にかけて幅が少し広くなる。

## 2. 中・近世以降の遺構・遺物

中・近世の遺構は井戸、土坑、柱穴などの遺構が見つかっている。中世の遺構は少なく、その殆どは近世以降の遺構である。それらの整理に至っては未整理のものが多く残り、遺構・遺物図など全体を図示することは難しかった。今回はその中の一部を簡単に報告するものである。

### (1) 土坑

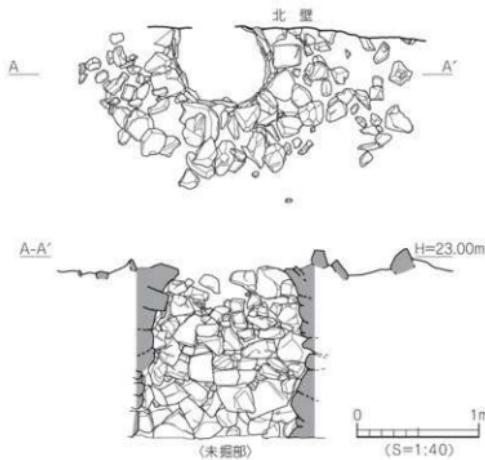
#### SK025(第78図)

SK025はG、F4地区で検出した。周溝墓3のSD6を切る。平面形は東西に長い不正形を呈する。検出規模は長軸(東西)5.50m、短軸(南北)3.50m、深さ0.48～1.28mを測る。規模の大きな土坑であるが出土遺物も少なく性格は不明である。土師器碗、瓦器碗が出土している。

## 出土遺物(第79図、303・304)

303は瓦器椀。口縁端部は丸くおさめる。304は土師器椀。口縁端部は丸くおさめる。

時期：出土遺物より13世紀代と考えられる。



第87図 SE01測量図

## SK033(第80図)

SK033はG7地区で検出した。

平面形は東西方向に長い隅丸長方形を呈する。検出規模は長さ1.38m、幅0.89m、深さ0.24mを測る。土師質の鉢が1点出土している。

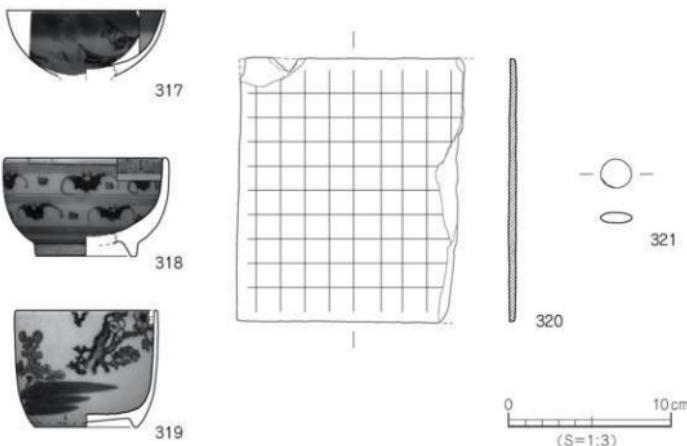
## 出土遺物(第81図、305、図版20)

305は土師質の鉢。口径24.8cm、器高9.8cmを測る。底部は平底で口縁端部は外方に肥厚し、外傾する面をもつ。

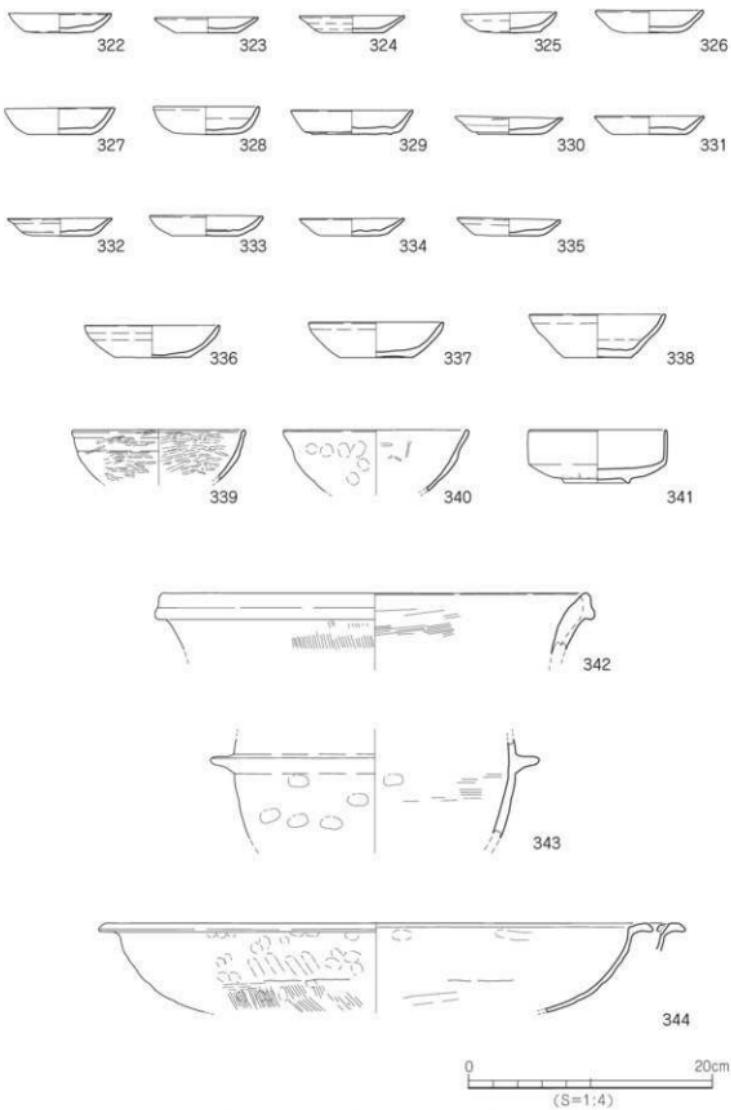
時期：出土遺物より19世紀。

## SK043(第82図)

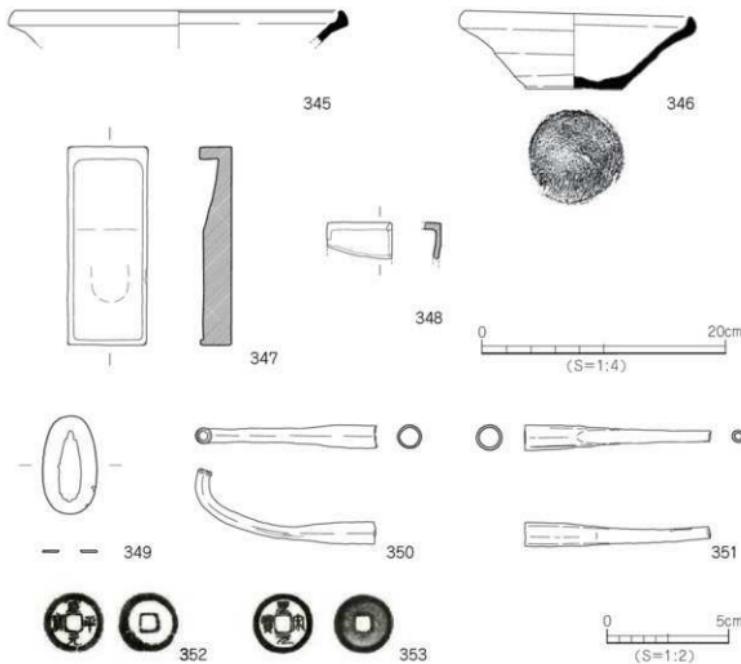
調査地の西側I8地区で検出した。西側は調査区外となり全容は不明である。検出規模は東西



第88図 SE01出土遺物実測図



第 89 図 中世以降の出土遺物実測図①



第90図 中世以降の出土遺物実測図②

0.40~0.96m、南北1.40m、深さ0.86mを測る。遺物は土師器や陶磁器などが出土しているが数は少ない。

出土遺物(第83図、306)

306は焙烙鍋。推定口径41.2cm、器高8.0cmを測る。土師質で内外面とも指頭痕を顯著に残す。

時期:出土遺物より19世紀。

#### SK049(第84図)

SK049はE5地区で検出した。周溝墓4のSD7を切る。平面形は円形を呈する。検出規模は直径1.38m、深さ0.76mを測る。遺物は土師器、陶磁器が出土している。遺物出土状況から廃棄土坑と考えられる。

出土遺物(第85・86図、307~316、図版20)

307~310は土師器皿。すべて口縁部に煤跡を残す灯明皿である。底部の切り離しはすべて回転糸切りである。311は肥前系の陶器碗。高台部は無軸となる。312は肥前系の染付碗で見込みに五弁花文を描き、高台内面に渦巻の銘をもつ。外面はたちあがりに二重圓線を引き、割花唐草文が描かれる。口径11.0cm、器高5.0cmを測る。313は焙烙鍋、314は備前焼の壺である。口径11.7cm、器高25.2cm、底径13.0cmを測る。

肩部に櫛描文が施される。315・316は火鉢の破片。同一個体の可能性がある。

時期：出土遺物より18世紀と考える。

### (2) 井戸(SE)

SE01(第87図、図版9)

SE01は調査地の北側で検出した石組みの井戸である。北側の一部は調査区外となっており、全容は不明である。検出規模は直径78cm、深さ128cmを測る。掘削は安全面を考えて完掘は行っていない。石材は花崗岩の割石が使用される。井戸の検出面周囲には壊された石材が散乱する。遺物は陶磁器などが出土している。

出土遺物(第88図、317～321、図版19)

317は産地不明の磁器碗である。国旗と提灯文様のはか人物文が描かれている。318は砥部焼と思われる蝙蝠文の飯茶碗。口縁部端部と口縁内面は無釉である。319は筒形椀。産地不明で梅菊文が描かれている。320は圓菴もしくは将基盤と思われる。破損品で材質は粘板岩である。色調は黒色を呈し、片面に基盤の目状に線が刻まれる。目の間隔は15cmを測る。321は碁石と思われる土製品。直径1.7cmを測る。色調は褐色を呈する。

時期：出土遺物より20世紀前半に埋没したものと考える。

### (3) 中世以降の出土遺物(第89・90図、322～353、図版20)

表土掘削中や遺構検出時に出土したもので、出土場所が不明確な遺物である。土師器、陶磁器、石製品、鉄製品などが出土している。

322～335は土師器皿。口縁部に煤跡を残すものではなく、灯明皿として使用されたものはない。底部の切り離しはすべて回転糸切りである。336～338は土師器壺。底部の切り離しは回転糸切りである。339は内黒の土師器椀。口縁部の小片で、底部は欠失する。340は瓦器椀。口縁部の小片で、底部は欠失する。341は縁袖陶器。高台部は露胎となっている。342は土師質の鉢。343は羽釜。344は焙烙鍋。345・346は東播系こね鉢。347・348は硯。347は流紋岩製で完存品。長さ16.3cm、幅7.0cm、厚さ2.5cmを測る。348は粘板岩製である。349は鐔。長さ4.0cm、幅2.2cmを測る。350は煙管の雁首。長さ7.5cmを測る。351は煙管の吸口。長さ7.6cmを測る。いずれも銅製。352・353は銭貨。352は「咸平元寶」。初鑄年は北宋998年。方孔錢。353は「聖宋元寶」。初鑄年は北宋1101年。方孔錢。

## 第4節 小 結

3次調査では、主な遺構として周溝墓8基（周溝墓1～8）や性格不明遺構（SX1）のほか土坑、溝などを検出した。ここでは、報告書が刊行されていない1次調査で検出した周溝墓や周溝状遺構の配置図（第91図）を見ながら、3次調査で検出した周溝墓の周溝郭内の平面形態、規模、主体部、出土遺物、時期のほか、周溝墓3やSX1について述べることとする。なお、周溝墓とした中には古墳と呼ぶべきもののが存在するかも知れないが、墳丘など不明の部分が多いことから、ここでは周溝墓として取り扱った。

若草町遺跡 3 次調査



第 91 図 若草町遺跡 1 次・3 次調査地遺構合成図

### (1) 平面形態

周溝郭内や周溝の平面形態は円形、方形、弧状の3タイプに分類できる。方形のものは一部が途切れ陸橋となるため周溝郭内が前方後方形を呈する。検出数は円形を呈するもの6基(周溝墓1・2・4・5・7・8)、方形を呈するもの1基(周溝墓3・SD6)、弧状を呈するもの1基(周溝墓6・SD10)である。1次調査でも同様な分類が可能となっている。検出した周溝は1・3次調査ともに近世以降の遺構などそのため、途切れずに全周するものは確認できていない。

### (2) 規模

円形のものは周溝を含めた外法で直径が10m未満のものに周溝墓1・2・5・6があり、直径または1辺が10mを超えるも周溝墓3・4・7・8がある。弧状の周溝墓6はその形状より推定直径が約7m前後の円弧と推察できることから、直径10m以下に分類した。これらより、直径10m未満の小型のものと直径または1辺が10m以上の大型の二つのグループに分けられる。3次調査で最大のものは周溝墓4(SD7)で直径は19.70mを測る。同規模のものは1次調査でも検出している。1次調査のSD26は円形の周溝で、周溝を含めた直径が約19mを測る。SD26の郭内からは壇棺11基が確認され、壇棺を主体部とする弥生時代後期の周溝墓と考えられている。規模については、1次調査を含めればもう少しの細分が可能で中型の設定が可能のようである。

### (3) 周溝の切り合い関係

1・2次調査とも直径10mを超えるものでは、周溝が接するものはあるが、明確に切り合うものはない。このことは、10m以上のものは計画性を持って周溝が造られたものと考えられる。今回の調査では直径19.70mの大型の周溝墓4と直径6.92mの小型の周溝墓5の切り合い関係が認められた。このことは、先後関係を考える上で貴重な資料となる。また、調査で検出した掘立柱建物跡1のSP22からは古墳時代後期の遺物が出土しており、SP22は周溝墓4のSD7を切っていることから、SD7は古墳時代後期には完全に埋没していると考えられる。おそらく、ほかの周溝も同様であるものと思われる。

### (4) 主体部

主体部の検出は周溝墓1(SK44)と周溝墓2(SK33)の2基のみである。いずれも東西方向の隅丸長方形の土坑墓である。SK33では平面精査により木棺痕跡と思われる土色の相違を検出したことから、木棺が使用されたと考えられる。釘などが出土していないことから組合せ式の木棺と想定される。SK44・SK33とも時期決定に有効な遺物の出土は無かった。

### (5) 周溝内出土遺物と時期

周溝内埋土からは弥生時代中期後半～古墳時代初頭の遺物のほか、古墳時代後期の須恵器などが出土している。弥生土器は中期後半の土器が比較的多く出土している。須恵器については、周溝墓4のSD7と周溝墓7のSD11からの少量の出土であり、周溝検出時に平面で確認できなかった溝を切る遺構の遺物と考えている。

周溝埋土から出土した遺物より、弥生時代後期としたものが5基、古墳時代初頭としたものが2基、時期決定に有効な出土遺物がなく時期不明が1基である。時期不明とした周溝墓もその配置状況から弥生時代後期以降のものと考えられる。

### (6) 周溝墓3とSX1について

周溝墓3のSD6は方形タイプであるが北側に陸橋部をもって突出し、その郭内の平面形は前方後方形

を呈する古墳時代初頭の周溝墓である。周溝 SD6 の埋土からは、纏向 3 式、布留 0 式併行期と考えられる円形浮文で加飾された二重口縁壺の口縁部片が出土している。この SD6 の東側に SX1 がある。1 区の調査時には、調査区の北壁際にあったことから、その存在に気づかず SD6 として掘削を行っていたところ上層で二重口縁壺 1 点が出土している。1 区を埋め戻し 2 区の遺構検出時にも周溝墓 3 (SD6) と周溝墓 4 (SD7) とに接していることから、検出面の精査でも埋土色の違いを把握できず、切り合い関係を確認できなかった。SD7 の掘削を進めていくと溝底の地山面上で SD6 から東側に不自然に膨らむプランを確認した。土層観察用のベルト断面では、不明瞭ながら SD6 を切っている様子を確認したことから別遺構と判断して SX1 と呼称した。

SX1 は、段をもつ土坑状の遺構で埋土中より焼成前に底部穿孔されたいわゆる壺形埴輪と呼ばれる二重口縁壺 2 点と手培り形土器 1 点のほか、高坏の破片 1 点が出土している。出土した二重口縁壺は底部に焼成前の穿孔があるが、2 点とも底部に「打ち欠き」が行われている。このことは「打ち欠き」という行為自体が何らかの儀式に重要であったことを示すものとして貴重な資料を得られた。SX1 の性格について明確に判断はできないが出土した遺物より、埋葬施設そのものや葬送に関係する祭祀跡などが想定されよう。時期は手培形土器が庄内期に、二重口縁壺は纏向 4 式、布留 1 式並行期と考えられ周溝墓 3 の SD6 に後続する遺構と考えている。

以上、主に周溝墓、祭祀関連の遺構について概略を記した。時期については、いまだ未整理の 1 次調査の報告次第では検討や見直しを行わなければならないが、今回検出した周溝墓の時期を弥生時代後期後半～古墳時代初頭に比定した。本調査地の西 120m に所在する 4 次調査地や南西 160m に所在する 2 次調査地では石室を伴う古墳時代後期の古墳が見つかっており、平地部にも古墳が造営されたことが明らかとなっている。このことは、時代が下ることに墓域が西方および南西方向へ広がった様子が伺われる。また、1・2 次調査では弥生時代後期～古墳時代初頭の堅穴建物跡が見つかっており、近接する集落と墓域の関係も明らかにしなければならない。いずれにせよ若草町遺跡の周溝墓を語るには、1 次調査の報告書作成が急務であろう。

#### 【参考文献】

- 土井光一郎・伊藤祐三 「若草町遺跡Ⅱ」(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター 1996  
 相原浩二・栗田茂敏 「若草町遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅲ』松山市教育委員会・松山市立埋蔵文化財センター 1991  
 梅木謙一・村上恭通・内田俊秀・本田光子ほか 「朝日谷 2 号墳」松山市教育委員会・(財)松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センター 1998  
 石野博信 編 「纏向」奈良県立橿原考古学研究所 1976  
 寺沢 薫 「畿内古代土師器の編年と二、三の問題」「矢部遺跡」奈良県立橿原考古学研究所 1986  
 普原康夫・梅木謙一 「弥生土器の様式と編年—四国編—」(株)木耳社  
 高橋一夫 「手培形土器の研究」六一書房 1998

## 第IV章 若草町遺跡4次調査

### 第1節 調査の経過

#### 1. 調査に至る経緯

平成23年11月21日、四国旅客鉄道株式会社代表取締役社長 泉 雅文氏（以下、申請者という。）より愛媛県松山市若草町4番1の一部（以下、申請地といふ。）における埋蔵文化財の確認願が松山市教育委員会文化財課に提出された。確認願が提出された申請地は、周知の埋蔵文化財包蔵地「No.212若草町遺跡」内に所在する。同包蔵地内では、若草町遺跡として3度の発掘調査が実施されており、弥生時代終末期の環濠や周溝墓のほか、古墳時代の竪穴建物や石室及び古墳に伴う周溝等が発見されている。なかでも、若草町遺跡1次調査では、土坑内より中国製の鏡（重圓日光鏡）が出土している。また、若草町遺跡2次調査では、古墳時代の石室6基を検出している。

これらのことから、平成23年12月13日（火）～同年12月20日（火）に、財團法人松山市文化・スポーツ振興財團埋蔵文化財センター（以下、埋蔵文化財センターといふ。）は、申請地における試掘調査を実施した。その結果、溝を検出したほか弥生時代前期末と弥生時代後半の土器片が出土した。試掘調査の結果を受け、申請者と埋蔵文化財センターの間で協議が行われ、破壊される遺跡に対して、記録保存のための発掘調査を実施することとなった。調査は埋蔵文化財センターが主体となり、平成26年4月14日より発掘調査を開始した。

#### 2. 調査の経過

発掘調査は平成26年4月14日から同年5月9日まで実施した。以下、調査経過を略記する。

4月14日（月）：調査地の安全対策として、調査地内にピンボールを打設し、ロープ張りを行う。

併用して発掘用具を搬入する。その後、調査区を設定し、調査を進めた。試掘調査の結果を踏まえて、重機（バックフォー0.25m<sup>3</sup>）を使用し、地山上面までの掘削を行い、同日終了する。

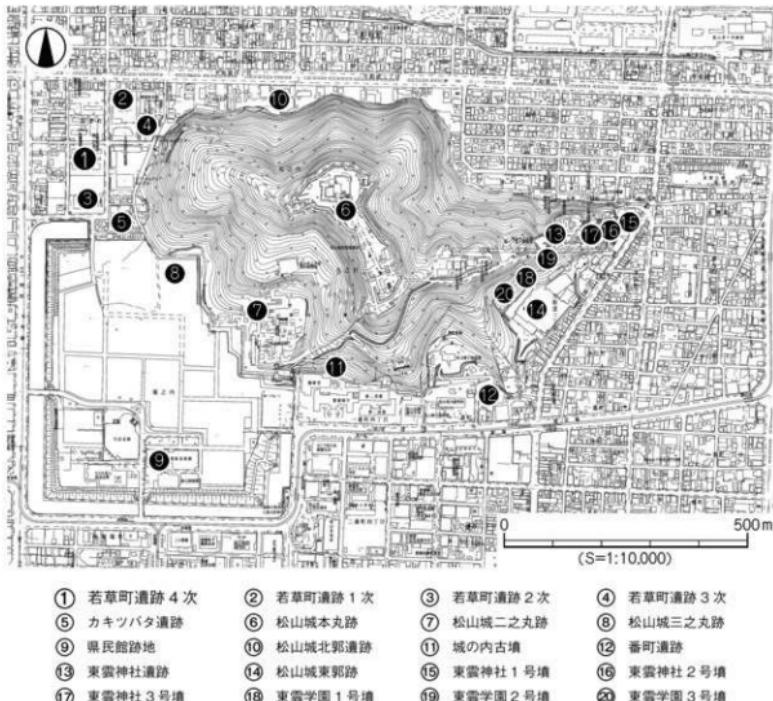
4月15日（火）：遺構検出作業を行う。4月17日（木）終了する。

4月18日（金）：遺構検出状況写真を撮影する。遺構は古墳（石室）、溝、土坑、柱穴を検出する。

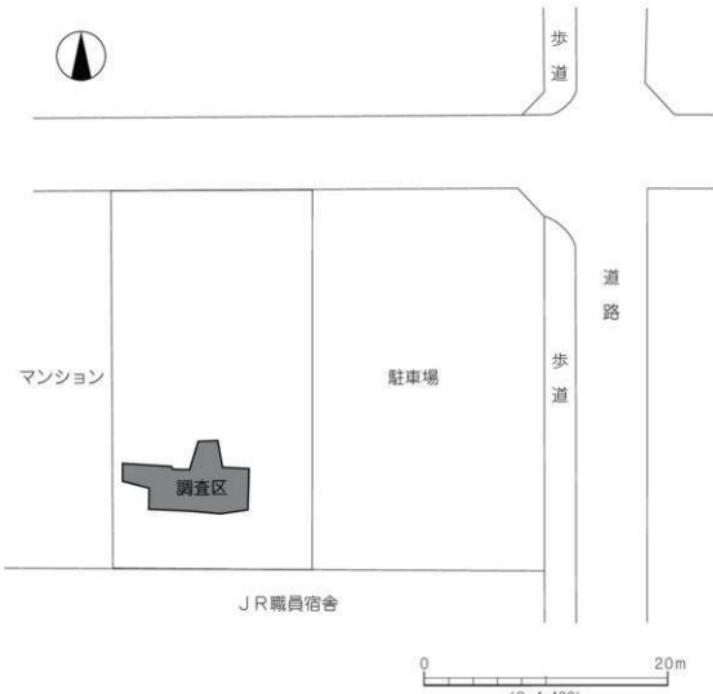
4月21日（月）：南海測量設計株式会社に基準点測量業務を委託し、調査地内に4級基準点を打設する。

4月22日（火）：石室の掘り下げと遺構の半截作業を開始する。その後、土層の堆積状況や遺物出土状況写真を撮影する。遺構は全掘した後、平板測量にて完掘測量図を作成し、併行して土層図を作成する。同日、四国旅客鉄道株式会社 一小路、蝶野両名が現場を見学し、進捗状況や出土した遺物を説明する。

- 5月2日（金）：ローリングタワーを使用して、遺構完掘写真を撮影する。
- 5月7日（水）：重機（バックフォー 0.25m<sup>3</sup>）を使用して、石室の周辺を拡張掘削する。
- 5月8日（木）：拡張区の遺構検出状況写真を撮影し、その後、掘削や測量をする。
- 5月9日（金）：調査区を重機（バックフォー 0.25m<sup>3</sup>）の使用により埋め戻しを行い、屋外調査を終了する。



第1図 周辺の遺跡分布図



第2図 調査地位置図

## 第2節 層位 (第3・4図、図版21)

調査地は松山平野中心部、松山城北西麓の標高約225m前後に立地する。調査以前は、駐車場として利用されていた。調査で確認した土層は、以下の5種類（第I～V層）である。第I層は現代の開発に伴う造成土、第II層は中世から近世までの堆積土や造成土である。なお、第III層中からは弥生時代から古墳時代、第IV層中からは主に弥生時代の遺物が出土した。

第I層：造成土で、土質・土色の違いにより6種類に分層される。

第I①層－バラス層で調査区全域にみられ、層厚5～12cmを測る。

第I②層－造成土（コンクリート・真砂土等を含む）で調査区ほぼ全域にみられ、層厚8～85cmを測る。

第I③層－オリーP黑色土〔7.5Y 3/2〕に煉瓦と礫等を含むもので、調査区北側中央部西寄りから北東部にみられ、層厚2～35cmを測る。

第I④層－暗灰黄色土〔2.5Y 4/2〕に、にぶい黄色土〔2.5Y 6/4〕がブロック状に混入するもので、

調査区東側中央部と南側中央部から西寄りでみられ、層厚4～10cmを測る。

第I⑤層－暗灰黄色土〔25Y 4/2〕に焼土が大量に混入するもので、調査区東側中央部と南側中央部東寄りでみられ、層厚3～11cmを測る。

第I⑥層－暗灰黄色土〔25Y 4/2〕に炭化物と灰を含むもので、調査区南東部の一部、北側中央部東寄り、東側中央部北寄りでみられ、層厚2～10cmを測る。

第II層：土色・土質の違いにより、8種類に分層される。

第II①層－灰黄色砂質土〔25Y 6/2〕に、にぶい黄色土〔25Y 6/4〕がブロック状に混入するもので、調査区南東部の一部、北側中央部から西寄り、東側中央部北寄りでみられ、層厚2～15cmを測る。

第II②層－明オリーブ灰色土〔25GY 7/1〕で、調査区南東部の一部と北側中央部西寄りでみられ、層厚2～8cmを測る。

第II③層－明オリーブ灰色土〔5GY 7/1〕で、北側中央部から東寄り、東側中央部でみられ、層厚2～20cmを測る。

第II④層－暗灰黄色土〔25Y 5/2〕に炭化物と灰が混入するもので、調査区北側中央部から西寄り、東側中央部北寄り、南側中央部でみられ、層厚2～25cmを測る。

第II⑤層－にぶい黄色土〔25Y 6/4〕で、調査区南東部の一部、北側中央部から北側中央部西寄り、南側中央部でみられ、層厚2～12cmを測る。

第II⑥層－黒色砂質土〔25Y 2/1〕で、調査区東側中央部と南西部でみられ、層厚4～55cmを測る。

第II⑦層－暗灰黄色土〔25Y 5/2〕で、調査区北西部の一部、北側中央部から北側中央部西寄りでみられ、層厚10～45cmを測る。

第II⑧層－褐灰色土〔10YR 4/1〕で、調査区東側ほぼ全域、北東部の一部、南側中央部から南側東ではほぼ全域にみられ、層厚4～26cmを測る。

第III層：黒褐色土〔7.5YR 3/1〕で、調査区西側中央部の一部、東側中央部のほぼ全域、北側中央部の一部、北東部の北側でみられ、層厚2～24cmを測る。

第IV層：オリーブ黒色土〔5Y 3/2〕で、調査区南西部の一部、北側中央部から北側中央部西寄りでみられ、層厚8～35cmを測る。

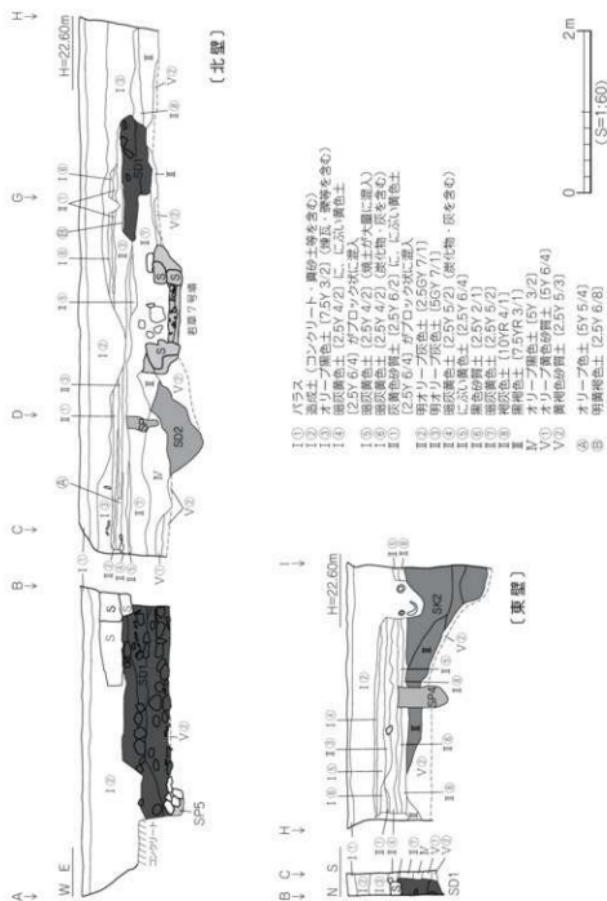
第V層：地山で、土色・土質の違いにより3種類に分層される。なお、本層上面は調査における最終遺構検出面である。

第V①層－オリーブ黄色砂質土〔5Y 6/4〕で、調査区北側中央部西寄りでみられ、層厚7～10cmを測る。

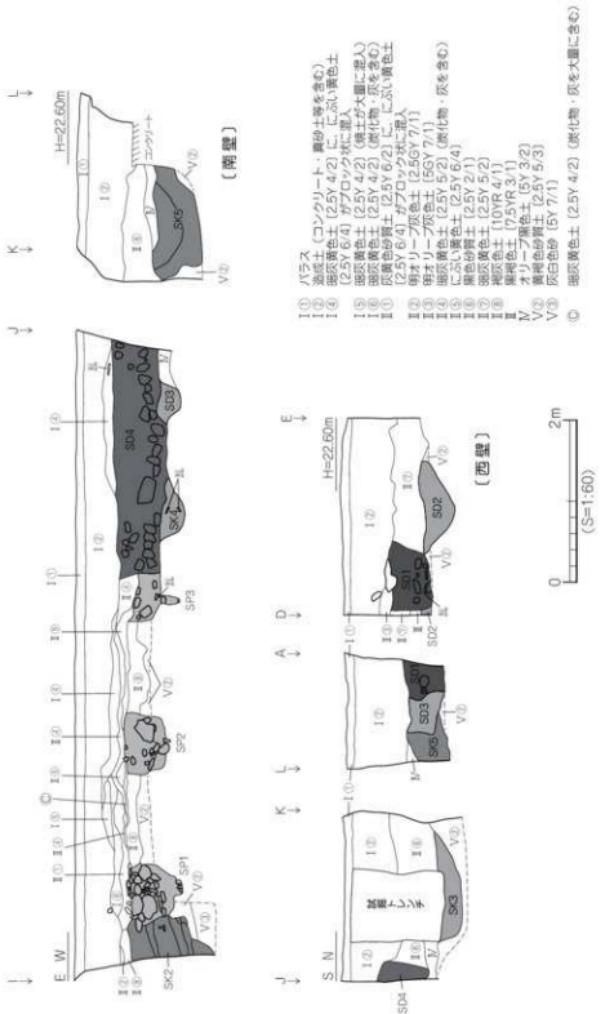
第V②層－黄褐色砂質土〔25Y 5/3〕で、調査区東側ほぼ全域、北西部の一部、北側中央部から北側中央部西寄り、北東部、南東部、南側中央部、南西部、西側の部分的にみられ、層厚2～42cmを測る。

第V③層－灰白色砂〔5Y 7/1〕で、調査区南東部隅でみられ、層厚20～30cmを測る。

検出した遺構や出土遺物より、第IV層は弥生時代、第III層は古墳時代までに堆積した土層と考えられる。なお、調査にあたり調査地内を4m四方のグリッドに分けた。グリッドは北から南へA・B・C、西から東へ1・2・3とし、A1・A2・・・C3区といったグリッド名を付けた。グリッドは、遺物の取り上げや遺構の位置表示に利用した。

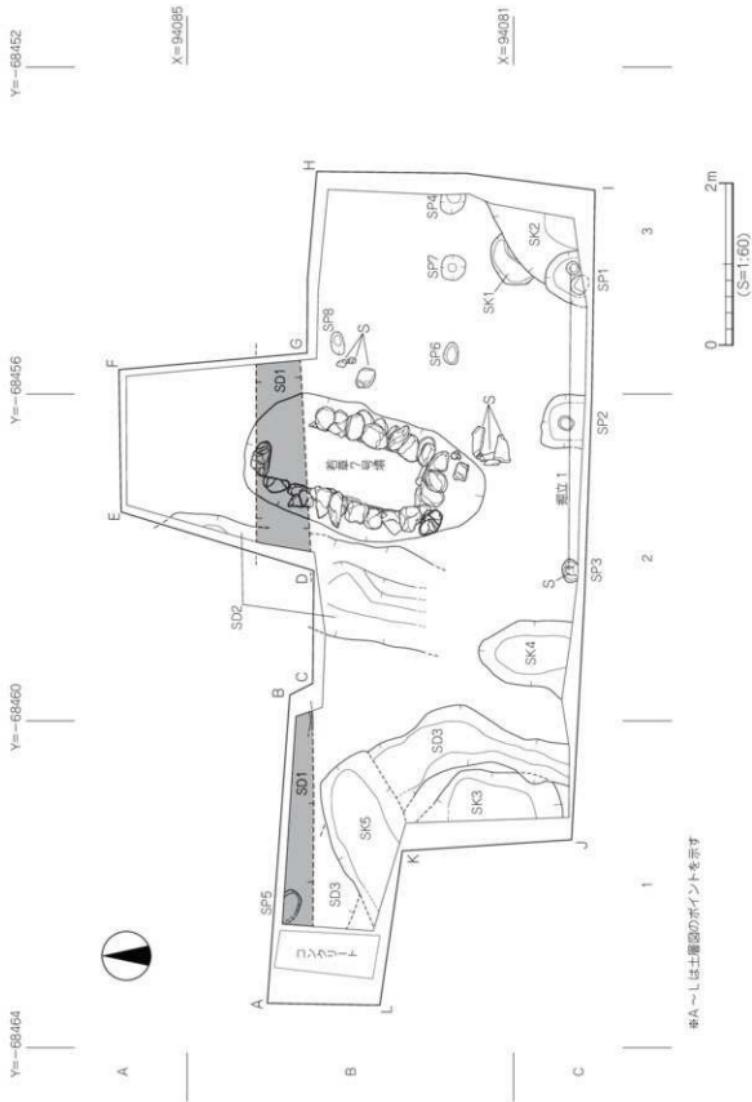


第3圖 北壁・東壁土層圖



第4圖 南壁・西壁土層圖

層位



第五図 遺構配置図

点A～Jは土層図のポイントを示す

### 第3節 遺構と遺物

調査で検出した遺構は、古墳1基、掘立柱建物1棟、溝4条、土坑5基、柱穴8基（掘立柱建物柱穴3基を含む）である。なお、若草町内では平成5年度に実施した若草町遺跡2次調査において6基の古墳（若草1号墳～6号墳）が検出されており、今回検出した古墳を『若草7号墳』と呼称した。遺物は弥生土器（前期～後期）、土師器（古墳時代～近世）、須恵器（古墳時代～中世）、陶磁器（中世～近世）、瓦（近世）、鉄製品、石製品が出土した。ここでは、遺構ごとに概要を説明する。

#### （1）古墳

##### 若草7号墳（第5～8図、図版22・23）

調査区中央部東側B2区に位置し、第Ⅲ層黒褐色土掘り下げ時に検出した。重機による表土掘削の際に石室の一部を検出したため調査を進めたが、その後、調査区を北側に拡張して石室全体を確認した。なお、本墳は後世の開発による削平が激しく、墳丘や周溝等の外郭施設は確認できなかった。

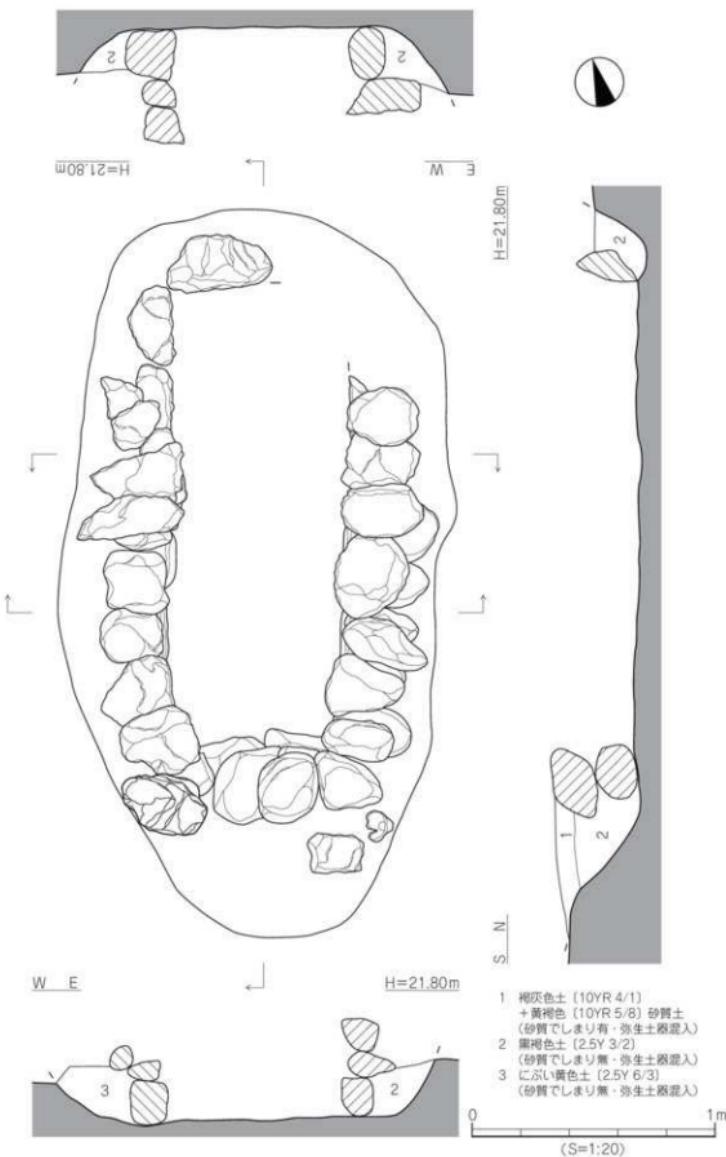
本墳の埋葬施設は、N-16°-Eに主軸方向をもつ竪穴系の横穴式石室で、南西方向に向けて開口するものと思われる。天井石や壁石はほとんどが失われ、基底石と1～3段の積石及び敷石を検出した。なお、石室北東部の基底石は江戸時代の溝SD1に削平されており、消失している。墓坑は第Ⅲ層黒褐色土より掘り込まれており、平面形態は楕円形をなし、規模は長径3.00m、短径1.55m、深さ10～35cmである。

石室は平面形態が長方形をなし、規模は奥壁幅0.73m、入口側幅0.71m、西側壁長1.89m、東側壁は現存長1.54m、最大幅0.58mである。基底石は奥壁側1石、入口側2石、西側壁は7石、東側壁は現存で5石を配し、幅23～43cm、高さ8～35cmの比較的大型の角礫・亜角礫を横口積みしている。その上に径16～36cm、高さ6～20cmの亜円礫を入口側に3石、両側壁に3石が積まれている。なお、検出状況より入口側にある3段目の石は閉塞石と思われる。床面には、褐灰色砂質土〔10YR 4/1〕と浅黄色砂質土〔2.5Y 7/4〕の混合土が厚さ6～9cm程度に貼り付けられ、その上面に径2.0～6.5cmの玉砂利（川原石）が全面に敷き詰められている。

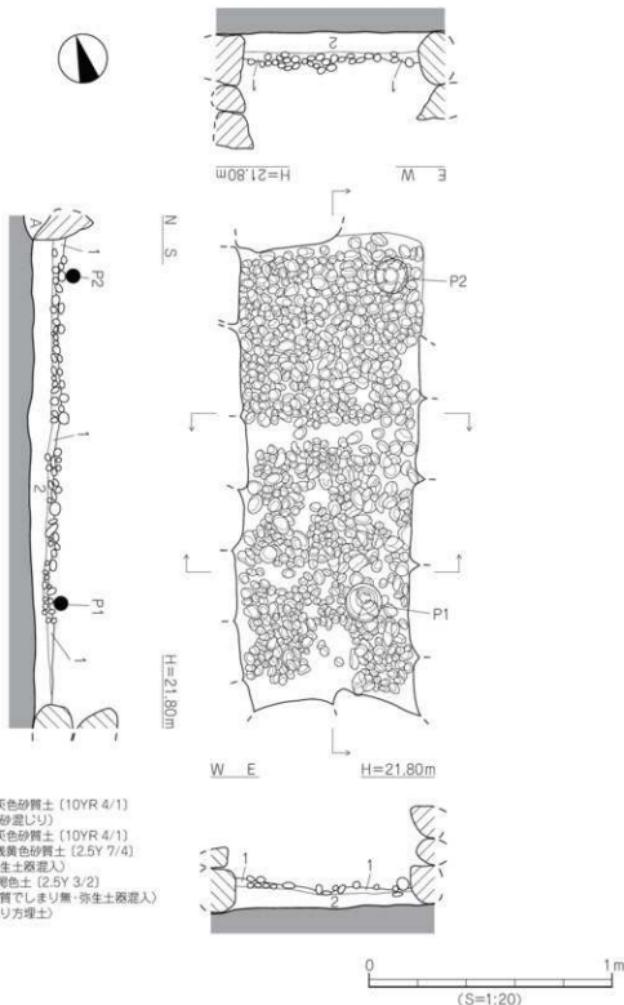
遺物は入口側の南東部に、須恵器壺蓋と坏身が重なり合った状態で出土したほか、奥壁側北東隅には須恵器短頭壺が正位で出土した。なお、壺蓋の口縁部と坏身の受部には打ち欠いたと思われる痕跡が数箇所に認められた。

##### 出土遺物（第9・10図、図版26）

1～6は石室内、7～17は墓壙内出土品。1・2はP1地点出土の須恵器。1は復元完形品の壺蓋で、口径15.4cm、器高は4.9cmである。天井部は丸味をもち、天井部と口縁部の境界は不明瞭な稜をもつ。口縁端部は尖り気味に仕上げ、色調は内外面共に灰黄色である。胎土中には径0.1～0.3mm大の黒色土粒が多く含まれている。2は坏身。受部を一部欠損するものの、ほぼ完形品で、たちあがり径13.3cm、器高は5.0cmである。たちあがりは内傾し、たちあがり端部は尖り気味に仕上げる。色調は灰黄色をなし、底部外面2/3の範囲に回転ヘラケズリ調整がみられ、底部内面中央部は静止ナデを施す。3は短頭壺の蓋。1/2の残存で、口縁部は外反し、口縁端部は尖る。4はP2地点出土の短頭壺。復元完形品で、口径8.0cm、器高は7.6cmである。口縁部は直立し、口縁端部は尖る。底部外面1/3の範囲に回転ヘラケズリ調整がみられる。



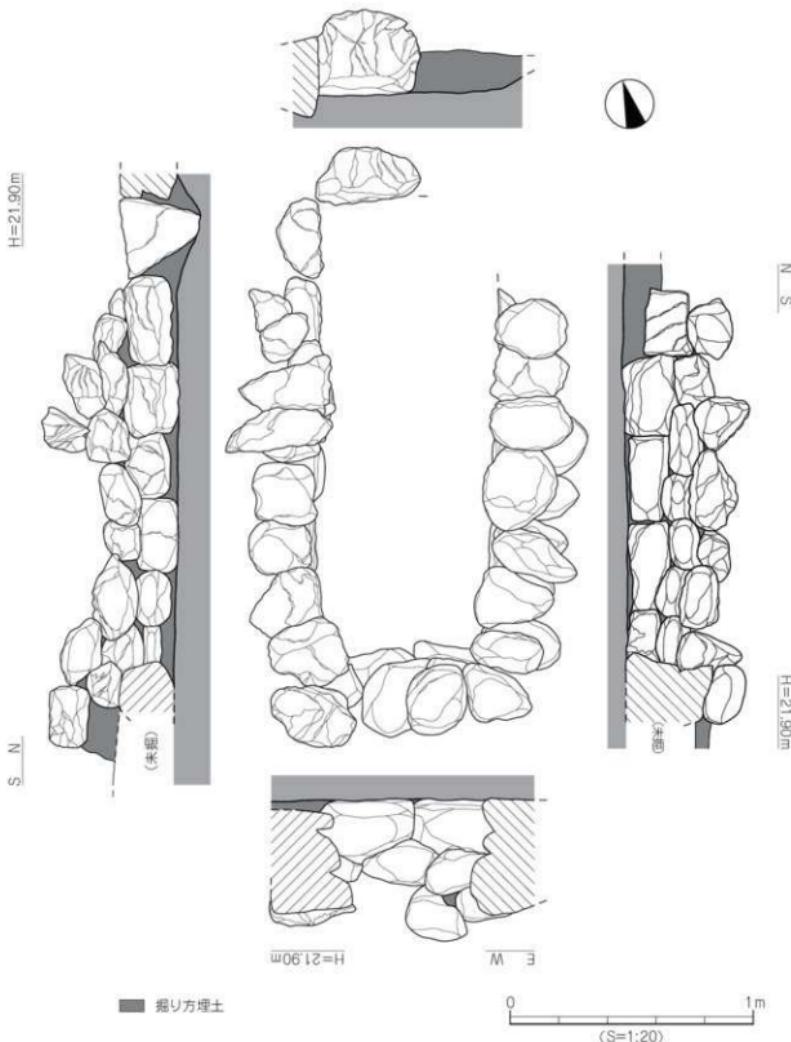
第6図 若草7号填石室測量図(1)



第7図 若草7号墳石室測量図(2)

W E

H=21.90m



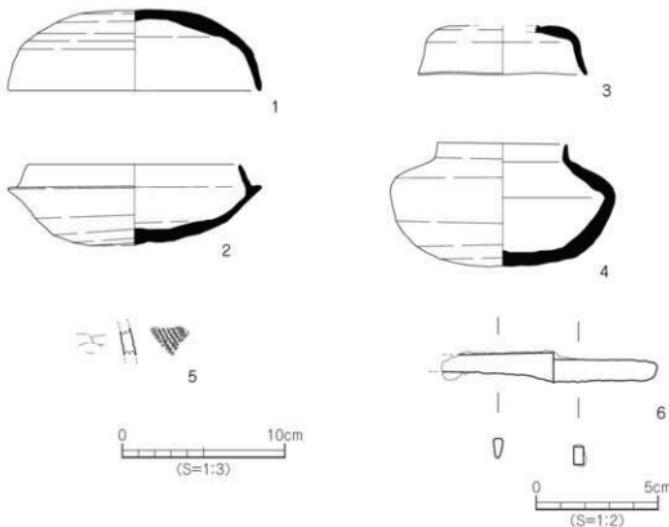
第8図 若草7号墳石室測量図(3)

5は朝鮮系の軟質土器。小片で、外面には径0.1cm大の格子目叩きがみられる。色調は、内外面共に橙色をなす。

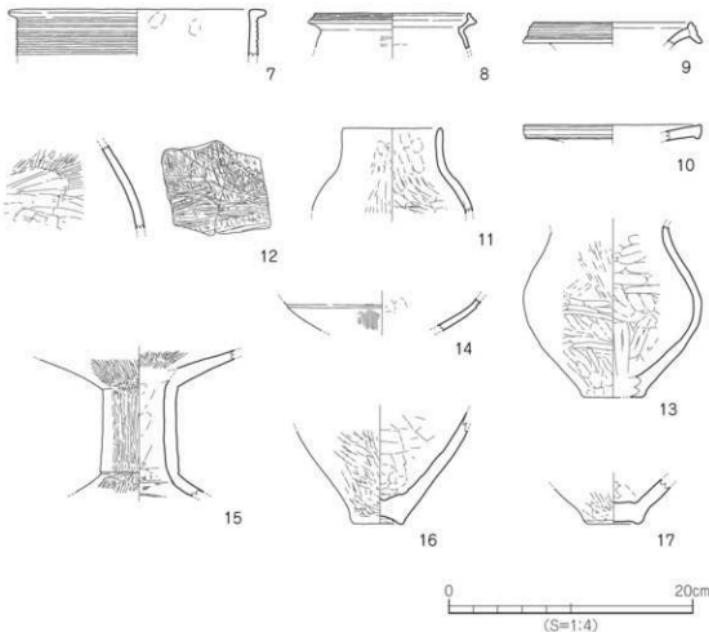
6は鉄製の刀子。刃部を一部欠損するが、残存長8.8cm、幅1.2cm、厚さ0.4cmである。刃部は研ぎなおしが施され、製造時よりすり減っているものと考えられる。

7～17は弥生土器。7は弥生時代前期末の壺形土器。小片で、口縁部は折り曲げにより成形される。胴部外面には、ヘラ描き沈線文7条を施す。8は弥生時代中期後半の壺形土器。小片で、口縁部を上方につまみ上げ、口縁端面に凹線文2条を施す。口縁部と胴部の境界内面には、明瞭な稜をもつ。9・10は弥生時代中期後半の壺形土器。広口壺の口縁部片で、9は口縁部を下方に拡張し、口縁端面に凹線文4条を施す。10は口縁端面に不明瞭な凹線文2条がみられる。11は弥生時代後期の細頸壺で、口縁端部は尖り気味に仕上げる。12は弥生時代後期の壺形土器。肩部片で、外面には赤色顔料が少量付着する。13は弥生時代前期末の壺形土器。平底で、胴部外面にはヨコないしナナメ方向のヘラミガキを施す。14・15は弥生時代後期後半の高坏形土器。14は坏部小片で、中位に明瞭な稜をもつ。15は脚部片で、坏脚部の接合は充填技法による。外面には、細かなヘラミガキ調整がみられる。16は弥生時代後期初頭の壺形土器。上げ底で、胴部外面には板状工具によるミガキとナデ、内面には板状工具によるナデを施す。17は弥生時代後期の壺形土器。上げ底で、内面には工具によるナデを施す。

時期：出土遺物の特徴より、7号墳の造営時期は古墳時代後期、6世紀中頃と考えられる。



第9図 若草7号墳石室内出土遺物実測図



第10図 若草7号墳墓壇内出土遺物実測図

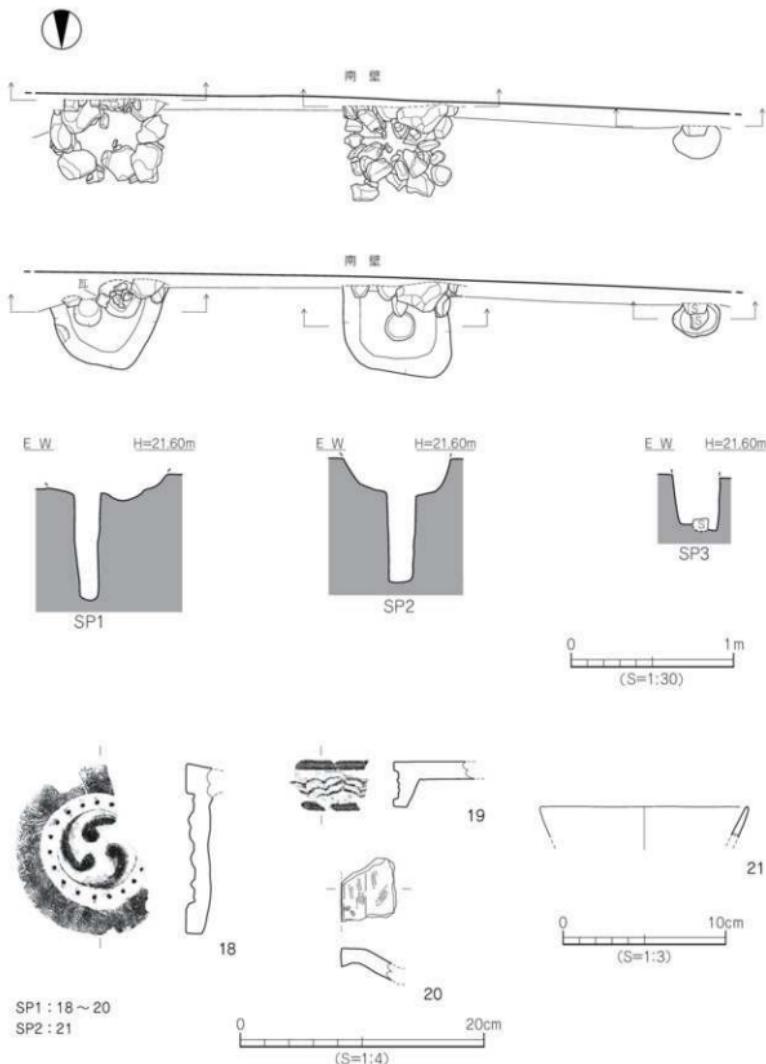
## (2) 挖立柱建物

## 掘立1 (第5・11図、図版25)

調査区南東部～南側中央部C2・3区に位置する建物で、建物を構成する柱穴3基を検出した。2間以上の建物址で土坑SK2より後出し、溝SD4に先行する。第II(8)層上面での検出であり、第II(4)層が覆う。建物規模は東西検出長3.80m、柱間1.90mである。各柱穴の平面形態は梢円形を呈するものと考えられ。規模は径0.20～0.65m、深さ10～28cmを測る。遺物はSP1・2より径5～15cm、厚さ3～8cm大の川原石と瓦が出土した。また、すべての柱穴で柱痕を検出した。規模は径17.0～25.0cm、深さ34～65cmを測る。なお、SP3底面には径10cm、厚さ3cm大の扁平石が据えられていた。

## 出土遺物 (図版26)

18～20はSP1出土品、21はSP2出土品。18は軒丸瓦で、瓦当は直径14.0cm、周縁幅2.6cm、厚さは1.3cmである。瓦当の文様は時計回りの三ツ巴で、珠文は15個みられるが、17個に復元できる。巴文は頭部が鉤状に屈曲し、尾は長く隣接する巴文に接する地点まで延びている。珠文の平面形態は円形で、直径0.3～0.5cmである。なお、珠文は指頭圧により押し潰され、低く扁平である。色調は外面が暗灰色、内面は灰色である。19は軒平瓦。小片で、瓦当幅は3.7cmである。瓦当には3条の波状隆起文が描か



第 11 図 挖立 1 測量図・出土遺物実測図

れている。色調は、内外面共に灰色である。20は板塀瓦。小片で、色調は暗灰色である。21は土師器の壊。口縁部の小片で、口縁端部は尖り気味に仕上げる。

時期：出土遺物の特徴より、掘立1は江戸時代後期、19世紀代の建物址と考えられる。

### (3) 溝

#### SD1 (第5・12図、図版24)

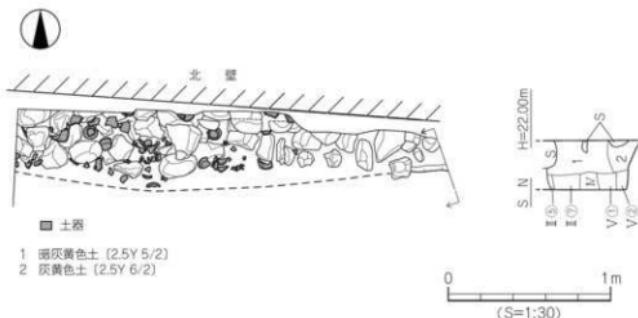
調査区北西部～北東部B1～3区で検出した溝で、溝の西側・北側・東側は調査区外へ続く。なお、SD1により、若草7号墳の石室北側部分は一部削平されている。また、調査壁の北壁土層観察により、北壁東部にて溝の一部が確認されたほか、溝上面は第II(3)層が覆う。規模は東西検出長6.94m、幅0.27～0.67m、深さ15～56cmを測る。断面形態は「U」字状を呈し、埋土は2層に分層される。1層は暗灰黄色土〔25Y 5/2〕、2層は灰黄色土〔25Y 6/2〕である。遺物は溝底面付近にて大量の割れた陶磁器片と、径5～15cm大の川原石が混在して出土した。

#### 出土遺物 (第13図、図版27・28)

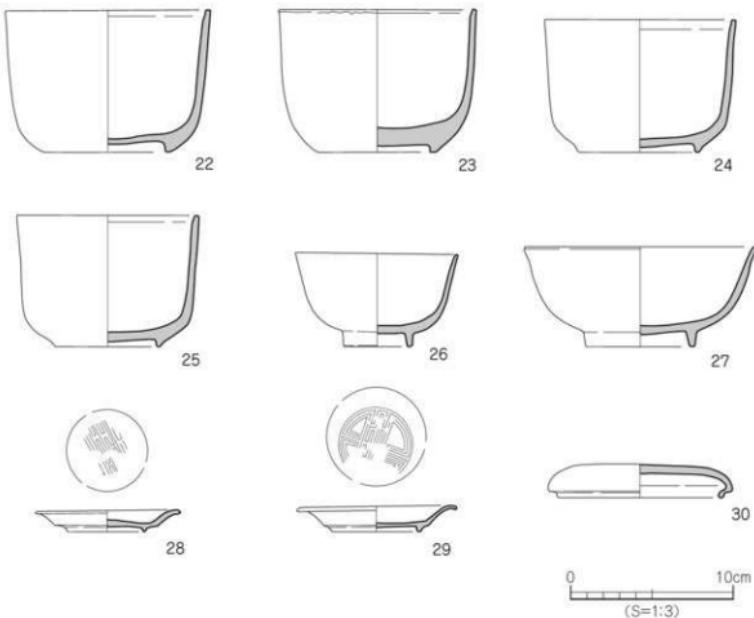
22～25は磁器の骨壺。体部は直線的に立ち上がり、口縁端部は面をもつ。22・23の高台は断面台形状をなし、24・25は三角形状である。口縁部内面には、赤橙色の囲線が巡る。胎土は灰白色で、薄青色の釉薬が掛けられているが、口縁端部及び高台疊付部分は無釉である。

26・27は磁器の碗。26の体部は直線的に立ち上がり、口縁端部は尖り気味に仕上げる。断面台形状の高台をもち、高台疊付部分は無釉である。胎土は灰白色で、薄青色の釉薬が掛けられている。27の体部は内湾し、口縁部は僅かに外反する。断面台形状の高台をもち、高台疊付け部分は無釉である。胎土は灰黄色で、透明釉が掛けられている。

28・29は磁器の皿。口縁部は大きく外反し、断面台形状の高台をもつ。底部内面にはスタンプ状の文様がみられる。胎土は白色で、透明釉が掛けられているが、高台疊付け部分は無釉である。30は磁器の蓋。骨壺の蓋と思われ、天井部は扁平で、口縁部は内方に屈曲し、かえりは下方へ垂下する。



第12図 SD1 測量図



第13図 SD1出土遺物実測図

胎土は白色で、薄青色の釉薬が掛けているが、かえり部分は無釉である。なお、本稿には未掲載であるが、発掘調査では骨壺8個体、碗は4個体、皿は9個体が出土している。

時期：出土遺物の特徴より江戸時代後期、19世紀代の溝と考えられる。

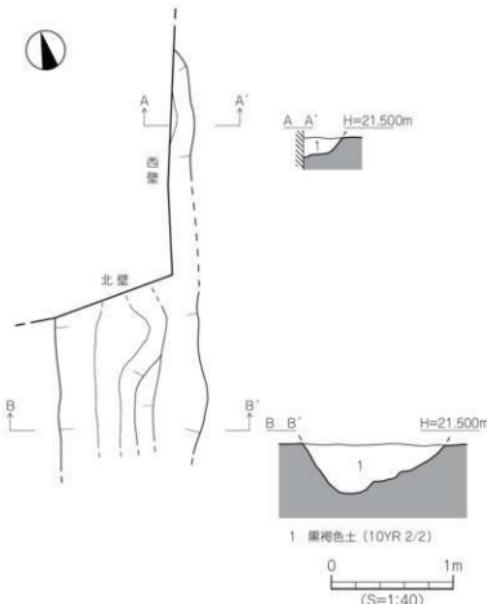
#### SD2（第5・14図、図版25）

調査区中央部～中央部北側A・B2区で検出した溝で、溝南側は消滅し、北側は調査区外へ続く。調査区北壁の土層観察より、溝上面は第IV層が覆う。規模は南北検出長3.44m、幅0.10～1.20m、深さ15～40cmを測る。断面形態は「U」字状を呈し、埋土は黒褐色土〔10YR 2/2〕単層である。遺物は少量の弥生土器片が出土した。

時期：検出層位や出土遺物の特徴より、弥生時代中期後半とする。

#### SD3（第5・15図、図版25）

調査区西部B1～C2区で検出した溝で、溝南側と西側は調査区外へ続き、土坑SK3・5より後出する。調査区南壁の土層観察により、SD3は第IV層上面から掘削されている遺構である。規模は東西検出長4.55m、幅0.50～1.05m、深さ20～45cmを測る。断面形態は「U」字状を呈し、埋土は黒色砂



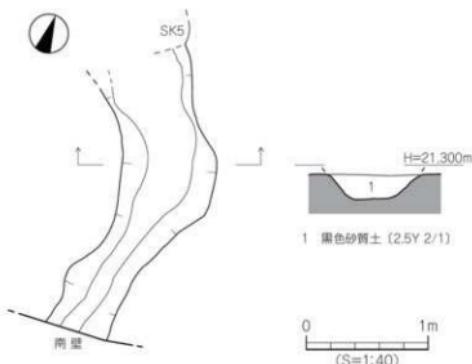
第14図 SD2 測量図

質土〔25Y 2/1〕単層である。溝内から、遺物は出土していない。

時期：遺物の出土はないが、第IV層上面から掘削されていることより、概ね弥生時代以降とする。

#### SD4（第4図）

調査区南部C1・2区の南壁にて検出した遺構で、埋土や検出状況がSD1と類似することから溝と判断した。SD4は掘立1より後出し、規模は検出長5.1m、深さは25～70cmである。断面形態は不明であり、埋土は灰黄色土〔25Y 6/2〕単層である。埋土中からは、



第15図 SD3 測量図

瓦の破片や径5~30cm大の川原石が散在して出土した。

時期：時期特定しうる遺物の出土はないが、概ね江戸時代の溝とする。

#### (4) 土坑

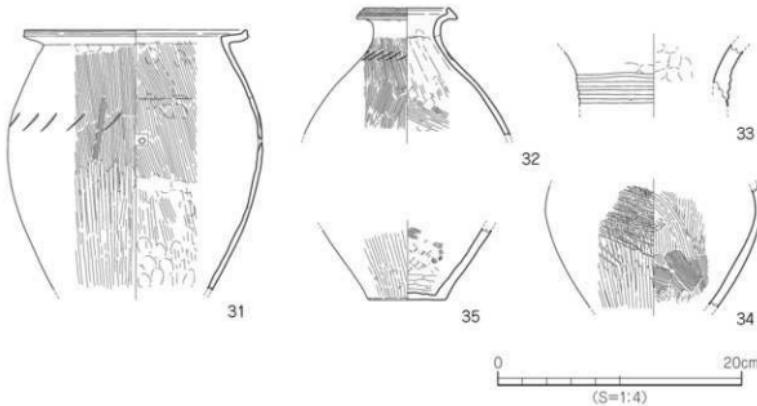
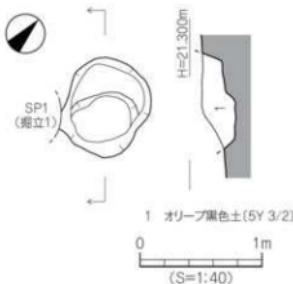
##### SK1 (第5・16図)

調査区南東部B・C3区で検出した土坑で、SK2に先行する。平面形態は楕円形をなし、規模は長径0.76m、短径0.55m、深さ33cmを測る。断面形態は「U」字状をなし、埋土は第IV層と酷似するオリーブ黒色土〔5Y 3/2〕単層である。遺物は、弥生土器片が数点出土した。

##### 出土遺物 (図版28)

31は弥生時代中期後半の壺形土器。口縁端部を上方につまみ上げ、口縁端面に凹線文1条を施す。胴部外面上位には「ノ」字状の列点文を施す。なお、胴部外面にはタテ方向のヘラミガキ調整、内面にはハケメ調整がみられる。32は弥生時代中期後半の壺形土器。広口壺で、口縁部を上方に拡張し、口縁端面に凹線文3条を施す。肩部外面にはハケ状工具による列点文を施す。33は弥生時代前末期の壺形土器。頸部片で、ヘラ書き沈線文4条以上を施す。34は壺形土器の胴部片で、外面にはタテ方向のヘラミガキ調整がみられる。35は壺形土器の底部。平底で、外面にはタテ方向のヘラミガキを施す。

時期：出土した壺形土器（31）の特徴などから、SK1は弥生時代中期後半の土坑と考えられる。



第16図 SK1測量図・出土遺物実測図

## SK2 (第5・17図、図版25)

調査区南東部B・C3区で検出した土坑で、SK1より後出し、掘立1に先行する。平面形態は円形を呈するものと考えられ、規模は南北長0.99m、東西検出長0.22~0.33m、深さ47cmを測る。断面形態は「U」字状をなし、埋土は3層に分層され、1層は黄褐色土〔2.5Y 5/3〕、2層は暗灰黄色土〔2.5Y 5/2〕、3層は黒色砂質土〔2.5Y 2/1〕である。遺物は、弥生土器の高环形土器、備前焼の擂鉢、土師器の土釜が出土した。

## 出土遺物 (図版28)

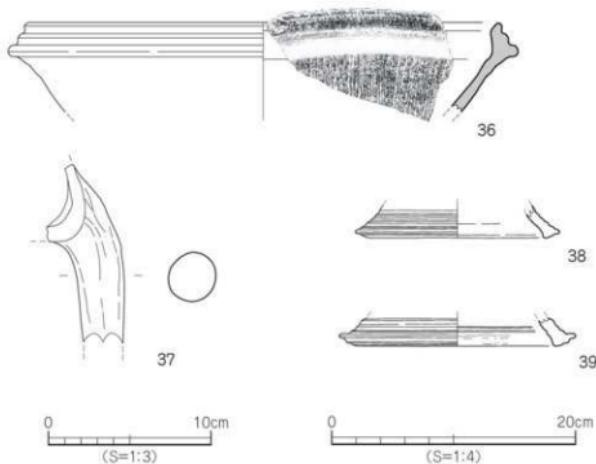
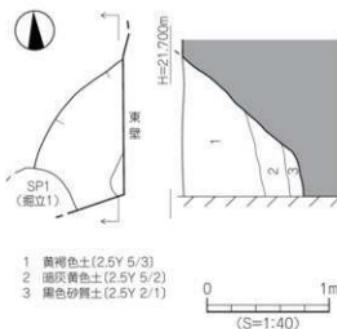
36は備前焼の擂鉢。口縁部外面には凹線文をもち、体部内面には8条1組の条線がみられる。37は土師器の土釜。脚部片で、色調は橙色をなす。

36・37は室町時代。38・39は弥生時代中期後半の高环形土器。脚部片で、脚裾部及び脚端面に凹線文を施す。

時期：出土した擂鉢の特徴より、SK3は室町時代、15世紀代の土坑と考えられる。

## SK3 (第5・18図、図版25)

調査区南西部B・C1区で検出した土坑で、土坑西側は調査区外へ続き、試掘トレンチに切られ、SD3に先行する。調査区西壁の土層観察により、土坑上面は第IV層が覆う。平面



第17図 SK2測量図・出土遺物実測図

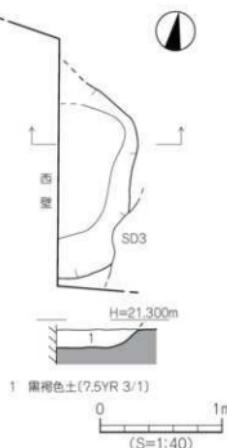
形態は橢円形を呈し、規模は南北検出長1.90m、東西検出長0.95m、深さ20cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は黒褐色土〔7.5YR 3/1〕単層である。土坑内から、遺物は出土していない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、第Ⅳ層が覆うことから、概ね弥生時代以前の遺構とする。

#### SK4（第5・19図）

調査区南西部B・C2区で検出した溝で、溝北側は消失し、南側は調査区外に続く。なお、溝上面はSD4が覆う。規模は検出長1.20m、幅0.45～1.05m、深さは10～25cmである。断面形態はレンズ状をなし、埋土は灰黄色土〔2.5Y 6/2〕単層である。遺物は、瓦の破片と径3～5cm大的の礫が数点出土した。

時期：時期特定しうる遺物はないが、検出状況や埋土より概ね江戸時代の溝とする。

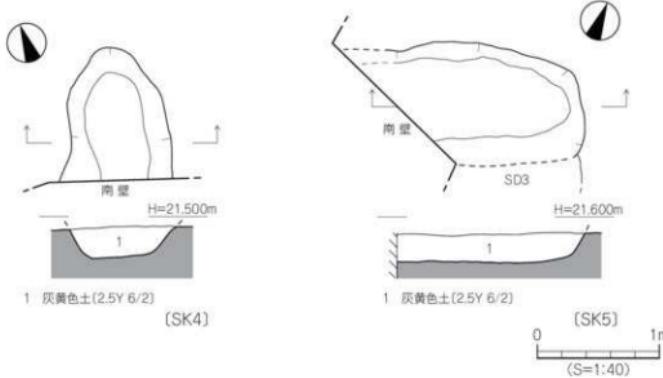


第18図 SK3測量図

#### SK5（第5・19図、図版25）

調査区北西部B1区で検出した土坑で、南側は調査区外へ続き、SD3に先行する。調査区西壁の土層観察により、土坑上面は第Ⅳ層が覆う。平面形態は長橢円形を呈し、規模は東西検出長1.20m、南北検出長0.90m、深さ50cmを測る。断面形態は「U」字状を呈し、埋土は灰黄色土〔2.5Y 6/2〕単層である。土坑内から、遺物は出土していない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、第Ⅳ層が覆うことから、概ね弥生時代以前の遺構とする。



第19図 SK4・SK5測量図

### (5) その他の遺構と遺物

調査では、8基の柱穴（掘立柱建物柱穴3基を含む）を検出した。このほか、包含層掘り下げ時や重機掘削時に遺物が出土した。

#### 1) 柱穴

調査で検出した8基の柱穴は、埋土で分類すると以下の3種類である。このうち、SP1～3は掘立1を構成する柱穴である。

暗灰黄色土 …… 3基 (SP1～3)

灰黄色土 …… 2基 (SP4・5)

黒褐色土 …… 3基 (SP6～8)

#### 2) 包含層・地点不明出土遺物

##### ① 第II⑧層出土遺物（第20図）

40・41は瓦器椀。40は口縁部の小片で、口縁端部は丸く仕上げる。色調は、内外面共に暗灰色である。41は底部片。高台は形骸化し、丸味のある低い断面三角形状をなす。色調は外面が灰色、内面は灰白色である。

##### ② 第III層出土遺物（第20図、図版28）

42は土師器の土管。小片で、色調は橙色である。43は瓦質土器の高坏。坏部の小片で、色調は外面が暗灰色、内面は灰色である。

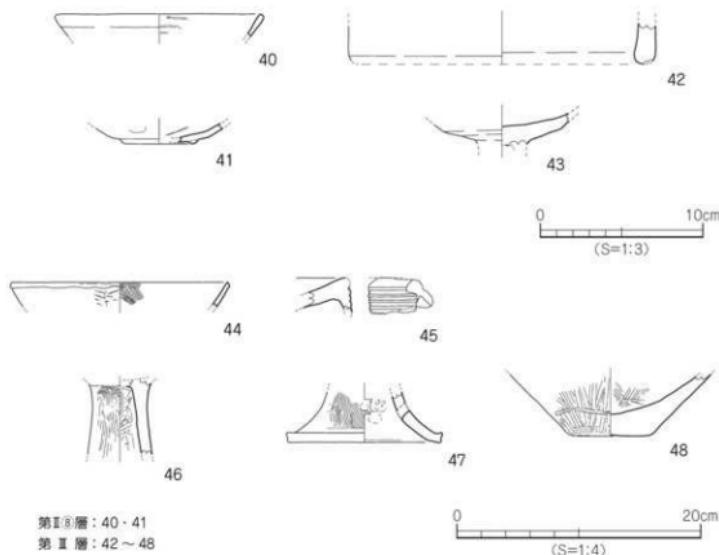
44は弥生時代終末期の壺形土器。口縁部の小片で、口縁端部は「コ」字状に仕上げる。外面には細かなタタキ調整がみられる。45は弥生時代中期後半の壺形土器。広口壺の小片で、口縁部は下方に垂下し、口縁端面には凹線文4条を施す。46・47は弥生時代後期後半の高坏形土器。46は中空で、坏脚部の接合は組み合わせ技法による。47は脚部片で、柱部下位に径0.7cmの大円孔を穿つ。48は弥生時代前期末の壺形土器。平底で、外面にヘラ状工具による線刻がある。

##### ③ 地点不明出土遺物（第21・22図、図版29）

49・50は土師器の焰烙。口縁部片で、50は梢円形状の孔（0.8×0.3cm）2ヶを穿つ。51・52は土師器の坏。51の体部は内湾気味に立ち上がり、底部外面には回転糸切り痕を残す。色調は、内外面共に黒褐色である。52は底部片で、底部外面には回転糸切り痕とスノコ痕が残る。53～55は擂鉢。53・54の口縁部には凹線2条がみられ、内面には10条1組の条線を施す。55は底部片で平底をなす。53～55の色調は、内外面共に赤橙色である。

56は陶器の皿。胎土は褐色をなし、内外面には鉄釉が掛けられている。57～59は磁器の碗。57の外面には楓文、58は連続する草文、59は松文が描かれている。60は磁器の小坏で、外面には松葉文を施す。61・62は陶器の碗。62は肥前系の碗で、蛸唐草文がみられ、高台疊付け部分と底部外面は無釉である。63は石製の硯で、約1/4の残存である。

64～67は瓦。64・65は軒丸瓦。64の瓦当は直径11.8cm、周縁幅2.2cm、厚さは1.7cmである。また、65の瓦当は直径14.7cm、周縁幅2.2cm、厚さは2.1cmである。瓦当の文様は時計回りの三ツ巴で、64の珠文は16個、65は4個みられる。珠文の平面形態は円形で、直径0.3～0.5cmである。珠文は指頭



第20図 包含層出土遺物実測図

圧により押し潰され、扁平である。巴文は、頭部が鉤状に屈曲している。色調は64が灰色、65は灰白色である。66は平瓦。約1/3の残存で、厚さは2.5cmである。色調は凸面が暗灰色、凹面は灰色である。67は丸瓦。小片で、厚さは2.3cmであり、色調は暗灰色をなす。

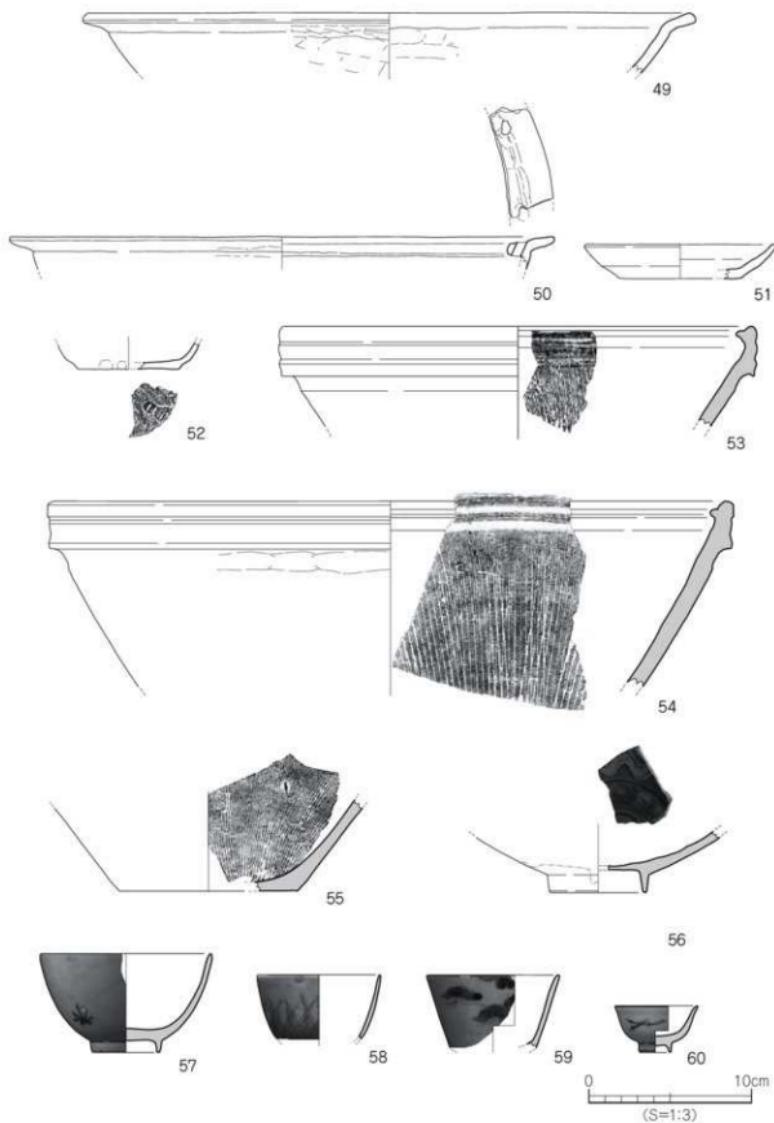
68～70は弥生土器。68は弥生時代中期後半の壺形土器。太頸壺で、口縁端面に凹線文1条を施す。69・70は弥生時代中期前半の壺形土器。頸部片で、69の外表面にはクシ書き沈線文6条以上を施す。71は寛永通寶である。直徑24.5cm、孔径0.55cm、重さは4.25gである。

#### 第4節 小 結

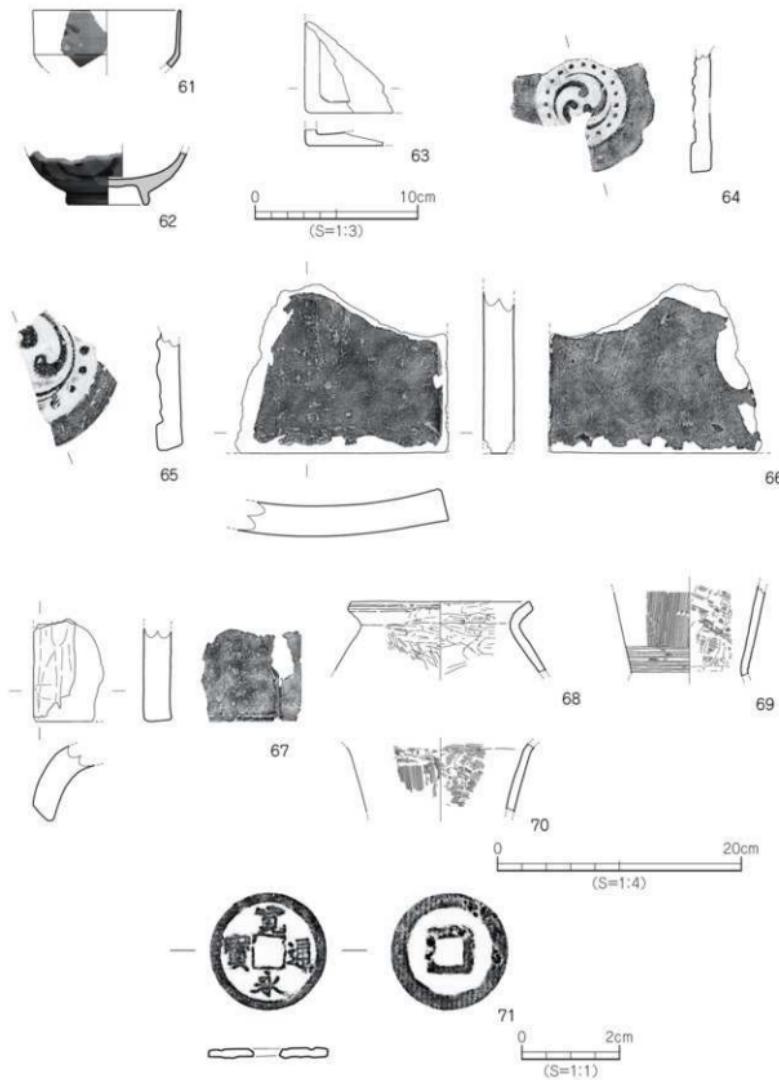
調査で検出した遺構は、古墳1基、掘立柱建物1棟、溝4条、土坑5基、柱穴8基（掘立柱建物柱穴3基を含む）である。遺物は弥生土器や土師器、須恵器、陶磁器、鉄製品、瓦、石製品が出土した。以下、時代ごとに説明する。

##### (1) 弥生時代

弥生時代では、溝2条と土坑3基を検出した。このうち、溝SD2と土坑SK1・2からは弥生時代中期後半に時期比定される甕や壺の破片が出土している。なお、その他の遺構からは遺物の出土がな



第 21 図 地点不明出土遺物実測図 (1)



第22図 地点不明出土遺物実測図(2)

いが、埋土や検出状況等より弥生時代の遺構と判断される。なお、石室掘り方理土中からは弥生時代前期末の土器片が数点出土したほか、表土掘削時の排土内からは、わずかであるが弥生時代後期の土器片が出土している。

周辺の調査では、若草町遺跡1次調査からは、弥生時代後期後半の複数の壺棺群を主体とする円形周溝墓1基をはじめとする周溝群と若草町遺跡3次調査からも同時期の周溝群を検出している。若草町遺跡1次調査からは、同時期の竪穴建物を検出し、カキツバタ遺跡からも同時期の壺棺が出土している。弥生時代後期後半の一時期にある程度の計画性をもって営まれた様相がうかがわれ、松山平野における当期の葬制の一端を示す貴重な資料といえる。また、若草町遺跡2次調査からは、弥生時代後期の遺構は竪穴建物9棟（SI-02・03・04・06・07・08・10・11・12）と土坑1基（SK-01）を検出し、弥生時代後期末では溝2条（SD-I・II）を検出し、弥生時代後期末～古墳時代初頭では溝1条（SD-III）を検出した。

### （2）古墳時代

古墳時代の遺構は、古墳1基を検出した。北東～南西方向に主軸方位をとる小型の横穴式石室を埋葬施設にもつ古墳であるが、遺存状態は良好でなく、積石は1～3段のみが残っていた。南西方向に開口部をもち、石室の規模は0.58～0.73m、全長1.89mである。石室床面には径20～6.5cm大の玉砂利が敷き詰められており、その上面にて須恵器壊蓋と短頭壺が出土した。出土品の特徴より古墳時代後期、6世紀中頃の古墳と考えられる。調査地周辺では若草町遺跡2次調査において、横穴式石室を主体部とする古墳時代後期の古墳6基が検出されている。これらのことから、古墳時代後期には若草町一帯が墓域として広く土地利用されていたことがわかる。

周辺の調査では、若草町遺跡1次調査からは古墳時代前期の竪穴建物、土坑、柱穴、溝を検出し、若草町遺跡2次調査からは古墳時代初頭の竪穴建物3棟（SI-14・15・16）と性格不明遺構1基（SX-01）を検出し、6世紀前半の遺構は性格不明遺構1基（SX-03）を検出し、6世紀後半の古墳3基（若草1号墳・2号墳・4号墳）と周溝1条（SD-03）を検出した（第23図）。

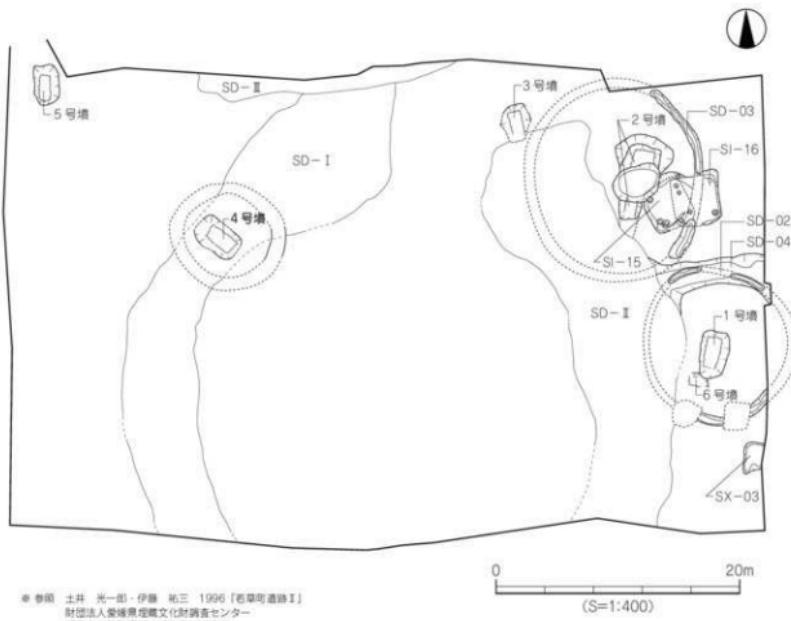
### （3）古代～中世

古代の遺構は未検出であるが、第Ⅲ層中より平安時代の土器片が数点出土した。中世では、土坑1基を検出した。SK2は部分的な検出であり、形態や規模は不明であるが、出土品より室町時代後期、15世紀代の遺構と考えられる。若草町遺跡Ⅱからは中世I期の溝1条（SD-05）を検出した。暗渠状遺構の可能性がある。

### （4）近世

遺構は、掘立柱建物1棟と溝2条、土坑1基を検出した。このうち、溝SD1からは大量の陶磁器片が出土した。SD1は真北に直行する東西方向の溝で、溝の規模は検出幅67cmである。なお、SD1と埋土や検出状況が似ていることから溝と判断したSD4も東西方向の遺構である。松山城下町宝曆図には、調査地内に「橋川五左衛門」と書かれた屋敷跡が記載されており、両溝は屋敷に関係する何らかの施設の可能性がある。

若草町遺跡Ⅱ報告書では、蒲生時代の藩政に関わる詳細な資料は乏しいが、先述の寛永十二年の古



● 参照 土井 光一郎・伊藤 祐三 1996「若草町遺跡Ⅱ」  
財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター  
埋蔵文化財調査報告書 第60集

第23図 若草町遺跡2次調査 古墳時代後期遺構配置図

地図に記載されていた岡山塗について調査を行った結果、岡山塗は蒲生御支配帳〔豫洲御支配帳〕にその名を見出すことができ、岡山塗充（一千二百石取り）であった。この文献史料によると、役職名等は記載されていないが、各石高は記載されており、蒲生忠知入封当時の随行家臣445人の内一千石以上の石高の者はわずか27人で、石高から藩政内で重責を担う人物であったと考えられる。

水野甚左衛門は、松平定行が遠江国掛川藩時代から家老職に就いていた人物で、慶長17年（1612）に家老に就任。慶安2年9月に就任。万治4年1月17日に没したことが記録として残っている。松平定行による承応元年（1652）頃までの初期の松山藩政は、軍事組織中心の藩政が行なわれており、家老職は実践部隊長としての位置付けがなされていたことが記録等で読み取れる。寛永十二年の古絵図においても、随所に遠見遮断の町割りを施したり、堀之内及びその周辺域の屋敷地には、大番頭・組頭・組衆・馬廻衆等の軍務担当者を配置されている状況が看取できる。

のことから、本調査区は江戸時代初頭における家老屋敷に該当し、検出された遺構や遺物はそれに伴うものと考えられる。

また、他にも文献で調べてみると、松山藩の藩主の転封や無嗣断絶等による人の移動が、江戸時代

前半期において3~4回史実として記録されており、人の移動に伴って屋敷地においても3~4回の改変が行なわれていたと考えられる。本調査区においても、屋敷の改変に伴う数回の整地層が観察され、それに伴う遺物も検出され、古絵図には表現されていない建物構造や、当時の生活の一端を知ることができた。

今回の調査では弥生時代や古墳時代、中近世の遺構や遺物が出土した。今後は若草町一帯における集落変遷の解明と古墳時代における墓の構造や範囲究明が急務となる。

最後になりましたが、このような調査成果を得ることができましたのも、四国旅客鉄道株式会社代表取締役社長 泉 雅文様ならびに職員の方々の埋蔵文化財に対するご理解とご協力のたまものであり、心より深く感謝申し上げます。

#### 【参考文献】

- |          |      |   |
|----------|------|---|
| 松山市史料集   | 1988 | 第13巻付図「松山城下町宝勝園」                              |
| 相原 浩二    | 1991 | 「若草町遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅲ』                        |
| 相原 浩二    | 1994 | 「若草町遺跡3次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報VI』                  |
| 土井 光一郎 他 | 1996 | 「若草町遺跡II」財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター 埋蔵文化財発掘調査報告書 第60集 |

#### 遺構一覧・遺物観察表 - 凡例 -

以下の表は、本調査地検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。

##### (1) 遺構一覧表

地 区 櫛 グリッド名を記載。

規 模 櫛 ( ) は現存値を示す。

埋 土 櫛 複数の土層がある場合には、「暗灰黄色土 他」と記載。

出土遺物櫛 遺物名称を略記した。

例) 弥生→弥生土器、土師→土師器、須恵→須恵器

##### (2) 遺物観察表

法 量 櫛 ( ) : 復元推定値

調 整 櫛 土器の各部位名称を略記した。

例) 天→天井部、口→口縁部、口端→口縁端部、た→たちあがり、坏→坏部、

頭→頸部、体→体部、胴→胴部、胴上→胴部上半部、胴下→胴部下半部

脚→脚部、底→底部

胎 土 櫛 胎土櫛は混和剤を略記した。

例) 石→石英、長→長石、金→金ウンモ、赤→赤色酸化土粒、黒→黒色酸化土粒

( ) の中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例) 石・長(1~2) → 「1~2mm大の石英・長石を含む」である。

焼 成 櫛 焼成櫛の略記について

◎→良好、○→良

表2 墓壙一覧

墓壙	地区	方向	断面形	規模(m) 長さ×幅×深さ	埋土	出土遺物	時期	備考
7号墳	B2	南北	台形	300×155×0.10～0.35	黒褐色土	弥生・須恵 川原石	古墳時代後期	横穴式石室

表3 据立柱建物一覧

据立	地区	方位	規模(間)	東西棟出長(m)	柱穴埋土	出土遺物	時期	備考
1	C2・3	東西	2×-	3.80	暗灰黄色土	土師・瓦・川原石	江戸時代後期	SK2を切る

表4 溝一覧

溝(S.D.)	地区	方向	断面形	規 模 長さ×幅×深さ (m)	埋 土	出土遺物	時 期
1	B1～3	東西	U字状	(6.94) × 0.27 ~ 0.67 × 0.15 ~ 0.56	暗灰黄色土 傷	陶磁器・川原石	江戸時代後期
2	A・B2	南北	U字状	(3.44) × 0.10 ~ 1.20 × 0.15 ~ 0.40	黒褐色土	弥生	弥生時代中期後半
3	B1～C2	北西～南	U字状	(4.55) × 0.50 ~ 1.05 × 0.20 ~ 0.45	黒色砂質土	—	弥生時代以降
4	C1・2	東西	—	(5.10) × — × 0.25 ~ 0.70	灰黄色土	瓦・川原石	江戸時代

表5 土坑一覧

土坑(S.K.)	地区	平面形	断面形	規 模 長径×短径×深さ (m)	埋 土	出土遺物	時 期
1	B・C3	楕円形	U字状	0.76 × 0.55 × 0.33	オリーブ黒色土	弥生	弥生時代中期後半
2	B・C3	(円形)	U字状	0.99 × (0.22 ~ 0.33) × 0.47	黄褐色土 傷	弥生・土師 陶磁器	室町時代後期
3	B・C1	(楕円形)	逆台形状	(1.90) × (0.95) × 0.20	黒褐色土	—	弥生時代以前
4	B・C2	(楕円形)	レンズ状	(1.20) × 0.45 ~ 1.05 × 0.10 ~ 0.25	灰黄色土	瓦・繩	江戸時代
5	B1	(長楕円形)	U字状	(1.20) × (0.90) × 0.50	灰黄色土	—	弥生時代以前

表6 柱穴一覧

柱穴(S.P.)	地区	平面形	規 模 長さ×幅×深さ (m)	埋 土	出土遺物	備考
1	C3	楕円形	0.63 × (0.40) × 0.10	暗灰黄色土	瓦・川原石	掘立1
2	C2	楕円形	0.65 × (0.50) × 0.28	暗灰黄色土	瓦・川原石	掘立1
3	C2	(楕円形)	0.30 × (0.20) × (0.07)	暗灰黄色土	扁平石	掘立1
4	B3	楕円形	(0.30) × 0.12 × 0.20	灰黄色土	—	
5	B1	楕円形	(0.30) × 0.20 × 0.15	灰黄色土	石	SD1 床面検出
6	B3	楕円形	0.27 × 0.16 × 0.20	黒褐色土	—	
7	B3	円形	0.30 × 0.30 × 0.11	黒褐色土	—	
8	B3	楕円形	0.27 × 0.16 × 0.13	黒褐色土	—	

遺物観察表

表7 若草7号墳石室内出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面)(内面)	胎土焼成	備考	図版
				外面	内面				
1	壺蓋	口径 15.4 器高 4.9	復元完形品。天井部と口縁部の境界には不明瞭な棱をもつ。口縁端部は尖り気味に丸い。	⑥側面へラケズリ ⑦回転ナデ	⑧ナデ ⑨回転ナデ	灰黄色 灰黄色	密金・黒 ○		26
2	壺身	口径 13.3 器高 5.0	完形品(受部を一部欠損)。たちあがり端部は尖り気味に仕上げる。	⑩回転ナデ ⑪側面へラケズリ ⑫回転ナデ	⑬回転ナデ ⑭ナデ	暗灰黄色 灰黄色	密金・黒 ○		26
3	蓋	口径 (10.3) 残高 3.0	粗面質の蓋。扁平な天井部。口縁部は外反し、口縁端部は尖り気味に仕上げる。1/2の残存。	⑮側面へラケズリ →ナデ ⑯回転ナデ	⑰回転ナデ	灰色 灰色	密 ○		
4	壺	口径 (8.0) 器高 7.6	粗面質。口縁部は直立気味に立ち上がり、端部は尖り気味に仕上げる。肩部の張りは強い。	⑲側面へラケズリ →ナデ ⑳回転ナデ	㉑回転ナデ	灰色 灰色	密金・黒 ○		26
5	甕	残高 1.7	執貢土器。外面上に小さな格子目叩きがみられる。小片。	叩き	ナデ	橙色 橙色	密 ○		26

表8 若草7号墳石室内出土遺物観察表 金属製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
6	刀子	刃部を欠損	鉄	(8.80)	1.20	0.40	9.89		26

表9 若草7号墳墓壇内出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面)(内面)	胎土焼成	備考	図版
				外面	内面				
7	甕	口径 (20.8) 残高 3.8	折曲口縁。肩部にヘラ押き沈線文7条を施す。小片。	㉒ミガキ ナデ	㉓指頭痕→ナデ (ミガキ)	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	石(1) ○		26
8	甕	口径 (12.6) 残高 2.9	折曲口縁。口縁端部を上方につまみ上げ、端面に凹穂文2条を施す。小片。	㉔ヨコナデ ㉕ハケ(10本/cm) →ヨコナデ	㉖ヨコナデ	灰茶色 灰茶色	石(1) ○		26
9	壺	口径 (13.0) 残高 1.9	広口壺。口縁部は上下方に拡張され、端面に四線文4条を施す。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	橙色 灰褐色	密 ○		26
10	壺	口径 (12.8) 残高 1.3	広口壺。口縁端面に四線文2条を施す。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	暗褐色 褐色	長(1~2) ○		
11	壺	口径 (8.0) 残高 7.0	細口壺。口縁部は直立し。口縁端部は尖り気味に仕上げる。小片。	マメツ (ハケ+ナデ)	㉗ナデ・ナデアゲ ㉘シボリ痕	黄茶色 黄茶褐色	石・長(1~2) ○	黒斑	
12	壺	残高 6.9	肩部片。赤色顔料付着。	ミガキ	板ナデ→ナデ	淡茶色 淡茶色	石・長(1) ○		
13	壺	底径 (4.8) 残高 14.0	底盤。	ミガキ・ナデ	㉙ナデ ㉚ケズリ	明茶色 明茶色	石・長(1~5) ○		26
14	高壺	残高 2.6	壺部小片。壺部中位に段をもつ。	ハケ(10本/cm)	マメツ (ヨコナデ)	茶色 灰茶色	石・長(1) 金 ○		
15	高壺	残高 11.8	円柱状の柱部。壺脚部の接合は充填技法による。	ミガキ	㉛ミガキ→ナデ ㉜マメツ	灰茶褐色 明茶褐色	石・長(1~3) ○		
16	甕	底径 (3.8) 残高 9.0	上げ底。	㉝ミガキ→ナデ ㉞マメツ	㉟ナデ・指頭痕	暗茶褐色 茶褐色	石・長(1~4) ○		
17	壺	底径 3.9 残高 3.6	上げ底。	ナデ	ナデ	褐色 灰黃褐色	石・長(1) ○	黒斑	

表 10 掘立 1 出土遺物觀察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外側) (内面)	胎土 焼成	備考	図版	
				外面	内面					
18	軒丸瓦	瓦当径 支承印 周縁部 瓦高	14.0 9.2 2.6 1.3	珠文(15ヶ)は低く扁平で、文巴は頭部が胸状に屈曲。瓦当3/4の残存。	ナデ	ナデ	暗灰色 灰色	織物紋(黄褐色) ○	SP1	26
19	軒平瓦	瓦当径 支承印 周縁部 瓦高	3.7 2.1 6.7	瓦当に波状深起文3条あり。	ナデ	ナデ	灰色 灰色	織物紋(灰白色) ○	SP1	26
20	板解瓦	残存長 残存幅 厚さ	5.3 4.5 1.3	小片。	ミガキ	ナデ	暗灰色 暗灰色	石(1) ○	SP1	26
21	坏	口径 (12.6) 残高 (9.9)	口縁部小片。	ヨコナデ	マメツ (ヨコナデ)	淡褐色 淡褐色	密 ○	SP2		

表 11 SD1 出土遺物觀察表 土製品

番号	基種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外側) (内面)	胎 土 焼 成	備 考	因版
				外 面	内 面				
22	骨壺	12.5 底径 器高	磁器。復元完形成。口縁端部は面をもつ。口縁部内面に赤褐色の彩色あり。丸足のある斬鉗面形状の高台をもつ。	施釉 (ナデ)	施釉 (ナデ)	明青灰色 明青灰色	密 (灰白色) ○		27
23	骨壺	12.1 底径 器高	磁器。復元完形成。口縁端部は面をもつ。口縁部内面に赤褐色の彩色あり。斬鉗面形状の高台をもつ。	施釉 (回転ナデ) ※施釉 (ナデ)	施釉 (ナデ)	明青灰色 明青灰色	密 (灰白色) ○		
24	骨壺	11.8 底径 器高	磁器。復元完形成。口縁端部は面をもつ。口縁部内面に赤褐色の彩色あり。斬鉗三角形状の高台をもつ。	施釉 (回転ナデ)	回転ナデ	明青灰色 明青灰色	密 (灰白色) ○		27
25	骨壺	11.2 底径 器高	磁器。復元完形成。口縁端部は面をもつ。口縁部内面に赤褐色の彩色あり。斬鉗三角形状の高台をもつ。	施釉 (回転ナデ)	回転ナデ	明青灰色 明青灰色	密 (灰白色) ○		
26	瓶	10.0 底径 器高	磁器。復元完形成。高台置付は無釉。	施釉 (回転ナデ)	施釉 (回転ナデ)	灰白色 灰白色	密 (灰白色) ○		27
27	瓶	(12.2) (6.6) 底径 器高	磁器。口縁部は外反し、斬鉗面形状の高台をもつ。1/2の残存。	施釉 (回転ナデ) ※施釉 (ナデ)	施釉 (ナデ)	灰白色 灰白色	密 (灰黄色) ○		27
28	皿	9.0 底径 器高	磁器。復元完形成。口縁部は外反し、底部内面にスタンプ文あり。	施釉 (回転ナデ)	施釉 (ナデ)	明青灰色 明青灰色	密 (白色) ○		27
29	皿	9.8 底径 器高	磁器。復元完形成。口縁部は外反し、底部内面にスタンプ文あり。	施釉 (回転ナデ) ※施釉 (回転ナラケズリ)	施釉 (回転ナデ)	白色 白色	密 (白色) ○		27
30	蓋	(10.0) 器高	磁器。扁平な天井部。口縁部は内方に傾曲し、かえりは下さる。	※施釉 (回転ナラケズリ) ※施釉 (回転ナラケズリ)	施釉 (回転ナデ)	淡灰白色 淡灰白色	密 (白色) ○		28

表 12 SK1 出土遺物觀察表—土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外側) (内面)	胎 土 焼 成	備 考	図版
				外 面	内 面				
31	壺	口径 残高 21.0 21.3	折曲口縁。口縁部は上方につまみ上げ。腹面に凹線文1条を施す。胴部上面外側に同点文あり。	ヨコナデ (ヨ)ハケ(7-8本/cm) ミガキ	ヨコナデ (ヨ)ハケ(7-8本/cm) ミガキ	明赤褐色 黒褐色	長(1) 金○	保存着	28
32	壺	口径 残高 10.8 10.4	広口縁。口縁部は上方に抵抗し、腹面に凹線文3条を施す。腹部下位に同点文あり。	ナデ (ナ)ナデ ハケ (8-9 本/cm)	ナデ 工具ナデ ハケ(6本/cm)	褐色 にぶい黄褐色	石・長(1) 金○		28
33	壺	残高 5.1	頸部片。へラ彫き沈線文4条以上あり。小片。	ヨコナデ	ナデ	淡茶色 暗茶色	石(1~5) ○		
34	壺	残高 10.0	頸部片。胴部中位に張りをもつ。	ヘラミガキ	ハケ(4本/cm) →ハケ(7-8 本/cm)	暗茶褐色 茶褐色	長(1) 金○	黒底	
35	壺	底径 (6.1) 残高 5.9	平底。	ヘラミガキ	ハケ・工具ナデ ナデ	黒茶色 茶褐色	石・長(1) 金○	黒底	

遺物観察表

表 13 SK2 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎 土 焼 成	備 考	図版
				外 面	内 面				
36	縁鉢	口径 (29.0) 残高 5.5	口縁端面に凹線 2 条あり。体部内面に柔線 (8 条 / 組) あり。微曲焼。	回転ナデ	回転ナデ	にぶい赤褐色 灰褐色	微砂粒 ○		28
37	土釜	残高 11.0	土師器。断面円形。	ナデ	ナデ	橙色 橙色	石・長 (1 ~ 3) 金 ○	黒斑	28
38	高坏	底径 (14.6) 残高 2.6	脚部。脚部部に四綫文 5 条、脚端面に四綫文 1 条あり。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	淡茶色 淡茶色	石・長 (1 ~ 2) ○		28
39	高坏	底径 (15.9) 残高 2.3	脚部。脚部部に四綫文 3 条、脚端面に四綫文 2 条あり。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	淡茶褐色 茶褐色	石・長 (1 ~ 2) ○		28

表 14 包含層出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎 土 焼 成	備 考	図版
				外 面	内 面				
40	椀	口径 (12.4) 残高 1.4	瓦器椀。口縁部小片。	ヨコナデ	ヨコナデ ミガキ	暗灰色 暗灰色	密 ○	Ⅱ・8層	
41	椀	底径 (4.5) 残高 1.2	瓦器椀。高台は形鉄化し、丸味のある断面三角形をなす。小片。	ヨコナデ	ヘラミガキ →ナデ	灰色 灰白色	密 ○	Ⅱ・8層	
42	土管	直径 (17.4) 残存長 2.3	土師器。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ ナデ	橙色 橙色	石 (1 ~ 4) 金 ○	Ⅲ層	
43	高坏	残高 1.9	瓦質土器。环部片。	回転ヘラケズリ 回転ナデ	マメツ	暗灰色 灰色	密 ○	Ⅲ層	
44	甕	口径 (17.7) 残高 2.0	弥生土器。口縁部小片。	①②ヨコナデ タタキ→ナデ	ハケ (8 本 / cm)	橙茶色 橙茶色	密 赤 ○	Ⅲ層	
45	甕	残高 2.8	弥生土器の広口甕。口縁部は下外方に垂下し、端面に四綫文 4 条を施す。小片。	ヨコナデ ナデ	指頭痕→ナデ	明茶色 明茶色	石 (1 ~ 3) ○	Ⅲ層	
46	高坏	残高 6.3	脚部片。中空。	ハケ→ナデ	板ナデ・ナデ	明茶色 明茶色	石・長 (1 ~ 4) ○	Ⅲ層	
47	高坏	底径 (12.4) 残高 4.1	脚部片。柱部下位に径 0.7cm 大の円孔を有する。小片。	ハケ (4 ~ 5 本 / cm) ヨコナデ	板ナデ ヨコナデ	明茶色 明茶色	石・長 (1 ~ 3) ○	Ⅲ層	
48	甕	底径 (6.2) 残高 5.1	平底。外面にヘラ状工具による継割りあり。1/2 の残存。	ハケ (4 本 / cm) →ミガキ	ハケ (5 本 / cm) →ナデ	褐色 黑褐色	石・長 (1 ~ 2) ○	Ⅲ層	28

表 15 地点不明出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎 土 焼 成	備 考	図版
				外 面	内 面				
49	培塿	口径 (37.0) 残高 37	口縁部片。口縁端部は丸く仕上げる。	①②ヨコナデ ナデ・指頭痕	ヨコナデ 指頭痕	褐灰色 灰黄色	石・長 (1) 金 ○		
50	培塿	口径 (33.4) 残高 20	口縁部に横円形の孔 (0.8 × 0.3cm) 2ヶあり。小片。	①②ヨコナデ 指頭痕→ナデ・ ヨコナデ	ヨコナデ	黑褐色 黑褐色	密 ○	煤付焼	29
51	坏	口径 (11.3) 底径 (7.5) 器高 21	土師器。体部は内清気味に立ち上がり、口縁部は丸く仕上げる。1/5 の残存。	ヨコナデ 回転糸切り	ヨコナデ	黑褐色 黑褐色	密 ○		
52	坏	底径 (6.2) 残高 1.6	土師器。体部は内清し、底部は円盤高台状をなす。1/4 の残存。	ヨコナデ・ナデ 回転糸切り・ スノコ痕	ヨコナデ	乳茶褐色 乳茶褐色	密 ○		
53	縁鉢	口径 (28.8) 残高 6.2	口縁部に凹線 2 条、口縁端部内面に凹線 1 条あり。体部内面に柔線 (10 条 / 組) あり。小片。	①回転ナデ ②回転ヘラケズリ	回転ナデ	赤橙色 赤橙色	密 ○		29

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調(外面)	胎 土 燒 成	備 考	図版
				外 面	内 面				
54	擂鉢	口径 (41.2) 残高 11.4	口縁部に凹縞2条、口縁端部内面に凹縞1条あり。体部内面に条線あり。 1/5の残存。	口縁部ナデ 凹縞ヘラケズリ	回転ナデ	赤橙色 赤橙色	石・長(1) ○		29
55	擂鉢	底径 (11.0) 残高 5.8	底部片。内面に条縞(10本/組)あり。 1/4の残存。	勝回転ナデ 凹ナデ	回転ナデ	赤橙色 赤橙色	石・長(1~4) ○		
56	皿	底径 (5.8) 残高 3.8	陶器。内外面に鉄釉が掛けている。 1/4の残存。	施釉・回転ナデ 凹回転ヘラケズリ	施釉・回転ナデ	褐色 乳褐色	密(褐色) ○	黒斑	29
57	碗	口径 (10.4) 底径 4.2 器高 6.1	磁器。1/4の残存。	施釉	施釉	白色 白色	密(白色) ○		29
58	碗	口径 (7.5) 残高 4.0	磁器。	施釉	施釉	白色 白色	密(白色) ○		29
59	碗	口径 (8.0) 残高 4.5	磁器。	施釉	施釉	灰白色 灰白色	密(灰白色) ○		29
60	小環	口径 5.1 底径 1.8 器高 2.8	磁器。	施釉	施釉	白色 白色	密(白色) ○		29
61	碗	口径 (9.0) 残高 3.5	陶器。筒形碗。	施釉	施釉	灰白色 灰白色	密(灰色) ○		29
62	碗	底径 5.0 残高 3.3	陶器。肥前系。	施釉	施釉	灰色 灰色	密(灰色) ○		29
64	軒丸瓦	瓦当径 (11.8) 文庫径 7.0 周縫幅 2.2 瓦厚 1.7	珠文(16ヶ)は扁平で、巴文は頭部 が筒状に屈曲する。	ナデ	ナデ	灰色 灰色	密 ○		29
65	軒丸瓦	瓦当径 (14.7) 文庫径 (12.3) 周縫幅 2.2 瓦厚 2.1	珠文(4ヶ)は低く扁平で、巴文は 頭部が筒状に屈曲する。1/4の残存。	ナデ	ナデ	灰白色 灰白色	密 ○		29
66	平瓦	残存長 13.7 残存幅 17.4 厚さ 2.5	1/3の残存。	ナデ	ナデ	灰色 暗灰色	密 ○		
67	丸瓦	残長 8.4 厚さ 2.3	小片。	ナデ	ナデ	暗灰色 暗灰色	密 ○		
68	壺	口径 (14.6) 残高 5.9	太頭壺。口縁端面に凹縞文1条あり。 小片。	ヨコナデ 斜板ナデ・ナデ	ヨコナデ 斜板ナデ・ナデ	褐色 褐色	石・長(1~2) ○		
69	壺	残高 7.5	頭部片。頭部下位にクシ彫き沈線文 6条以上あり。1/4の残存。	ハケ (9本/cm)	ハケ (8本/cm)	淡灰青褐色 淡灰褐色	石・長(1~3) ○	黒斑	
70	壺	残高 5.1	頭部片。小片。	ハケ (9本/cm)	ナデ ハケ→ヨコナデ	淡灰褐色 淡灰褐色	石・長(1~2) ○	黒斑	

表 16 地点不明出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残 存	材 質	法 量				備 考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
63	鏡	1/4	頁岩	5.60	5.40	0.90	31.26		29

表 17 地点不明出土遺物観察表 銭貨

番号	銭 名	初鑄年	法 量					備 考	図版
			銭径(cm)	孔径(cm)	外縁厚(cm)	内縁厚(cm)	重さ(g)		
71	寛永通寶	1636(寛永十三)年	2.45	0.55	0.16	0.09	4.25		29

# 写真図版



1. 若草町遠望（西より）



2. 3次・4次調査地遠景（西上空より） 3次調査地 ▲ ・4次調査地 △

若草町遺跡3次調査



1. 調査前状況（南東より）



2. 2区北壁土層堆積状況（南より）

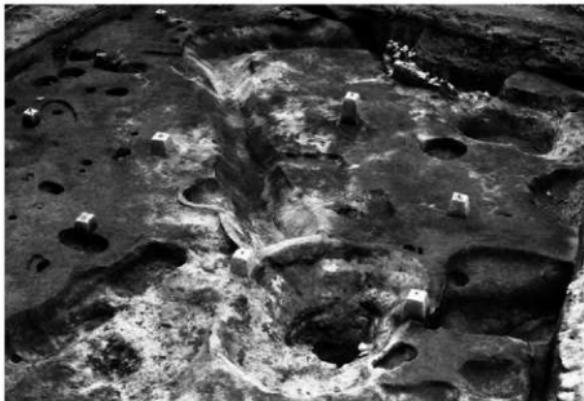
図版  
3



1. 1区 全景と遺構検出状況（東より）



2. 1区 周溝墓1掘削状況（東より）



1. 1区 周溝墓3・SD6  
掘削状況（東より）



2. 2区 周溝墓3・SX1  
掘削状況（北西より）



3. 1区 周溝墓3・SD6  
遺物出土状況（南より）

図版  
5



1. 1区 周溝墓1・SD3遺物出土状況(南より)



2. 1区 SK1遺物出土状況(東より)



3. 1区 SK3検出状況(北より)



4. 1区 SK2検出状況(東より)



5. 1区 壺棺検出状況①(東より)



6. 1区 壺棺検出状況②(北より)



7. 1区 SK11掘削状況(東より)

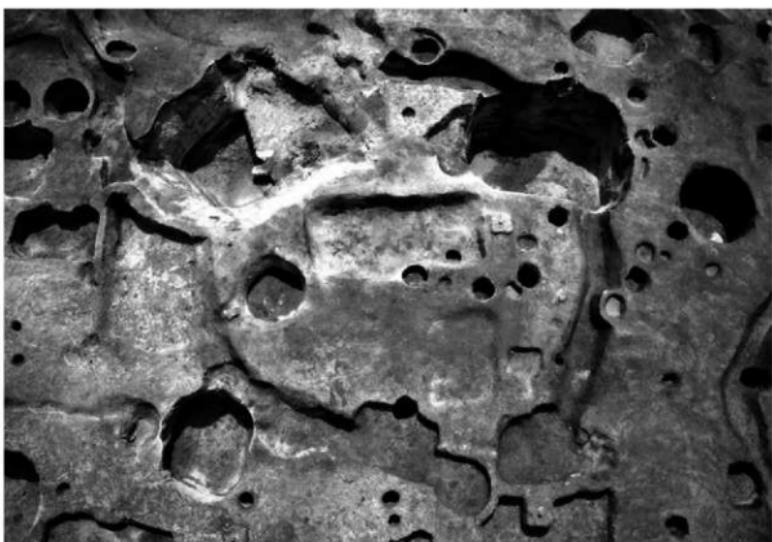


8. 1区 SB1掘削状況(南東より)

## 若草町遺跡3次調査



1. 2区 遺構検出状況（南より）



2. 2区 周溝墓2〔SK33・SD9〕完掘状況（北より）

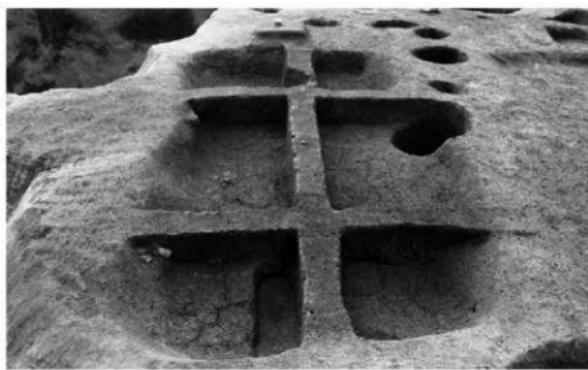
図版  
7



1. 2区 周溝墓2  
[SK33・SD9] 検出状況  
(北より)



2. 2区 周溝墓2 [SK33]  
検出状況 (北より)



3. 2区 周溝墓2 [SK33]  
掘削状況 (東より)



1. 2区 SX1 遺物出土  
状況（南より）



2. 2区 SX1 遺物出土  
状況（北東より）

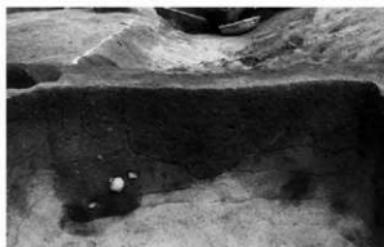


3. 2区 周溝墓3・SD6  
土層堆積状況（北西より）

図版  
9



1. 2区 周溝墓3・4掘削状況(東より)



2. 2区 挖立1・SP22とSD7 土層断面(南より)



3. 2区 SE01掘削状況(北より)



4. 2区 SK34 遺物出土状況(北より)



5. 2区 挖立1・SD7 掘削状況(北東より)

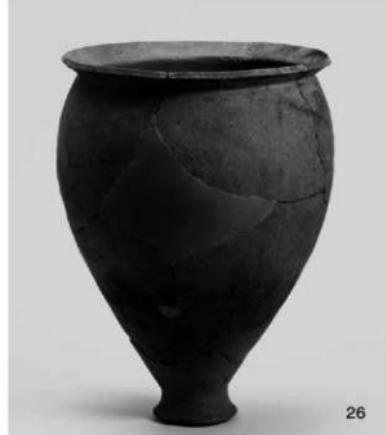
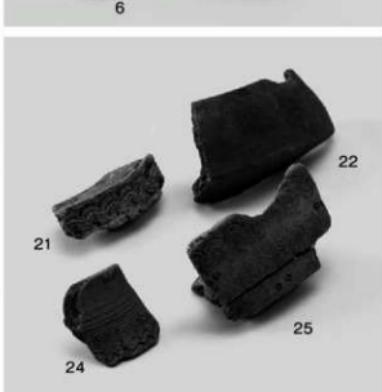


1. 1区 遺構発掘状況（東より）

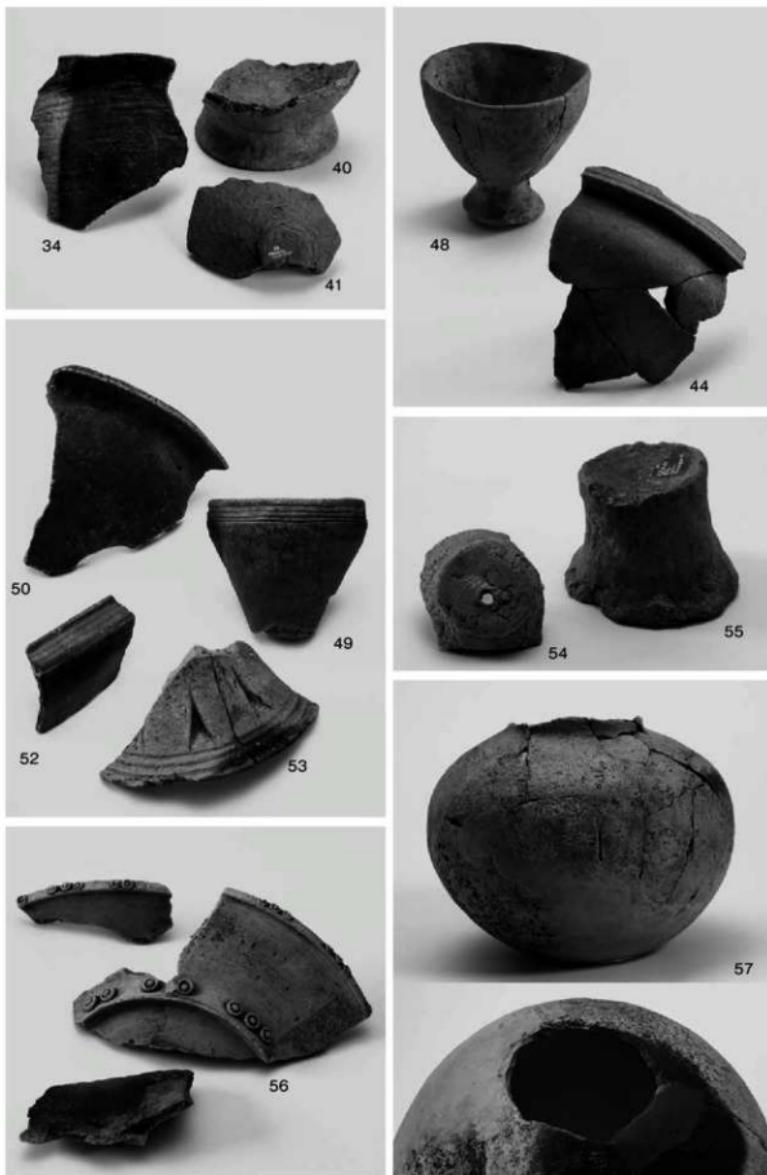


2. 2区 遺構発掘状況（西より）

図版  
11

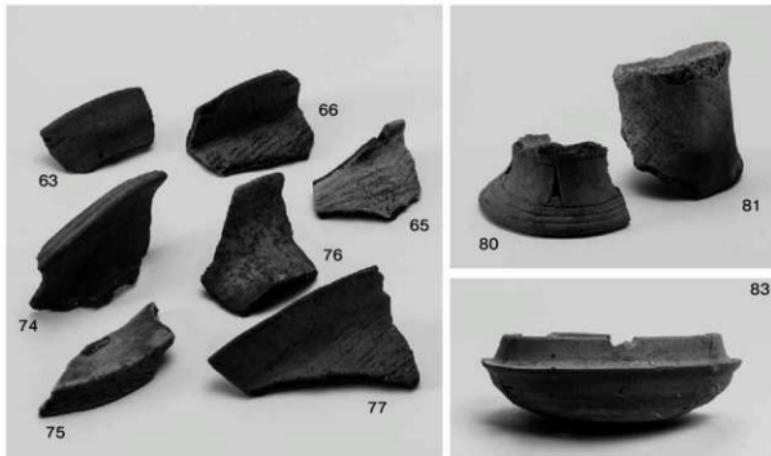


1. 出土遺物（周溝墓1・SD3：1～5、周溝墓2・SD9：6・7、周溝墓3・SD6：8～9・11・17～19・21・22・24～26・36）

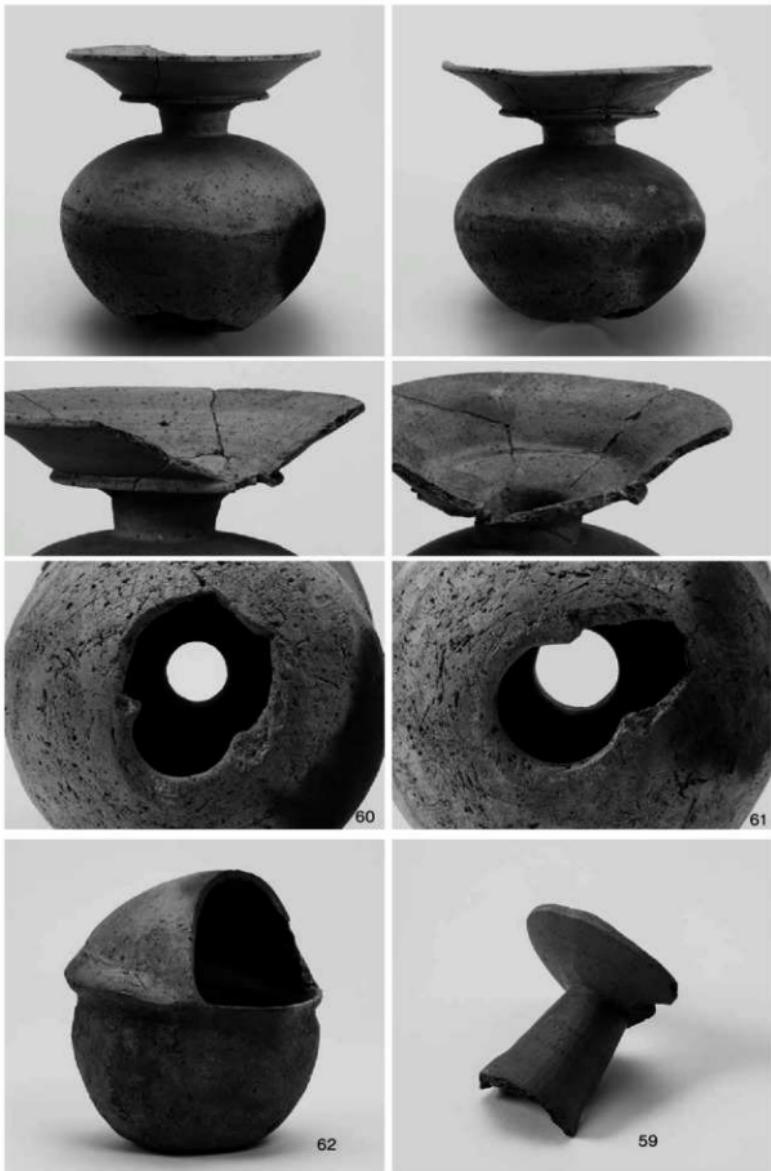


1. 出土遺物（周溝墓3・SD6：34・40・41・44・48～50・52～57）

図版  
13



1. 出土遺物 (周溝墓 4: 63・65・66・74~77・80・81・83、周溝墓 5: 84、周溝墓 7: 89・91、SD1: 95・96・98)



1. 出土遺物 (SX1 : 59 ~ 62)

図版  
15



131



135



100

99



105



102

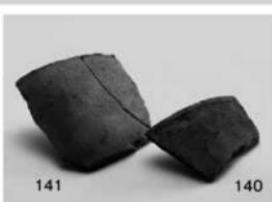


107



116

1. 出土遺物 (SK34:131、SK1:99・100、SK2:102、SK3:105・107、SK7:116、SK36:135)

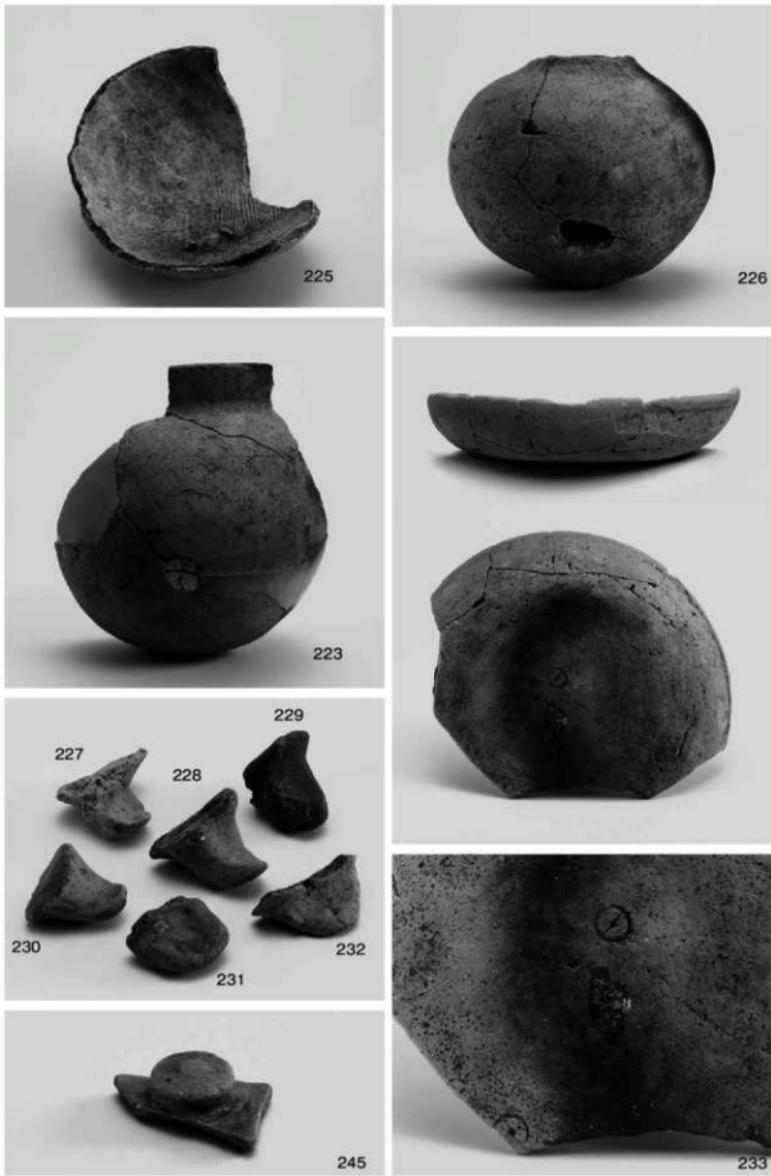


1. 出土遺物（壺棺：136・137、SB1：139～141・143・144、掘立1 SP22：145）

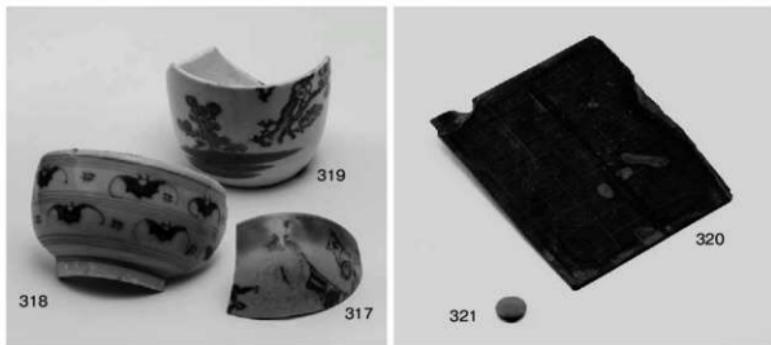
図版  
17



1. 出土遺物（包含層・その他：169・175・176・181・184・190・194～197・202・210・  
212・214・216～222）



1. 出土遺物（包含層・その他：223・225～233・245）



1. 出土遺物（包含層・その他：236～285・299～302、井戸跡 SE01：317～321）



1. 出土遺物 (SK33 : 305、SK049 : 307 ~ 316、その他 : 342 ~ 345・347 ~ 353)

図版  
21



1. 調査地全景（南より）



2. 基本土層（南東より）



1. 遺構完掘状況（北東より）



2. 若草7号墳遺物出土状況（北より）

図版  
23



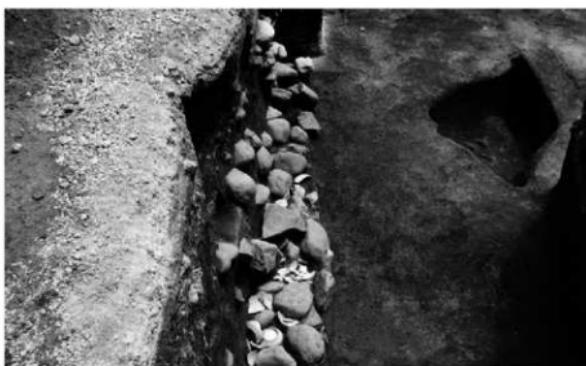
1. 拡張区遺構検出状況（北より）



2. 若草 7 号墳石室全景（北より）



1. SD1 遺物出土状況  
(南より)

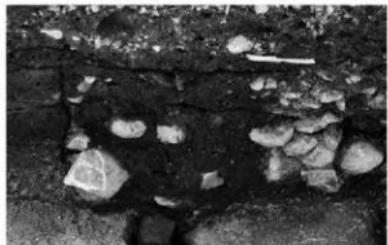


2. SD1 遺物出土状況  
(西より)



3. SD1 完掘状況  
(南東より)

図版  
25



1. 挖立1 SP1 検出状況（北より）



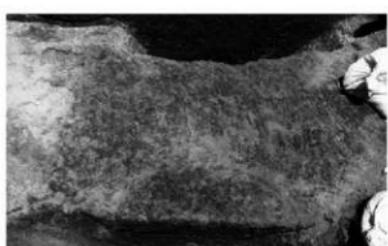
2. 挖立1 SP2 遺物出土状況（南より）



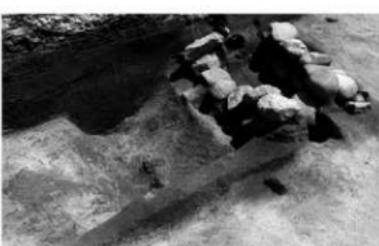
3. 挖立1 SP3 検出状況（北より）



4. SK2 完掘状況（北より）



5. SD2 検出状況（南より）



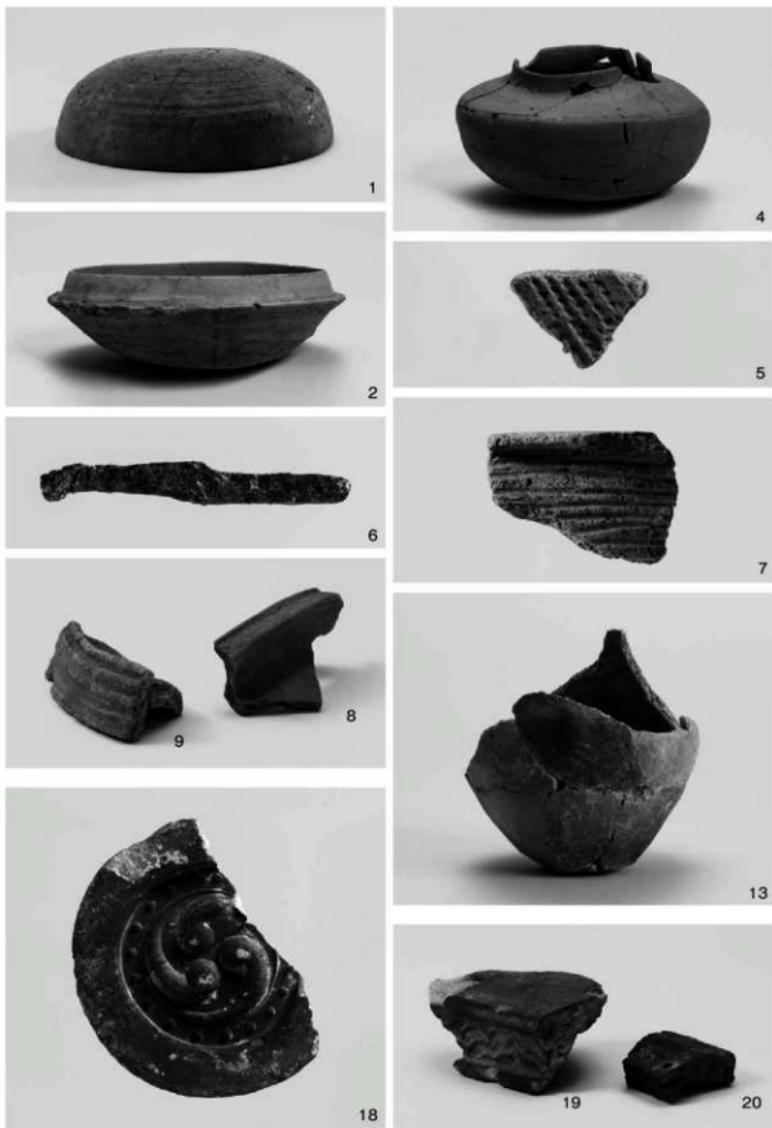
6. SD2 完掘状況（南西より）



7. SD3 検出状況（北より）



8. SD3, SK3+5 完掘状況（北東より）



1. 出土遺物（若草7号墳：1・2・4～9・13、掘立1：18～20）

図版  
27



22



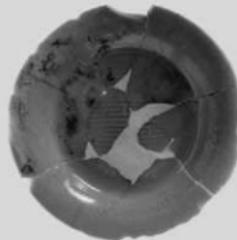
24



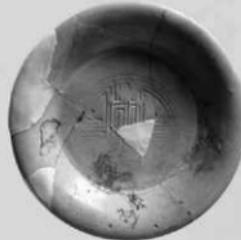
26



27

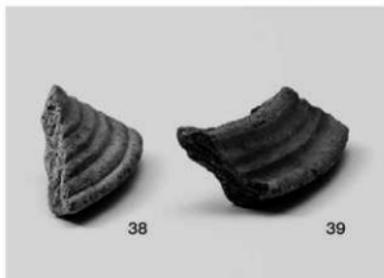


28



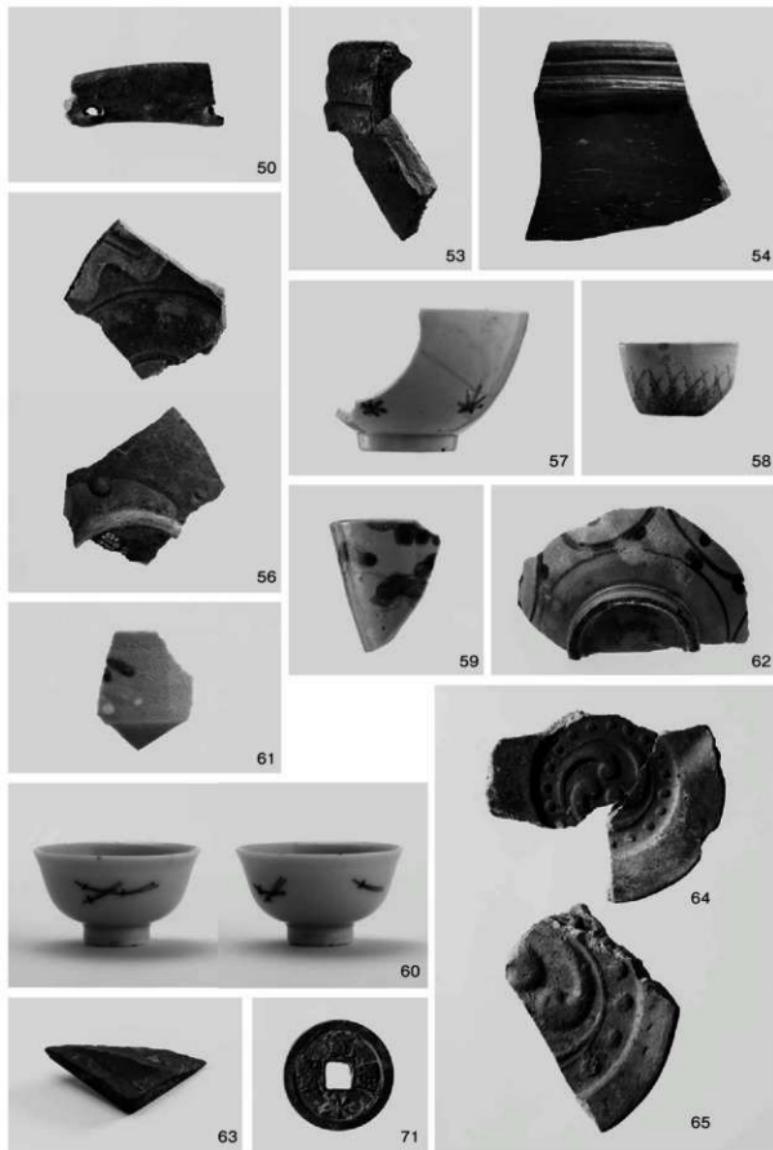
29

1. 出土遺物 (SD1 ① : 22・24・26～29)



1. 出土遺物 (SD1 ② : 30、SK1 : 31・32、SK2 : 36 ~ 39、第Ⅲ層 : 48)

図版  
29



1. 出土遺物（地点不明：50・53・54・56～65・71）

## 報 告 書 抄 錄

ふりがな	わかくさちょういせき さんじ よじ ちょうさ
書名	若草町遺跡 - 3次・4次調査 -
副書名	
卷次	
シリーズ名	松山市文化財調査報告書
シリーズ番号	第205集
編著者名	宮内慎一・相原浩二・水本完児
編集機関	公益財団法人 松山市文化・スポーツ振興財団 埋蔵文化財センター
所在地	〒791-8032 愛媛県松山市南斎院町乙67番地6 TEL089-923-6363
発行年月日	西暦2022(令和4)年3月31日

## 編集後記

3次調査の報告書作成については、調査後27年の間に途切れ途切れながらも図面整理をしてきたつもりであったが、いざ報告書刊行作業となると整理時間や紙面上の都合もあり遺構や遺物を半分程度しか図示することができなかつた事は大いに反省すべきことであった。

さて、今回の3次調査では、周溝墓8基を確認し、規模によって大型と小型の2種に分類した。その結果、大型4基、小型4基のグループに分けられた。具体的な時期は明確ではないが、切り合い関係により小型のものが先行すると思われる。主体部は、2基の小型の周溝墓で検出した。いずれも地山面を掘り込んだ土坑である。主体部からの出土遺物は無く、棺内外に副葬品を伴わない。大型の周溝墓の主体部は、削平や周溝郭内の現代坑などの影響のためか見つかっていない。このほか、見つからない理由の一つとして、主体部は墳丘盛土内に造られ、痕跡が地山面まで達っていない可能性も考えられる。ただし、墳丘盛土は今回の調査では確認していない。また、1次調査では周溝郭内に壺棺11基を数える大型の周溝墓が確認されている。壺棺はいずれも地山に達する土坑内に埋められているケースもあり、主体部は多様な様相を示している。

今後は、主体部や周溝の規模・形態、墳丘盛土の有無、周溝内出土遺物の精査などを念頭において、1次調査の報告書刊行を目指した整理作業を進めるとともに、1次調査と再度3次調査の考証をしていきたい。

松山市文化財調査報告書 第205集

## 若草町遺跡 - 3次・4次調査 -

---

2022年3月31日 発行

編 集 公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団  
埋 藏 文 化 財 セ ン タ ー  
〒791-8032 松山市南斎院町乙67番地6  
TEL (089) 923-6363

発 行 松山市教育委員会  
〒790-0003 松山市三番町六丁目6番地1  
TEL (089) 948-6605

印 刷 株式会社明朗社  
〒791-2112 伊予郡砥部町重光150-1  
TEL (089) 958-6868(代)

---